

筑後市内遺跡群 VII

市道若菜上中町村囲線改良工事に伴う
福岡県筑後市大字若菜所在遺跡の埋蔵文化財調査

筑後市文化財調査報告書
第67集

2005

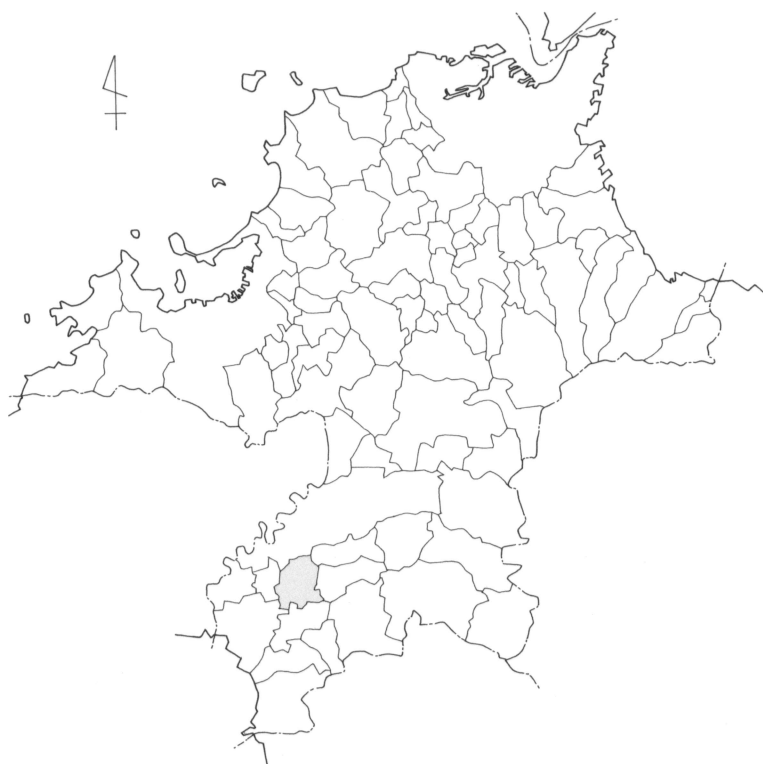
筑後市教育委員会

筑後市内遺跡群 VII

若菜大堀遺跡 第3次調査

若菜裏道遺跡 第1次調査

市道若菜上中町村囲線改良工事に伴う
福岡県筑後市大字若菜所在遺跡の埋蔵文化財調査



2005

筑後市教育委員会

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

大字若菜は市の中部に位置し、古代を代表する若菜森坊遺跡、県指定文化財である中世の滑石経など多様な埋蔵文化財が発見された歴史豊かな地区であります。この度報告する若菜大堀遺跡・若菜裏道遺跡は中世を中心とするもので、若菜における人々の生活空間の時間的な繋がりを推察する上で貴重な成果を得る事が出来ました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、各工事関係者、各関係期間、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成17年3月31日

筑後市教育委員会

教育長 城戸 一男

例 言

1. 本書は市道若菜上中町村囲線新規敷設に伴い、筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係が平成15・16年度に大字若菜において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は立石真二が製作し、浄書を佐々木寿代・平塚あけみ・横井理絵が行なった。
3. 本書使用の遺物実測図は石崎玲子・佐々木・平塚・横井が製作し、浄書を平塚・横井が行なった。
4. 本書使用の写真は立石が撮影した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位はG.N.である。
6. 本書が使用した座標は、国土調査法第「座標系を使用している。
7. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。
8. 本書に掲載した遺物の縮尺は1/3を基本とする。
9. 本書の執筆・編集は立石が行なった。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目次

第1章	調査経過と組織	
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	2
3	調査経過	3
第2章	位置と環境	
1	地理的環境	5
2	遺跡地周辺の地理的環境	6
3	歴史的環境	6
第3章	調査成果	
1	若菜大堀遺跡第3次調査	7
2	若菜裏道遺跡第1次調査	11
第4章	結語	33
付	表	34
図	版	

挿図目次

Fig. 1	調査地点 位置図 (S = 1/25,000)	3
Fig. 2	若菜大堀遺跡第3次調査区 位置図 (S = 1/2,500)	5
Fig. 3	若菜大堀遺跡第3次調査区 全体図 (S = 1/150)	6
Fig. 4	基本層序 (3SD01A軸土層断面) (S = 1/40)	7
Fig. 5	3SD01B・C軸土層断面 (S = 1/40)	7
Fig. 6	3SK10 土層断面 (S = 1/40)	7
Fig. 7	出土遺物 (S = 1/3・1/2)	8
Fig. 8	表採遺物 (S = 1/2)	9
Fig. 9	若菜裏道遺跡 位置図 (S = 1/2,500)	11
Fig.10	若菜裏道遺跡 遺構配置図 (S = 1/200)	12
Fig.11	若菜裏道遺跡 全体図 (S = 1/200)	13
Fig.12	1SD05 (S = 1/40)	14
Fig.13	1SD10 (S = 1/40)	14
Fig.14	1SD10 土層断面 (S = 1/40)	15

Fig.15	1 SE 0 1	(S = 1/40)	15
Fig.16	1 SK 1 5	(S = 1/40)	16
Fig.17	1 SD 1 0	I・II層出土遺物 (S = 1/3)	17
Fig.18	1 SD 1 0	III層出土遺物 (1) (S = 1/3)	18
Fig.19	1 SD 1 0	III層出土遺物 (2) (S = 1/3)	19
Fig.20	1 SD 1 0	III層出土遺物 (3) (S = 1/3・1/2)	21
Fig.21	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (1) (S = 1/3)	22
Fig.22	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (2) (S = 1/3)	23
Fig.23	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (3) (S = 1/3・1/2)	24
Fig.24	1 SD 1 0	V層出土遺物 (S = 1/3)	25
Fig.25	1 SD 1 0	トレンチ出土遺物 (S = 1/3)	26
Fig.26	1 SE 0 1・1 SX 1 7・1 SK 2 1	出土遺物 (S = 1/3)	28
Fig.27	表採遺物	(S = 1/3・1/4)	29
Fig.28	筑後市荘園関連地名位置図	(S = 1/40,000)	31
Fig.29	『筑後将士軍談』	に見られる若菜滑石経	32

図 版 目 次

Pla. 1	1	若菜大堀遺跡 第3次調査区 A区全景 (北から)
	2	若菜大堀遺跡 第3次調査区 B区全景 (北から)
Pla. 2	1	基本層序 (3 SD 0 1 A軸土層断面) (北から)
	2	3 SD 0 1 完掘状況 (北から)
Pla. 3	1	3 SD 0 1 B軸 土層断面 (南から)
	2	3 SD 0 1 C軸 土層断面 (南から)
Pla. 4	1	3 SK 1 0 完掘状況 (北から)
	2	3 SK 1 0 土層断面 (南から)
Pla. 5	1	3 SD 0 1 出土遺物
	2	3 SP 0 2・0 3・0 4 出土遺物
Pla. 6	1	3 SK 0 5 出土遺物
	2	3 SK 0 6 出土遺物
Pla. 7	1	若菜裏道遺跡 全景 (上から)
	2	若菜裏道遺跡 全景 (北から)
Pla. 8	1	1 SD 1 0 完掘状況 (上から)
	2	1 SD 1 0 完掘状況 (西から)
Pla. 9	1	1 SD 1 0 土層断面 (西から)
	2	1 SD 1 0 工具痕跡 (南から)
Pla.10	1	1 SD 0 5 (西から)
	2	1 SD 0 5 土層断面 (西から)
Pla.11	1	1 SE 0 1・SD 0 5 (上から)
	2	1 SE 0 1 (北から)
Pla.12	1	1 SE 0 1 土層断面 (西から)
	2	1 SE 0 1 たち割り状況 (南西から)

Pla.13	1	1 SK 1 5	完掘状況 (東から)
	2	1 SK 1 5	土層断面 (東から)
Pla.14	1	1 SD 1 0	I・II層出土遺物
Pla.15	1	1 SD 1 0	III層出土遺物 (1)
Pla.16	1	1 SD 1 0	III層出土遺物 (2)
Pla.17	1	1 SD 1 0	III層出土遺物 (3)
Pla.18	1	1 SD 1 0	III層出土遺物 (4)
	2	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (1)
Pla.19	1	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (2)
Pla.20	1	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (3)
Pla.21	1	1 SD 1 0	IV層出土遺物 (4)
	2	1 SD 1 0	V層出土遺物
	3	1 SD 1 0	トレンチ出土遺物 (1)
Pla.22	1	1 SD 1 0	トレンチ出土遺物 (2)
	2	1 SE 0 1・1 SX 1 7・1 SK 2 1	出土遺物
Pla.23	1		表採遺物

第1章 調査経過と組織

1. 調査に至る経過

平成15年7月3日、筑後市道路課（甲）より筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係（以後「乙」とする）に対し、大字若菜における道路改良工事に伴う埋蔵文化財の有無の確認申請がなされた。ここは若菜遺跡が所在し、筑後市中部を西流する山ノ井川の右岸、標高15mほどの低位丘陵部にあたり、ぶどうを中心とした果樹栽培が行なわれている地域である。「乙」はこれを受け、工事予定地において試掘による確認調査を行った。結果、予定工区の北側と南側において遺構が確認されたが、この時点では遺物の確認はなされておらず時期は不明であった。両者は協議を行い、平成15年度に北側、16年度に南側の発掘調査を行うこととなった。

2. 調査組織

(1) 確認調査体制（平成15年度）

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良（～H15.9.30）	城戸 一男（H15.10.1～）			
教育部長	菰原 修				
社会教育課長	松永盛四郎				
社会教育係長	成清 平和				
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士（確認調査担当）		
文化財学芸員	立石 真二				

(2) 若菜大堀遺跡第3次調査体制（平成15年度）

調査主体	筑後市教育委員会				
教育長	牟田口和良（～H15.9.30）	城戸 一男（H15.10.1～）			
教育部長	菰原 修				
社会教育課長	松永盛四郎				
文化係長	成清 平和				
文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士		
文化財学芸員	立石 真二（発掘調査担当）				

調査作業	池末 桂子	今山三咲子	植田 勝子	奥村 太郎	川添 幸子
（五十音順）	古賀三ツ保	中村 富男	馬場千鶴子	馬場 浩	原 清隆
	深町 泰代	松尾喜代美	森山美津子		
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ			
整理作業	佐々木寿代	野口 晴香	野間口靖子	横井 理絵	

(3) 若菜裏道遺跡第1次調査体制（平成16年度）

調査主体	筑後市教育委員会	
教育長	城戸 一男	
教育部長	菰原 修	
社会教育課長	田中 僚一	
文化係長	成清 平和	

文化財専門職	永見 秀徳	小林 勇作	上村 英士			
文化財学芸員	阿比留士朗	立石 真二	(発掘調査担当)			
調査作業	今山三咲子	植田 勝子	川添 幸子	古賀三ツ保	中村 富男	
(五十音順)	馬場千鶴子	馬場 浩	原 清隆	松尾喜代美		
整理補助員	仲 文恵	平塚あけみ				
整理作業	石崎 玲子	佐々木寿代	野口 晴香	野間口靖子	横井 理絵	

3. 調査の経過

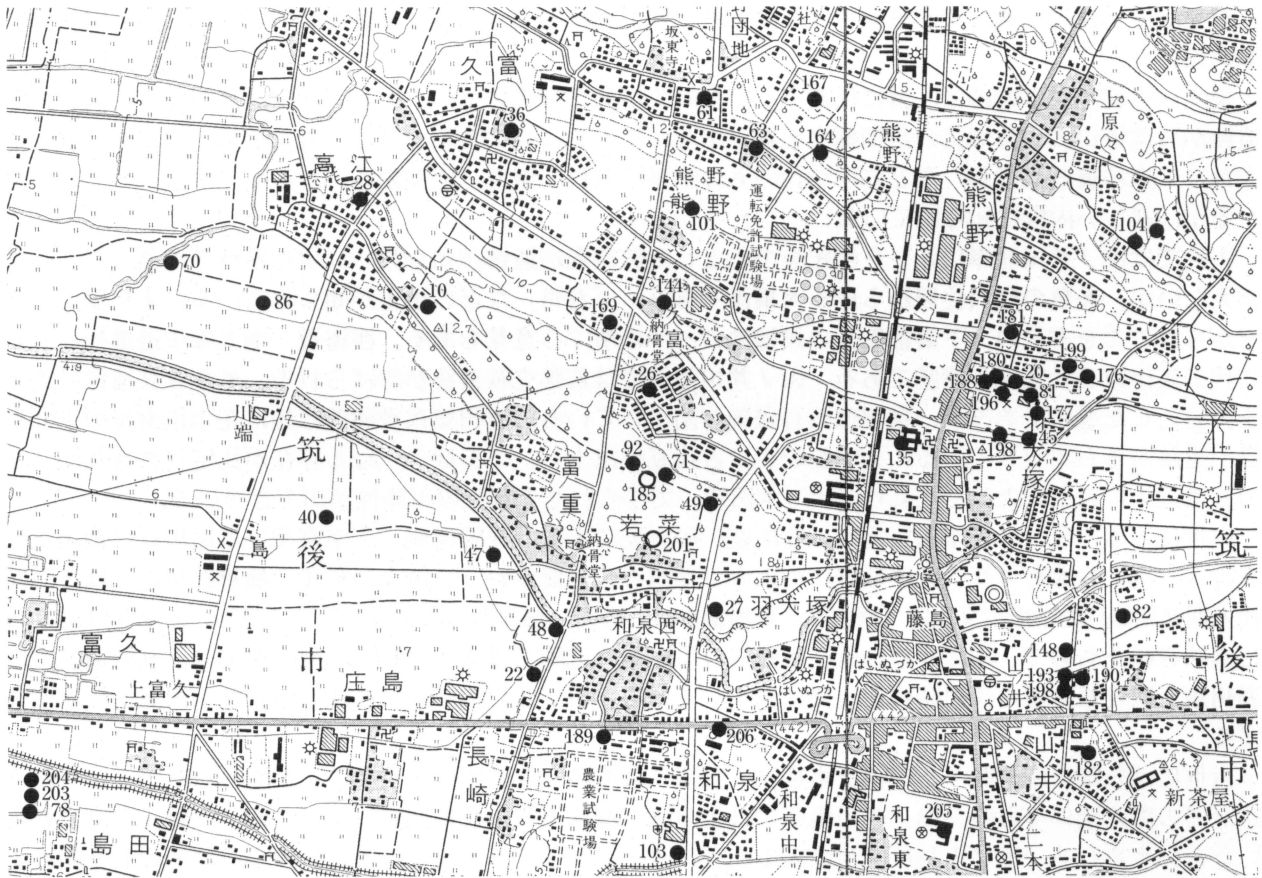
なお、発掘調査および報告書作成に際し、各関係機関に多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に際し、貴重な御教示・御指導を頂いた。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

小川 泰樹、斎部 麻矢（福岡県教育庁）、山村 信榮、井上 信正（太宰府市教育委員会）、狭川 真一（元興寺文化財研究所）

第2章 位置と環境

1 地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業



7 前津中ノ玉遺跡1次	49 若菜鞘ノ本遺跡1次	101 久富大門口遺跡	185 若菜大堀遺跡3次
10 高江遺跡1次	45 羽犬塚射場ノ本遺跡2次	103 和泉近道遺跡	188 羽犬塚中道遺跡4次
20 羽犬塚中道遺跡1次	61 熊野屋敷遺跡1次	104 前津中ノ玉遺跡1次	189 和泉粉町遺跡
22 長崎坊田遺跡	63 蔵敷東野屋敷2次	135 羽犬塚寺ノ脇遺跡	190 山ノ井南野遺跡2次
26 久富市ノ玉遺跡1次	63 熊野屋敷遺跡2次	148 山ノ井川口遺跡	193 山ノ井南野遺跡3次
27 若菜森坊遺跡	70 高江柳遺跡	164 熊野塚根遺跡	196 羽犬塚中道遺跡5次
28 高江原口遺跡	71 若菜大堀遺跡1次	167 熊野山ノ前遺跡	198 山ノ井南野遺跡4次
36 久富島居遺跡	78 島田外屋敷遺跡	169 久富綿打遺跡	199 羽犬塚山ノ前遺跡2次
40 若菜立萩遺跡	81 羽犬塚中道遺跡2次	176 羽犬塚山ノ前遺跡1次	201 若菜裏道遺跡1次
44 久富斗代遺跡	82 徳久中牟田遺跡	177 羽犬塚射場ノ本遺跡3次	203 島田彼岸田遺跡1次
45 羽犬塚射場ノ本遺跡1次	86 高江キレット遺跡	180 羽犬塚中道遺跡3次	204 島田彼岸田遺跡2次
47 若菜田中前遺跡	92 若菜大堀遺跡2次	181 羽犬塚ヶ野遺跡	205 和泉トノ工遺跡
48 若菜湖ノ江遺跡	101 久富大門口遺跡	182 山ノ井南野遺跡	206 和泉小山口遺跡

Fig.1 調査地点 位置図 (S=1/25,000)

※上記遺跡の番号は当市が採用している発掘調査番号による

用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

2 遺跡周辺の地理的環境

若菜遺跡は筑後市中央の丘陵部に位置し、丘陵南側には筑後川水系山ノ井川が西流する。標高は約15m、大部分がぶどうなどの果樹栽培が行われる地帯である。山ノ井川が大きく蛇行する丘陵西部は標高約18mと高くなり、若菜八幡神社が所在する。

3 歴史的環境

若菜は山ノ井川を挟んで北東側の丘陵部と南西側の平野部に分かれ、遺跡は北の丘陵部に多く営まれる傾向にある。

縄文～古墳時代の遺跡は、南に位置する字長崎では縄文時代の空山・坊田・石塚遺跡があり、長崎坊田遺跡からは野口式・曾畑式の前期縄文土器が出土している。大字若菜一帯では若菜遺跡・辻遺跡（共に散布地）・森坊遺跡（墳墓）など弥生時代のものが挙げられ、戦後「巴型銅器」なるものが出土したと言われるが、詳しい内容は知られていない。

古代では山ノ井川北岸に8～9世紀を中心とした若菜森坊遺跡が知られる。現在整理中の為、詳しくは言えないが、多数の竪穴住居から成る大集落であり、「石帯」などの出土が知られている。また歴史地理学からはここを古代の「下妻郡衙」の候補地の一つに挙げる意見もある。西海道、羽犬塚中道遺跡と共に古代の筑後市を代表する遺跡である。山ノ井川南岸では若菜立萩遺跡が挙げられる。若菜立萩遺跡は近世を中心とした遺跡であるが、越州窯系青磁碗が出土している。越州窯系青磁碗は他に花宗川南岸の下北島櫛引遺跡からも出土している。大字長崎では古代瓦が出土し、「石塚寺」なる存在が比定されきたが、この瓦は近年の発掘調査などにより近代「水田焼」で作られた土器瓦の可能性が出てきている。

中世に入ると現在の花宗川以北は「広川荘」の支配に入る。丘陵西側、大字富重には広川荘の現地支配を行った坂東寺熊野神社（大字熊野）の末寺「普門寺」が置かれ、丘陵上の若菜八幡神社付近では江戸時代末期発見された県指定文化財「滑石経」が埋納されている。銘文から「王平（仁平の誤り）三年（1153）」に奉納されたもので、現在4枚の所在が知られている。近隣では高江遺跡（墓地）があり、高江遺跡では湖州鏡と同安系青磁が江戸時代と現代に出土している。山ノ井川南岸には長崎坊田遺跡（居館跡）が所在する。

近世には若菜大堀遺跡・若菜鞆ノ本遺跡・若菜立萩遺跡・若菜田中前遺跡などが知られるが、多くが水路などの農業関係である。山ノ井川南岸にはこの頃三潞郡西牟田氏の残党により「淵ノ上村」が営まれていたと伝えられる。淵ノ上村は明治に入ると人口流出が激しく、現在では若菜区の小字にその名を留めるのみとなっている。

※ 中世に関してはFig.28を参照

【参考文献】

右田乙二郎	『筑後二川郷土史』	1983	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
永見 秀徳	『高江遺跡』	1991	筑後市教育委員会
小林 勇作	『筑後北部第二地区遺跡群』	1995	筑後市教育委員会
小林 勇作	『長崎坊田遺跡』	1999	筑後市教育委員会
小林 勇作・編	『筑後市内遺跡群Ⅱ』	2001	筑後市教育委員会
狭川 真一・編	『筑後市内遺跡群Ⅴ』	2003	筑後市教育委員会・（財）元興寺文化財研究所

第3章 調査成果

1 若菜大堀遺跡第3次調査

1) はじめに

若菜大堀遺跡第3次調査区は、筑後市大字若菜字大堀1345-1外に所在する。若菜の丘陵状に位置し、標高は約15m、調査対象面積は約457.5㎡である。北側を東西に横断する市道若菜北原富重野中線の建設の際には若菜大堀遺跡第1・2次調査、若菜鞘ノ本遺跡第1次調査が実施されている。調査は平成15年9月29日より始められ、同年10月27日に終了した。

2) 基本層序 (Fig. 4)

基本層序はA区南壁面で観察した。調査区は耕作土(2層)、黒色土(6・7層)、地山土(8層)の順で堆積し、遺構は黒色土の上から切り込んでいる。全体に東側に低く傾斜した不均一な堆積状況を示している。

3) 検出遺構

便宜上調査区を南側のA区と北側のB区に2分する。A区からは溝2、土壌3、柱穴3を確認した。B区からは柱穴1を確認している。



Fig. 2 若菜大堀遺跡第3次調査区 位置図 (S=1/2,500)

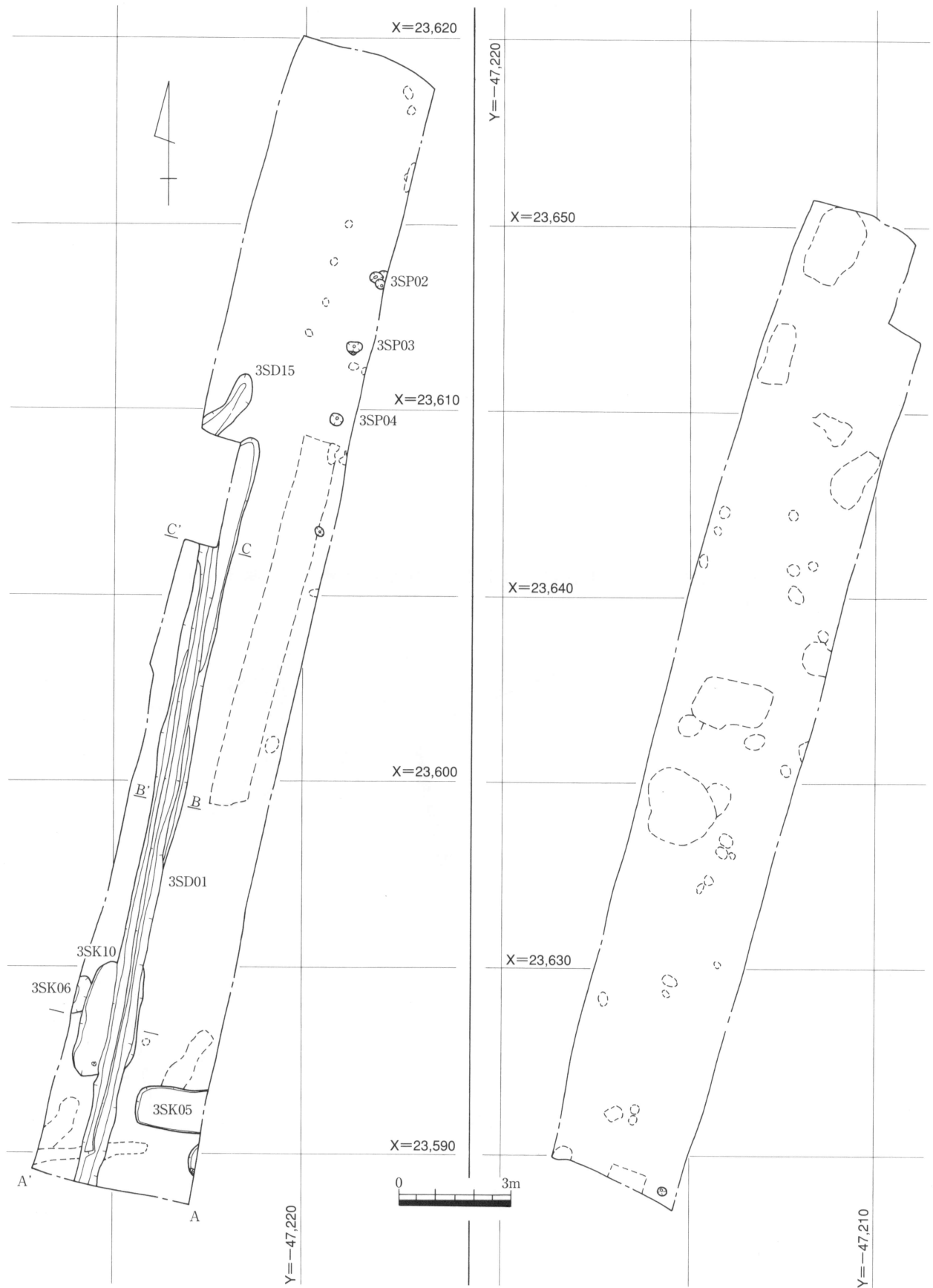
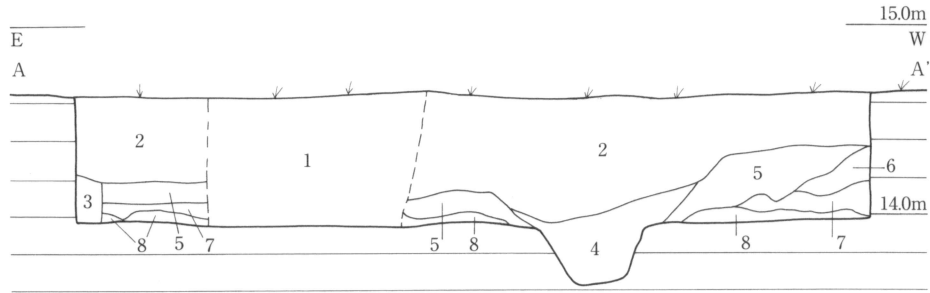


Fig. 3 若菜大堀遺跡第3次調査区 全体図 (S = 1/150)



- | | | | |
|--------|-----------------|---------|-----------|
| 1 茶灰色土 | トレンチ跡 | 5 暗灰茶色土 | 黄色粒子を少し含む |
| 2 茶黒色土 | 耕作土 | 6 黒灰色土 | クロボク |
| 3 黄灰色土 | しまりゆるい | 7 黒色土 | クロボク |
| 4 茶黒色土 | 3SD01埋土、橙色土粒を含む | 8 黄灰色土 | 地山 |

Fig. 4 基本層序 (3SD01 A軸土層断面) (S = 1/40)

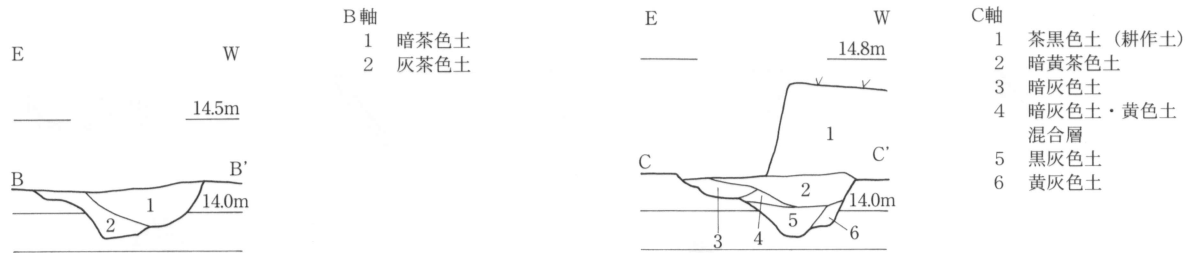


Fig. 5 3SD01 B・C軸土層断面 (S = 1/40)

溝状遺構

3SD01 (Fig. 3・5)

A区南側を縦断する形で確認された遺構である基本的には逆台形の断面を有し、部分的にテラスを有している。数回におよび掘り直しを行われているが、土層観察部位毎に埋土の状況が異なるため、どの程度の掘り直しが行われたかは不明である。この遺構からは須恵器甕、須恵器坏、須恵器鉢、須恵器小片、土師器皿、土師器鉢、土師器小片、瓦器碗、瓦器小片、青磁碗、白磁碗、白青磁合子、陶器壺、剥片鍬が出土している。

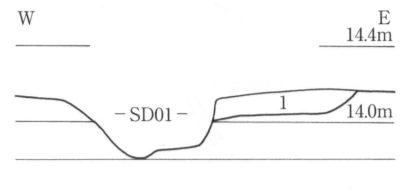
3SD15 (Fig. 3)

A区中央部にて確認された遺構である。埋土は暗茶色による単一埋土で、調査区の関係上その平面形は不明であるが皿状の断面を有する。ここからの出土遺物は無かった。

土 壤

3SK05 (Fig. 3)

A区南側で確認された土壌である。埋土は黒灰色土の単一埋土であり、5cm程度で完掘となった。ここからは土師器坏、土師器小片、瓦器小片、白磁小片が出土している。



- 1 黒灰色土 (黄色土粒多く含む)

Fig. 6 3SK10土層断面 (S = 1/40)

SK06 (Fig. 3)

A区南側で検出された、SK05に切られる土壌である。平面形は不明であるが断面は播鉢状となる。ここからは土鍋、土師器片を出土している。

SK10 (Fig. 3・6)

A区南側で検出された長方形と思われる土壌で、SD01切られる。埋土は黄色土粒子を多く含む黒灰色土による単一埋土で、断面形状は浅い台形状となる。ここからは弥生土器の甕が出土している。

4) 出土遺物 (Fig. 7)

3SD01 出土遺物

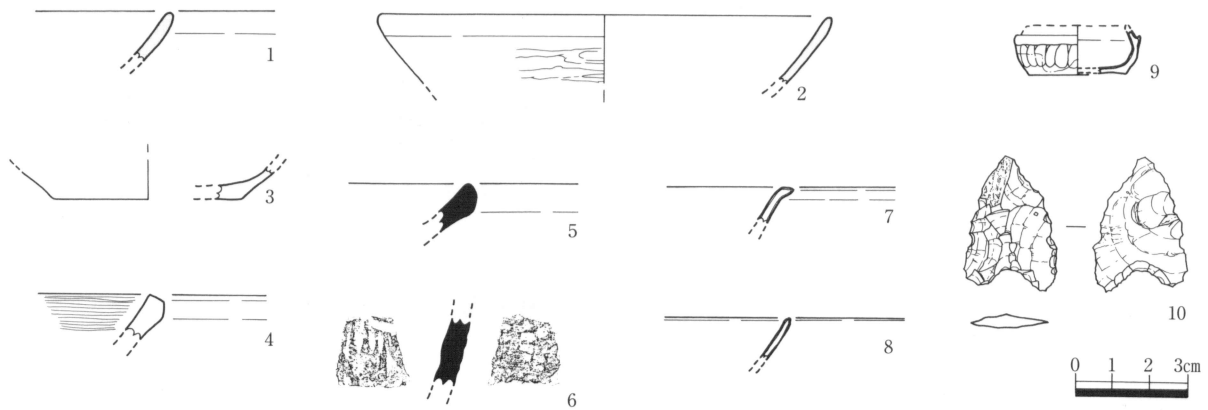
1・2は瓦器碗の口縁部破片で、口唇部は共に黒色化している。2は硬質に仕上がっており、外面にミガキ痕跡が見られる。

3は土師器の坏の底部破片である。色調は外面暗褐色で、底部に糸切り痕が見られる。

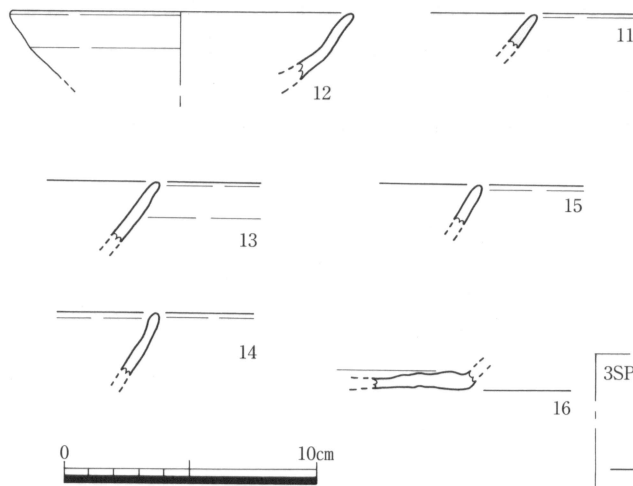
4は土師器鉢の口縁部破片である。

5は須恵器鉢の口縁部破片で、口唇部を肥厚する。

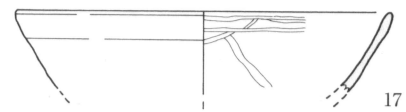
3SD01



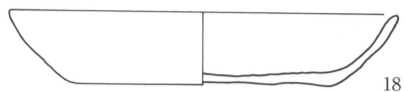
3SP02



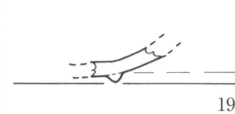
3SP03



3SK05



3SP04



3SK06



Fig. 7 若菜大堀遺跡第3次調査区 出土遺物 (S = 1/3・1/2)

6は須恵器の甕の胴部破片である。外面格子タタキ、内面平行宛て具痕が見られる。

7は白磁碗の口縁部破片で、嘴状の断面を有する。

8は青磁碗の口縁部破片である。茶緑色の透明釉を施し貫入が発達している。

9は青白磁の合子である。

10はサヌカイト製の剥片鏝である。

3 S P 0 2 出土遺物

11は瓦器碗の口縁部破片である。内外面共に黒色化しているが、摩滅しており調整は不明。

12～15は土師器の坏の口縁部破片である。12・13は外反、14は内彎する。

16は土師器の皿の底部破片である。底部切り離しは廻転篋切りか。

3 S P 0 3 出土遺物

17は瓦器碗の口縁部破片である。硬質に仕上がっており、口唇部は黒色化しているが、ミガキは丁寧には施されていない。

3 S P 0 4 出土遺物

19は瓦器碗の底部破片である。外面は淡灰色、内面は褐色を呈し貼付高台を有する。全体に摩滅しており調整は不明。

3 S K 0 5 出土遺物

18は土師器の坏であり、外底部を上にした形で出土した。器壁は薄く、全体にナデ調整で底部廻転糸切り。

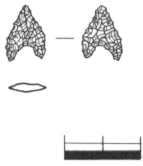
3 S K 0 6 出土遺物

20は土鍋の口縁部破片である。3mm大の小石を含む粗い胎土を有する。断面方形の口縁部を有し、端部には煤が付着する。

5) 小結

今回の調査で検出された遺構は3SD01を除いてはいずれも遺存状態は悪く、遺跡の性格を明確にしようものではなかった。3SD01に関しては、隣接する耕作地の地割りと平行し、北側終点も区割りの境界部に一致する。現況地割りに平行する溝は、若菜大堀遺跡第1次・第2次調査、若菜鞘ノ本遺跡などにも見られる。それらの開削は13世紀代に求める事が出来、水路として近世まで運用され丁寧に浚渫が行われていたと報告されている。狭川真一は総括の中で、「水路の管理者が往来できる環境が整備されてきたと思われ、そこが次第に管理用の小道として発達し現代に至ったのではなかろうか」と推察している。しかし、3SD01に関しては滞水、流水の痕跡はなく、現状で道路とはなっていない。また、出土遺物は中世のものであり、こちらの方が埋没は早いと考えられる。そのため何らかの区画溝として認識しておく。A区北側およびB区においては、試掘段階では遺構を認めたとする事だが、調査時点では木などの植物痕のみであった。遺構が認められないのはは削平などの影響ではなく生産空間として長く使用されてきたためと認識する。

遺物に関しては、その多くが小さな破片にすぎず、時期の特定に至るものではなかった。出土遺物は土師器が最も多く、瓦器(碗)、輸入磁器となり、国産と思われる磁器はほとんど見られなかった。これらから時代幅は大きい、当遺跡は中世に属するものと判断する。遺物の中には剥片鏝(Fig.7-10)の他、検出時に黒耀石製の打製石鏝を出土した(Fig.8)。これは全長1.5cmほどの丁寧な造りのものである。この近辺には弥生時代の辻遺跡、森坊遺跡(若菜森坊遺跡とは別の遺跡)が所在しており、これらに起因す



る遺物と考えている。

今回の調査では、前回の3遺跡と異なる溝の利用状況を読み取る事ができた。しかしながら、前回調査の溝がこの地域の灌漑にどのように利用されていたかの情報を得る事はできなかった。また、今回の調査区と前3者がどのように関連していくかも明確ではない。今後への課題を多く残す調査となった。

Fig. 8

表採遺物

(S=1/2)

【参考文献】

狭川 真一・編

『筑後市内遺跡群V』

2003

筑後市教育委員会・(財)元興寺文化財研究所

2 若菜裏道遺跡第1次調査

1) はじめに

若菜裏道遺跡第1次調査区は、筑後市大字若菜字裏道1444外に所在する。若菜の丘陵上・若菜集落のすぐ北側に位置し、地元の方の話によると戦後すぐに畑地として整地され削平を受けているとの事であった。現状の標高は約15m、調査対象面積は約200㎡である。調査は平成16年10月13日より始められ、同年11月17日に終了した。

2) 基本層序

基本層序は調査区東壁面で観察した。調査区は旧路盤（Ⅰ・Ⅱ層）、耕作土（Ⅲ層）、地山土（Ⅴ層）の層位を示す。またⅢ層とⅤ層の間には植物痕跡（Ⅳ層）も多く認められた。

3) 検出遺構

今回の調査区では溝2条、井戸1基、土壌2基を確認した。前述のように削平を受け、ブドウ栽培に伴う攪乱も多く、柱穴などは認められなかった。

溝状遺構

1SD05 (Fig.12)

調査区南側で約5.2m分を確認した遺構で、東南側の端部を1SE01に切られ、北西側へ調査区外へと伸びる。幅約0.7m、深さは0.1m。主軸の傾きはN-68°-Wを測り、断面系は皿状を呈す。滞水の痕跡は認められない。遺存状態は良好ではないが、1SE01との関連性があるため報告した。



Fig. 9 若菜裏道遺跡第1次調査区 位置図 (S=1/2,500)

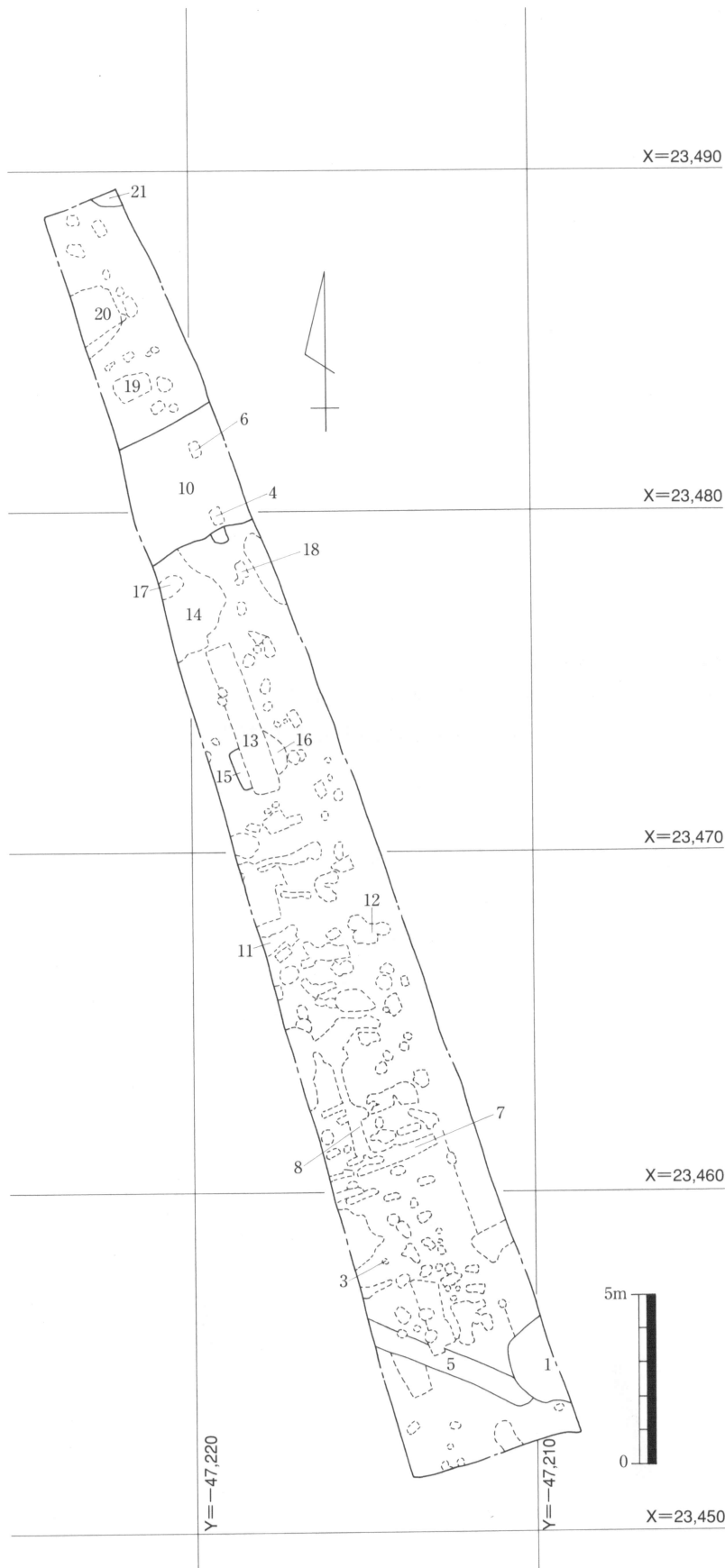


Fig.10 若菜裏道遺跡 遺構配置図 (S = 1/200)

この遺構からは土師器片を出土したが、図化するものではなかった。

1SD10 (Fig.13・14)

調査区北側で約3.2m分を確認した遺構で、東北から南西へと走る。幅約3.5m、深さ約0.9m。主軸の傾きはN-21°-Eを測り、断面系は逆台形状を呈する。北側壁面にはテラスが見られ、両壁面付近には遺構構築時のものと思われる工具痕跡が多数見られた。埋土は大きく5層に分層でき、1層および、層からは多くの青磁を出土している。

この遺構からは須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、青磁、白磁、陶器、石鍋、不明石製品を出土している (Fig.17~25)。

井戸

1SE01 (Fig.15)

調査区南側で1/2強を確認した不定形の遺構で、西側の1SD05を切る。当初は一連の土壌と考えていたが、南側に小さな円形の井戸が別に存在していることが判明した。テラス部分も当初はこの遺構に属するものと考えていたが、土層観察の結果別物である可能性が高い。このテラス部分は植物根痕により大きく乱れている。この遺構は1mも掘り下げない内から多量の水が湧き出す状況であった。後に重機による立ち割りをを行ったが、3mほど掘り下げても床面の確認は出来ず、埋土観察のため残っていた部分が湧水のため崩落、以後の観察は行わなかった。埋土は黒色土を主体とし、水分を多く含む。遺物の出土は上層部に見られ、下層ではほとんど見られなかった。

この遺構からは須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、青磁、磁器碗、陶器を出土している (Fig.26)。

土 墳

1SK15 (Fig.16)

調査区中央部で検出した角丸長方形の遺構で、重機痕 (SX13) に切られる。長軸約1.3m、短軸約0.8m、深さ約0.4m。主軸の傾きはN-20°-Wを測る。土層断面では段が認められ木棺墓の様な埋土状況を示すが、墓壙と結論しうる出土遺物等は確認されなかった。

この遺構からは土師器、陶器、現代瓦などを出土したが、凶化しうる物ではなかった。

1SK21 (Fig.11)

調査区北端で一部を検出した土墳である。埋土は主に黒灰色土を主体とするが、床面などは未確認である。

この遺構からは土師器皿 (Fig.26-24) を出土しているが、表土との分層面に近く、この遺構に属するものかは疑問点の残るものである。

4) 出土遺物

1SD10 出土遺物

1SD10埋土は大きく5層に分ける事ができ、それぞれで遺物を確認するかとができた。この内遺物量が多かったのはⅢ・Ⅳ層である。

1SD10Ⅰ層出土遺物 (Fig.17)

1は土師器の坏の口縁部細片である。全体磨滅。

2は土師器の坏の底部細片である。全体磨滅。

3は土師器の甕の口縁部細片である。外面にはハケ目、内面にはハケ目とケズリが施されている。内面調整の順序は小片の為不明。

4は同安系青磁碗の口縁部破片である。復元口径15.6cm。外面はヘラ

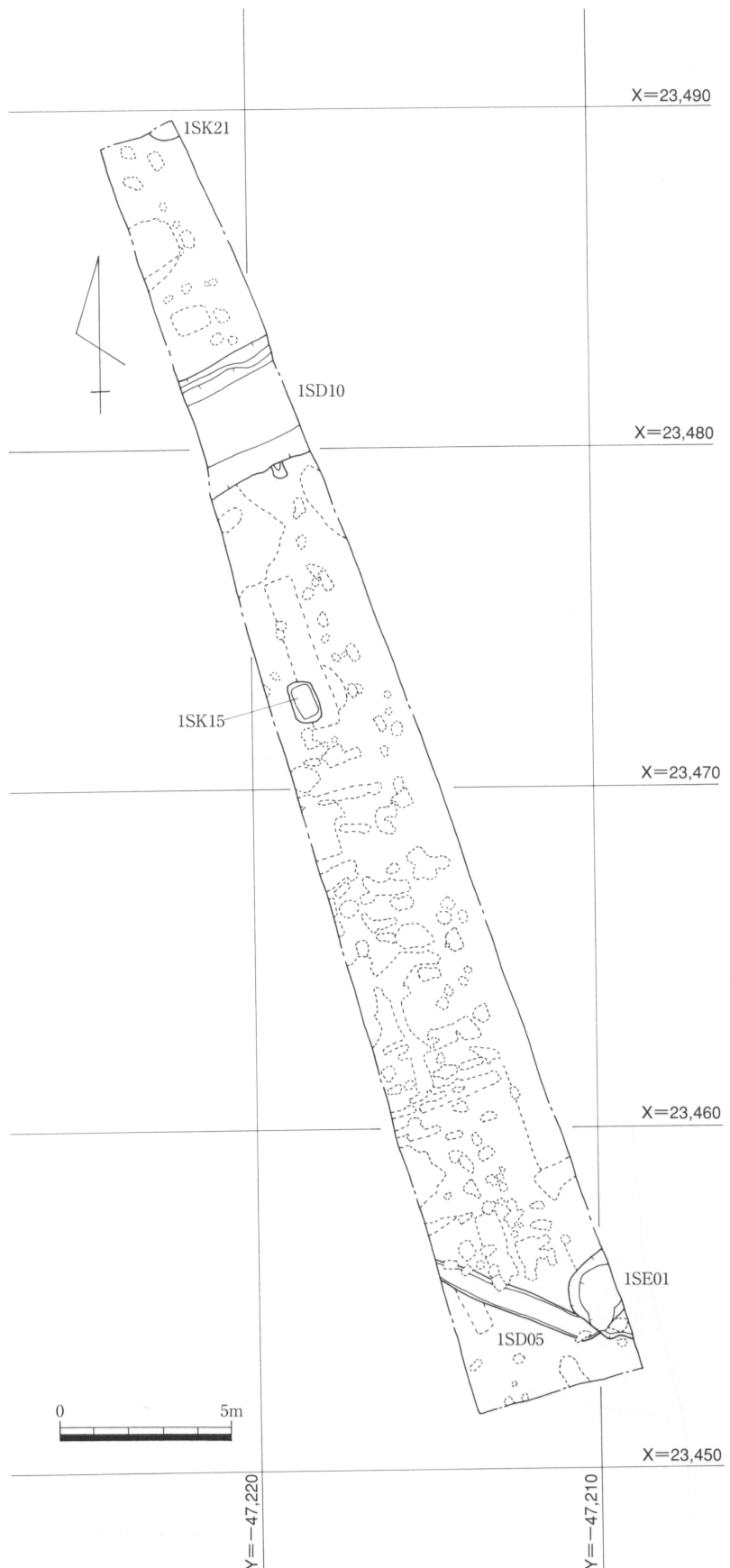


Fig.11 若菜裏道遺跡 全体図 (S = 1 / 200)

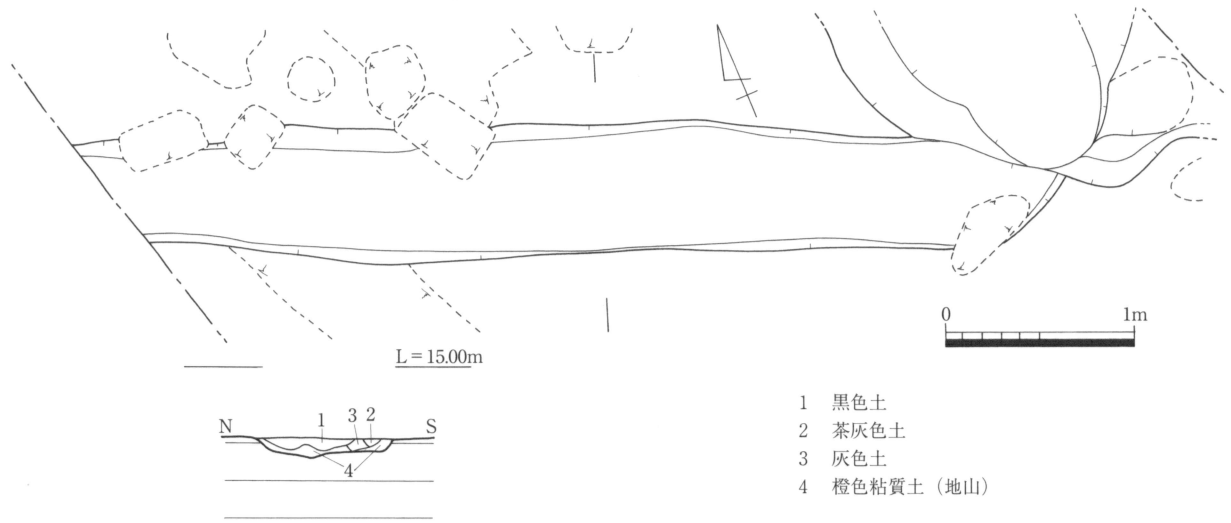


Fig.12 1SD05 (S=1/40)

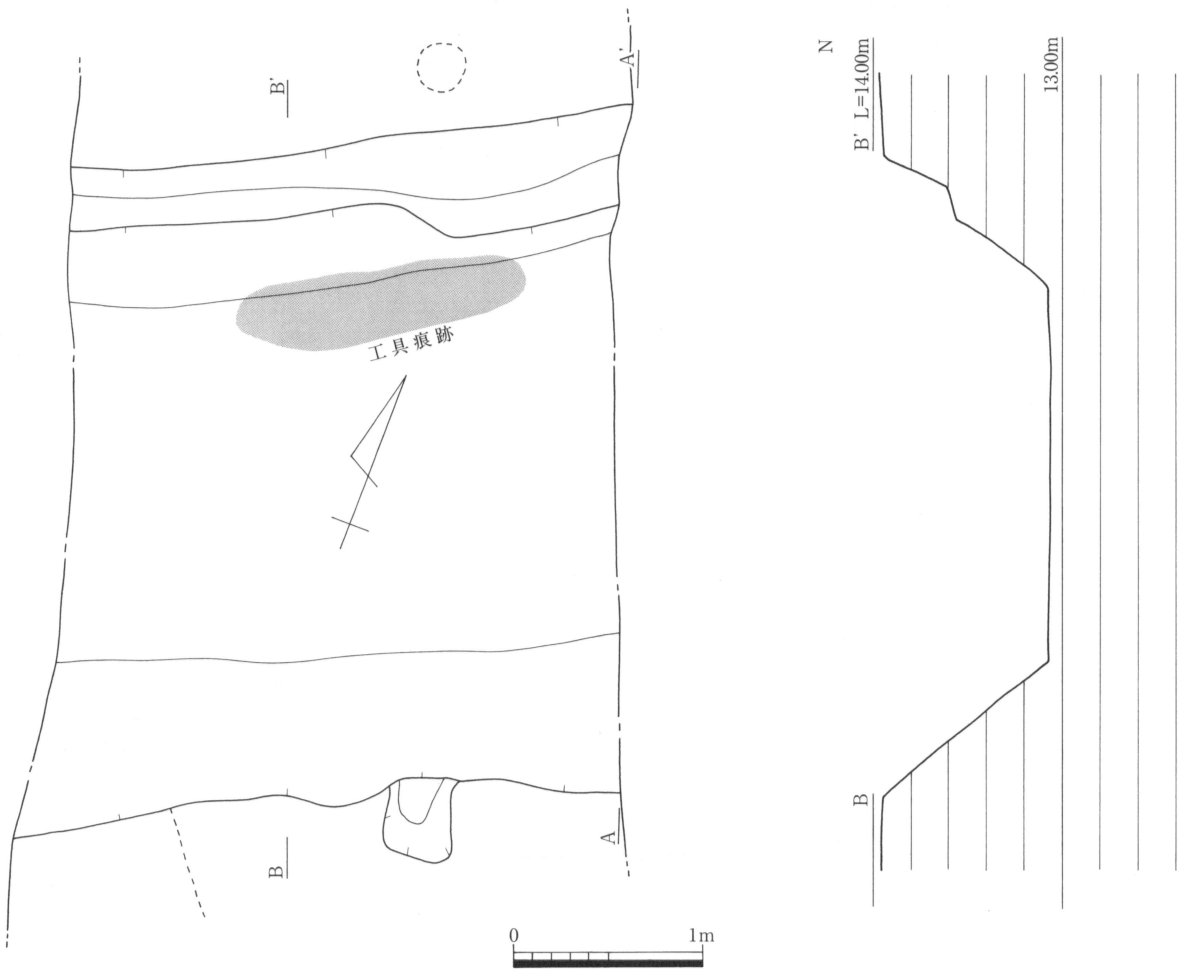
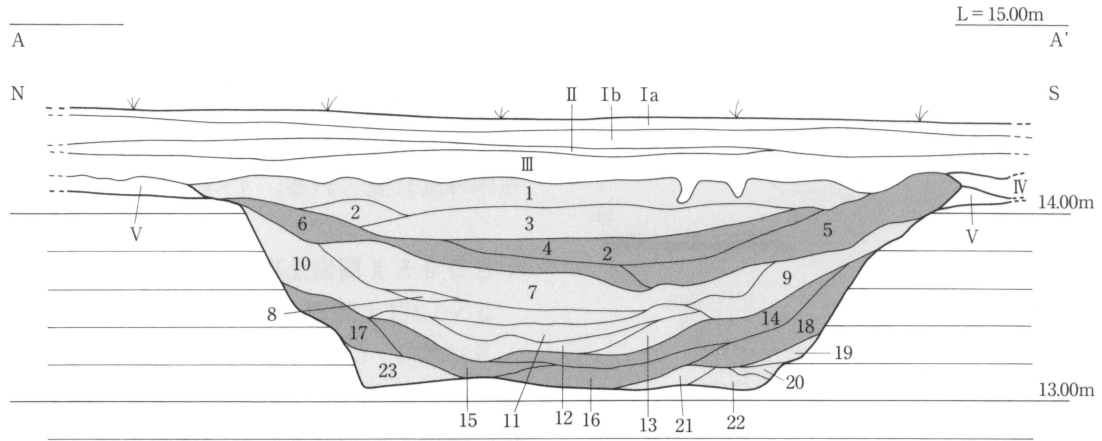


Fig.13 1SD10 (S=1/40)



基本層序

- I a 礫 (未舗装路面)
- I b 褐色土 (路面基盤面)
- II 橙色土 (路面基盤面)
- III 灰茶色土 (盛土、耕作土)
- V 橙色粘質土 (地山)

1SD10

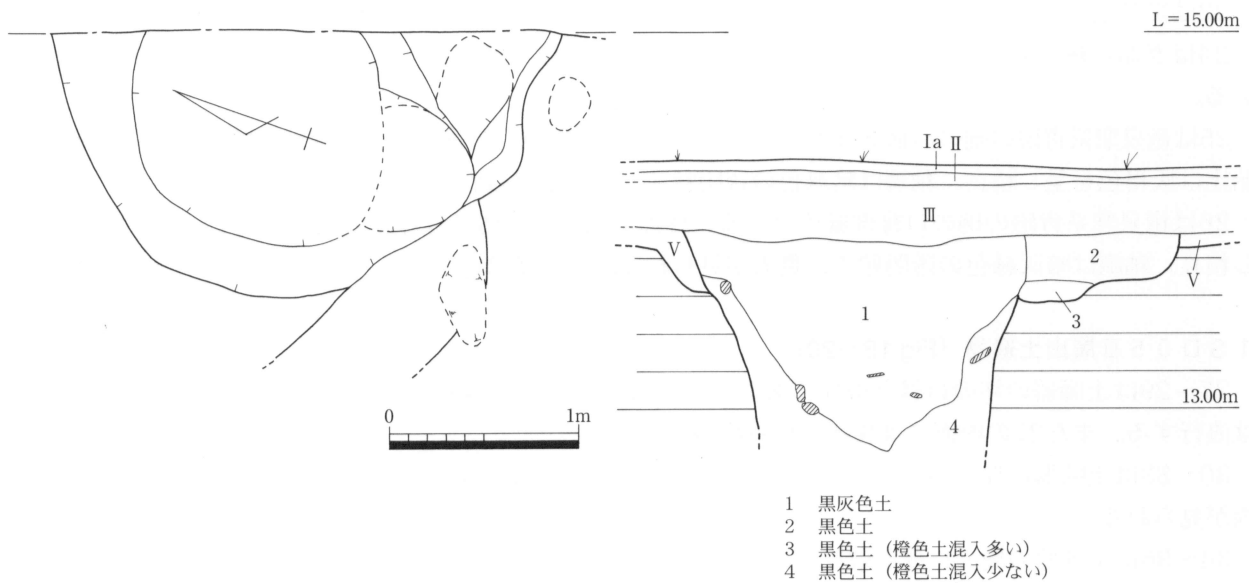
- 1 黒灰色土
- 2 黒灰色土 (橙色粒子少量)
- 3 暗灰色土 (橙色粒子多量)
- 4 暗灰色土
- 5 黒灰色土
- 6 黒灰色土 (橙色粒子多量)
- 7 暗灰色土 (細かな橙色粒子少量)
- 8 黒灰色土
- 9 暗灰色土 (粗目の橙色粒子多量)
- 10 黒灰色土 (粗目の橙色粒子少量)
- 11 暗茶灰色土 (橙色粒子多量)
- 12 暗灰色土 (粗目の橙色粒子少量)
- 13 茶灰色土 (橙色粒子多量)
- 14 暗灰色土 (橙色粒子少量)
- 15 黒灰色土 (粗目の橙色粒子少量)
- 16 黒色土
- 17 暗茶色土 (粗目の橙色粒子多量)

- 18 暗灰色土 (橙色粒子多量)
- 19 暗灰色土
- 20 橙色粘質土 (地山崩落土)
- 21 橙色粘質土 (地山崩落土)
- 22 黄茶色砂
- 23 黄茶色砂質土

1SD05土層・大分層

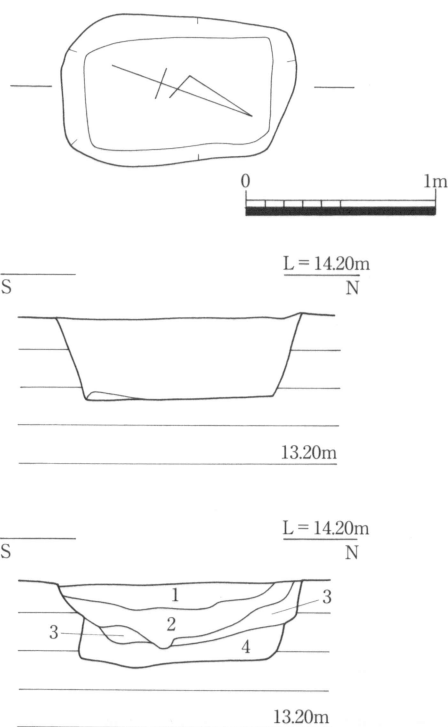
- I 層 (1~3層)
- II 層 (4~6層)
- III 層 (7~13層)
- IV 層 (14~18層)
- V 層 (19~23層)

Fig.14 1SD10土層断面 (S=1/40)



- 1 黒灰色土
- 2 黒色土
- 3 黒色土 (橙色土混入多い)
- 4 黒色土 (橙色土混入少ない)

Fig.15 1SE01 (S=1/40)



- 1 灰色土（小粒の橙色ブロックを少し含む）
- 2 暗灰色土（大粒の橙色ブロックを多く含む）
- 3 黒灰色土（細かな橙色ブロックを少し含む）
- 4 暗灰色土（橙色ブロックを多く含む、マンガン粒を少し含む）

Fig.16 1 S K 1 5 (S = 1/40)

21は須恵器の甕の胴部破片である。磨滅が激しく外面は格子文、内面は不明。
 22は黒色土器の碗の口縁部細片である。両面黒色で、内面にはミガキが施されている。
 23は黒色土器の碗の底部細片である。内面黒色で、僅かにミガキが見られる。外面は磨滅が激しい。
 24は瓦器の碗の底部破片である。復元高台径7.6cm。全体に磨滅しており、内面の黒色部分が露出している。
 25は竜泉窯系青磁の碗の口縁部破片である。復元口径16.6cm。外面は無文で内面には片彫の文様を施す。胎土は灰褐色を呈し精良。釉調は暗緑色の透明釉で、貫入が見られる。I-2類。
 26は竜泉窯系青磁の碗の口縁部細片である。外面は無文で内面には片彫の文様を施す。胎土は灰色を呈し精良。釉調は暗灰緑色の透明釉で、貫入が見られる。I-2類か。

1 S D 0 5 Ⅲ層出土遺物 (Fig.18~20)

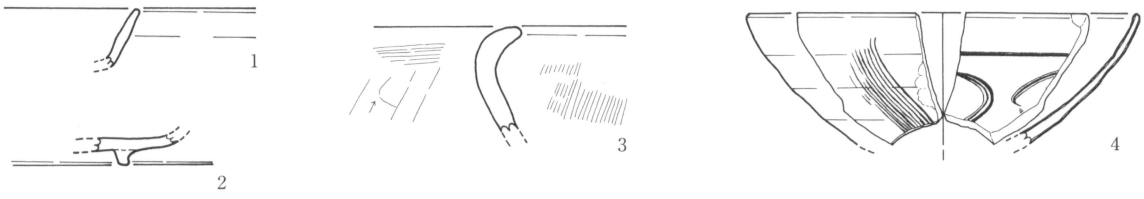
27~29は土師器の坏の口縁部破片である。口縁部は27・28は彎曲しながら立ち上がるのに対し、29は直行する。また27の内面には煤状の付着物が見られた。
 30~33は土師器の皿である。33は高台を有する。30・32は廻転糸切、33高台取り付け部分に3条の沈線が見られる。
 34~36は土師器の甕の口縁部破片である。34・35ともに外面刷毛目、内面ケズリを行う。
 37は土師器の甕の胴部破片である。外面は刷毛目の後へラ書きの様なものが見られる。内面はへラケズリを行う。

削りの後櫛目、内面にはへラによる文様と櫛点描文が見られる。胎土は灰色で黒色粒子を含む。釉調は灰緑色で薄く、口縁部や体部外面の櫛目付近では摩擦により胎土が露出している。また小さな空気孔痕も内外面に見られる。I-1 b類。

1 S D 0 5 Ⅱ層出土遺物 (Fig.17)

5~12は土師器の坏である。
 5は約1/6が残存している。復元口径15.6cm、復元高台径8.2cm、器高6.4cm。高台は薄く、ハの字状に開いている。また底部は打ち掻きにより欠損している可能性を持つ。
 6および8~10は直に立ち上がる口縁部細片である。
 11は彎曲しながら立ち上がる口縁部の細片である。
 7は高台を持たない底部の細片である。全体に磨滅。
 12は高台を有する坏の底部破片で、胎土、色調は5に近い。底部は打ち掻いている。
 13・14は土師器の皿である。
 15~18は土師器の甕の口縁部細片である
 19は土師器の鍋の口縁部細片である。口唇部上面に縄目を施している。
 20は不明土製品である。全体はドーナツ状になると思われる。

I層



II層

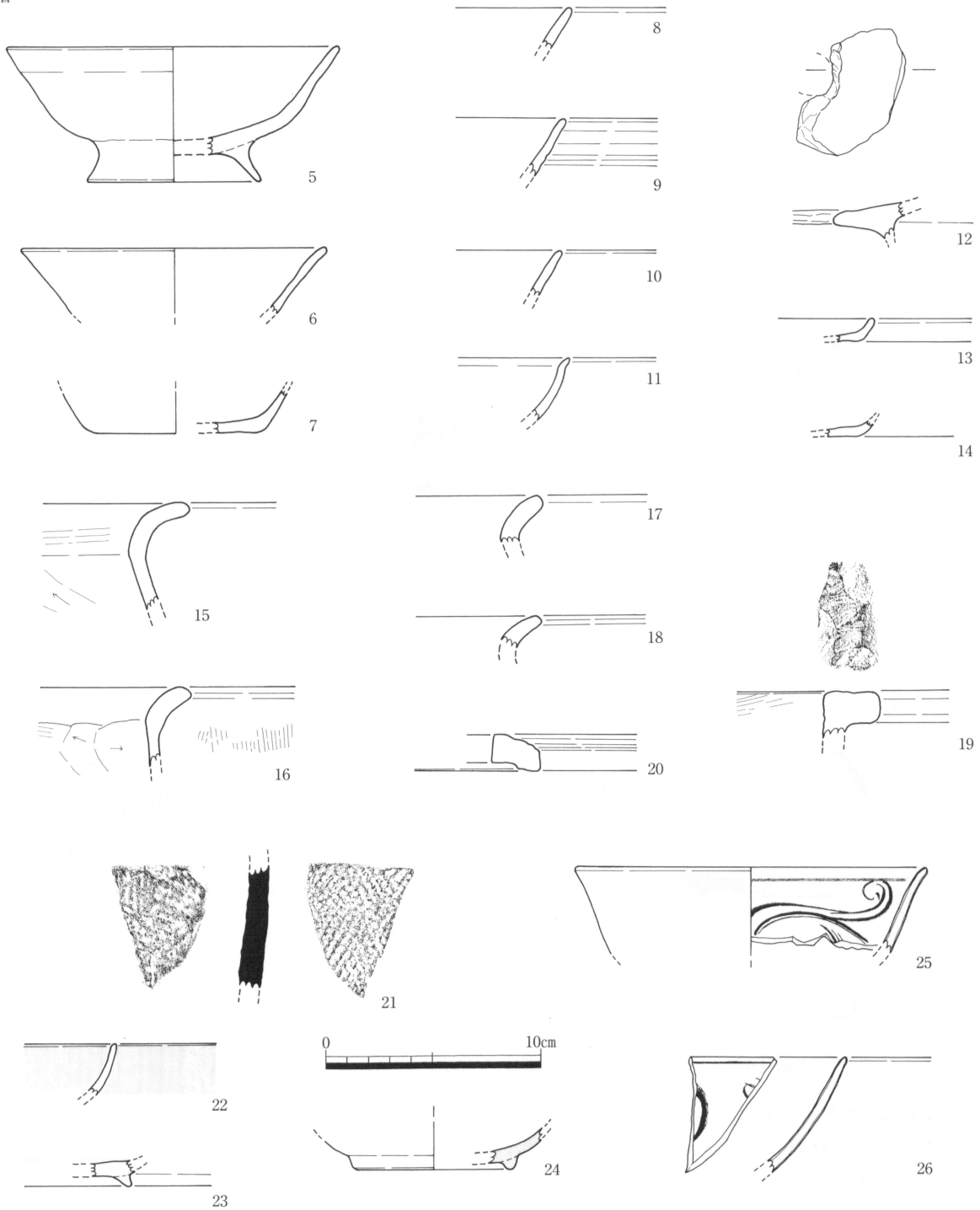


Fig.17 1SD10 I・II層出土遺物 (S=1/3)

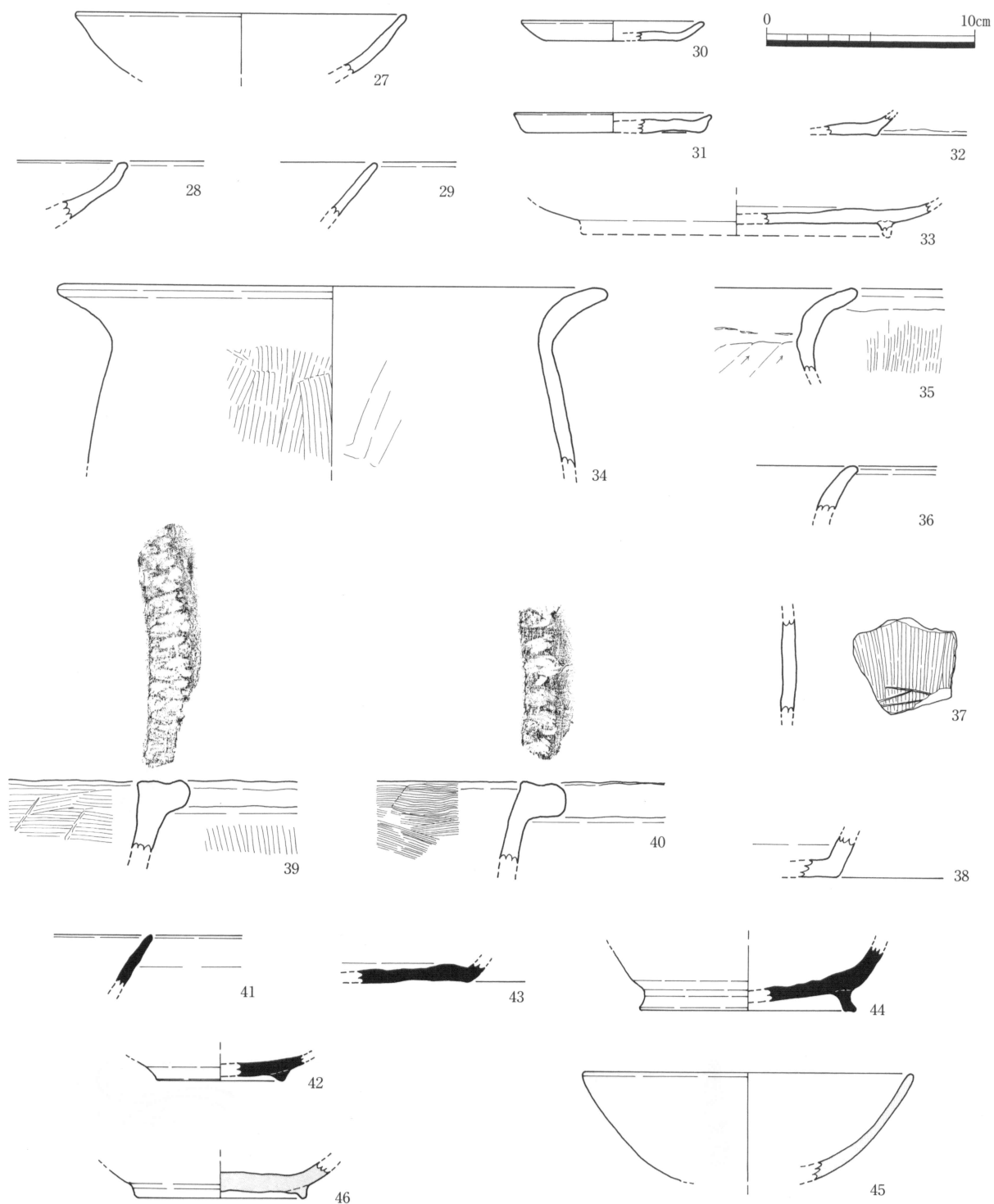


Fig.18 1SD10 III層出土遺物(1) (S=1/3)

38は土師器の鉢と思われる底部破片である。胴部外面下部はケズリと思われる。

39・40は土師器の鍋の口縁部である。いずれも内面刷毛目、口唇部上面に縄目を施す。40の内面には煤の付着が見られる。

41は須恵器の坏の口縁部破片である。

42は須恵器の坏の底部破片である。高台は小さい。

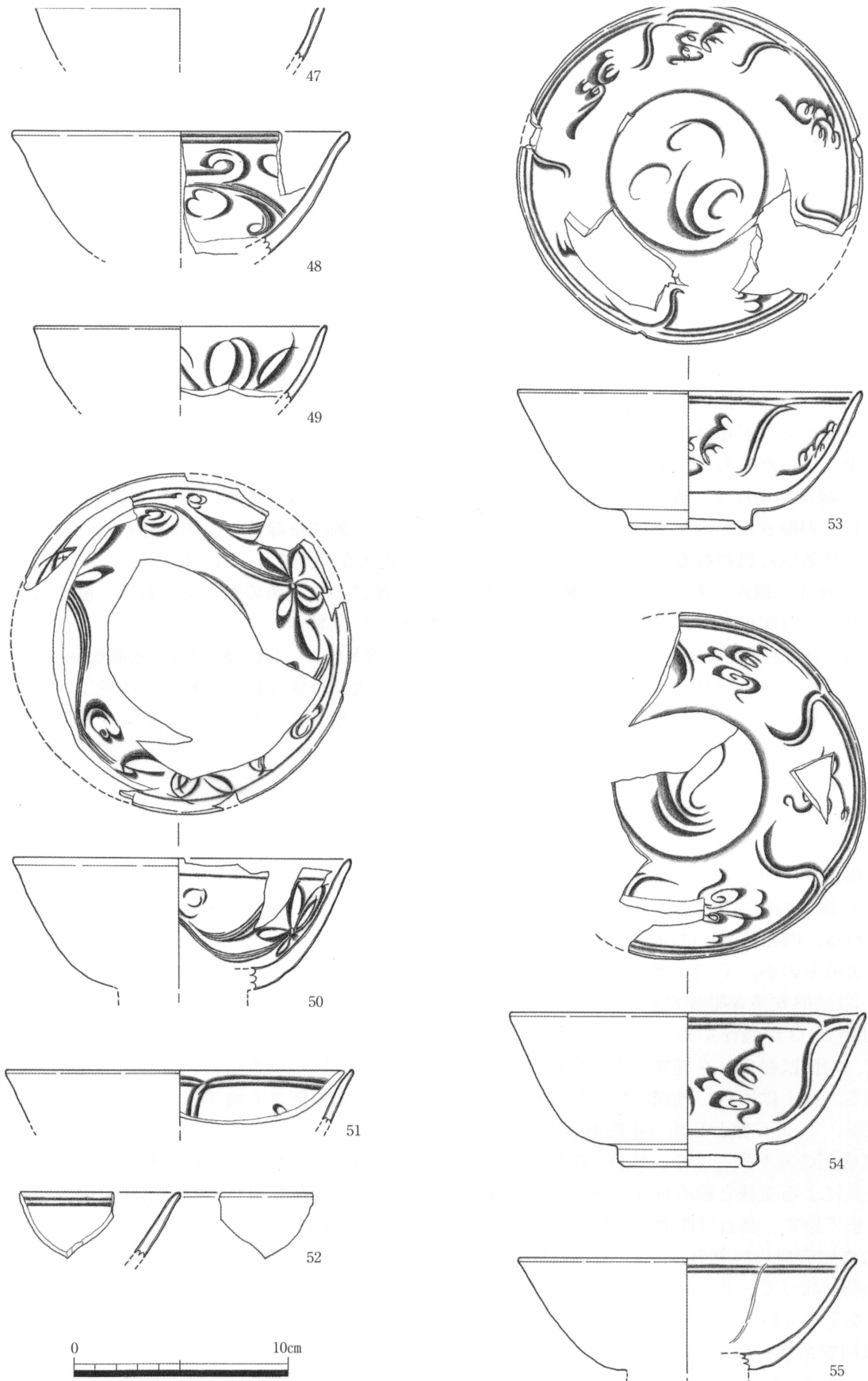


Fig.19 1SD10 III層出土遺物(2) (S=1/3)

43は須恵器の皿と思われる底部破片である。

44は須恵器の壺の底部破片である。高い高台を有し、外底面を中心に煤の付着が見られる。

45は瓦器碗の口縁部破片である。磨滅が激しく調整不明だが、外面は淡黄灰色、内面は淡黒灰色。

46は瓦器碗の底部破片である。磨滅が著しく内部の暗灰色部分が表面に現れ、高台も大半を欠落する。

47～55は竜泉窯系青磁碗である。

47は口縁部の破片で、復元口径13.8cm。外面は無文で、内面にわずかに沈線が認められる。胎土は黒色粒子を含んだ灰褐色で、暗緑色の透明釉を施し、貫入が発達する。I-1 a類。

48は口縁部破片で復元径16.0cm。外面には釉垂れが見られ、内面には片彫蓮華文を施す。胎土は乳灰色～灰色で、緑色の透明釉を施し、細かな貫入が発達する。I-2類。

49は口縁部破片で、復元口径は13.8cm。外面は無文で内面には口縁部に1条の沈線を施し片彫の文様を施す。蓮華文か。胎土は灰色で、暗緑色の透明釉を施し貫入が発達する。I-2類か。

50は口縁部の破片で、復元口径15.9cm。外面は無文で、内面は口縁部に1条の沈線を施し3対の片彫蓮華文を施す。胎土は灰色で、緑色の透明釉を施すが、内面には釉が及んでいない部分があったり外面には異物が付着するなど粗雑な仕上がりである。貫入は発達しておらず、現時点で見られるものの大半は破損した段階に生じたものと判断される。I-2類。

51は口縁部の破片で、復元口径は16.4cm。外面は無文で、内面は片彫で分割される。胎土は灰色で精良だが、粘土の継ぎ目や内部でのヒビ割れなどが見られる。釉調は暗緑色の透明釉だが内外面に白色の小さな斑点や空気泡と思われる円形の小さな窪みが見られ、貫入が発達する。I-4 a類。

52は口縁部の細片である。外面は無文で、内面には片彫による2条の線が見られる。胎土は灰色で、明るい青緑色の透明釉だが、白色の小さな斑点が見られる。I-4類か。

53は1/4程度を欠損している。復元口径は16.3cm、底径8.0cm、高台径5.9cm、器高6.5cm。外面は無文で、内面は片彫で5分割し文様を施し、見込には3個の茸状文が施される。胎土は灰色で、青緑色の透明釉が高台外畳付まで及ぶ。貫入はあまり発達しておらず、破損時のひび割れが大きい。I-4 a類。

54は1/2程度が残存している。復元口径16.8cm、復元底径8.2cm、復元高台径6.6cm、器高7.2cm。外面は無文で、内面は片彫でおそらく5分割され、内面見込みにも片彫で文様が施されている。口縁端部には分割線に対応するように綸花が刻まれている。胎土は灰色だが、部分的に淡い橙色を呈する。これは破断面により突然変色したりするため、2次焼成によるものか焼成不良によるものかは判別できない。釉調は薄い緑褐色で、白色の小さな斑点や空気孔による凹凸が目立ち、細かな貫入が発達している。I-4 b類。

55は口縁部の破片である。復元口径16.0cm。外面無文。内面は口縁部に薄い沈線を施し、白堆線により分割される。内面見込には段2が施される。胎土は黒色粒子を含む明灰色。釉調は暗黄緑色で極めて薄い。被熱によるものか。I-4 c類。

56・57は同安系青磁碗である。

56は約1/3が残存する。復元口径17.3cm、高台径6.0cm、器高6.8cm。口縁部はわずかに外反し、外面は無文、内面は櫛目文を施す。内面見込は段を有する。高台は逆台形を呈し、高台内部はヘラ切痕跡が明瞭に残る。胎土は灰色。釉調は明るい青緑色釉で、外面は胴部中位まで施す。外面の露胎部分には黒斑が見られる。I-1 a類とII類の中間形態。

57は底部のみが残存する。底径5.6cm、高台径5.1cm。外面はヘラ削り後5組の櫛目文を行い、内面には篋状工具による文様と櫛点描文が施される。胎土は淡黄灰色～灰色を呈し、釉調は灰緑の透明釉で外面胴部中位まで施す。高台は断面逆台形状を呈し、ヘラ切痕跡が明瞭に残る。I-1 b類。

58は青磁の皿の底部破片である。底径4.9cm。内面はヘラによる文様と櫛点描文を施す。底部は焼成前に釉を削り取っている。胎土は灰色～淡赤橙色。焼成不良により釉葉のガラス化が進んでおらず不透明の乳白色を呈している。

59は同安系青磁皿で口縁部の大半を欠損している。復元口径10.4cm、底径5.0cm、器高2.1cm。内面にヘラによる文様と櫛点描文を施す。体部は外反し、底部は焼成前に釉葉を掻き取る。胎土は灰色で、青緑の透明釉を施している。I-2 b類。

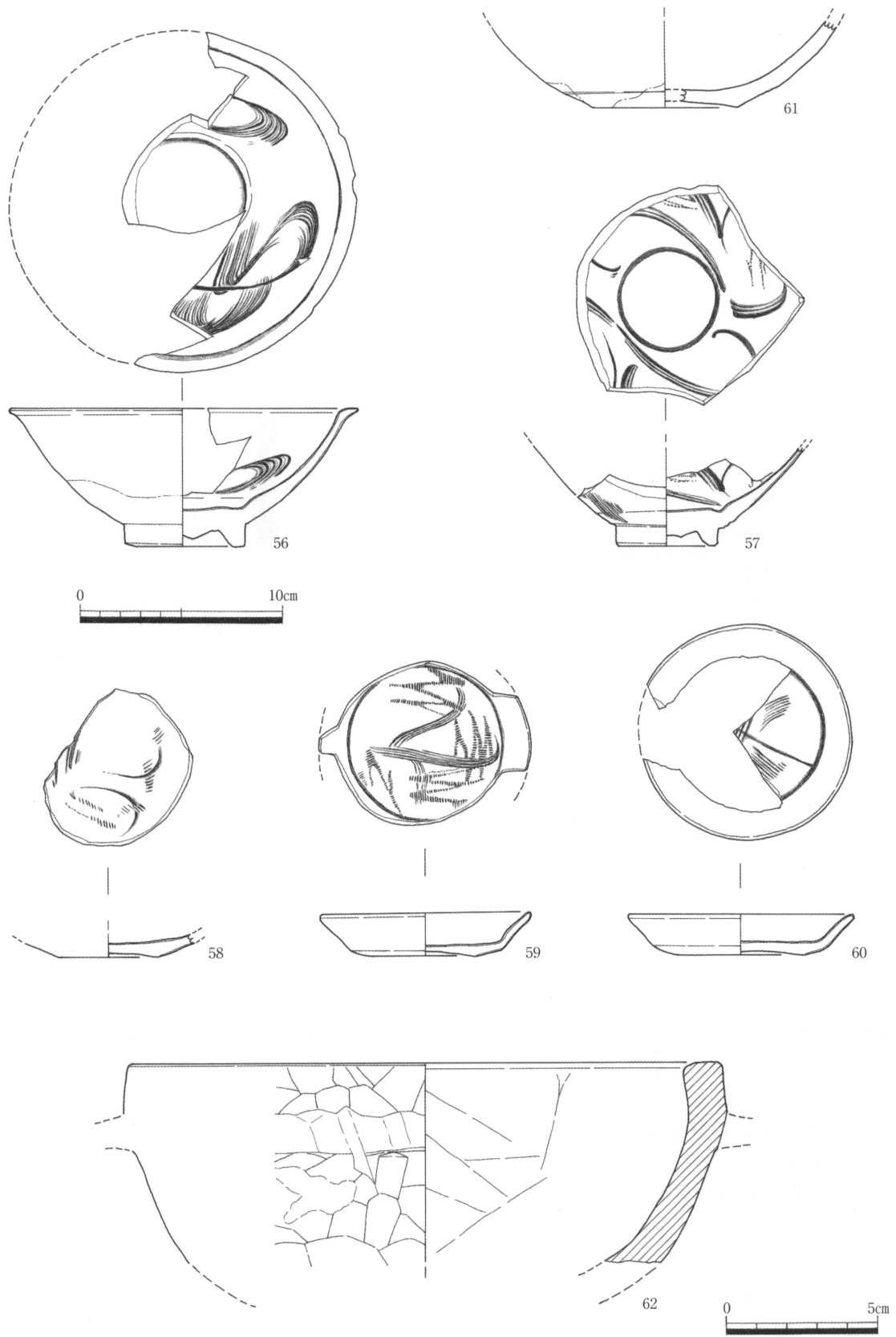


Fig.20 1SD10 III層出土遺物(3) (S=1/3・1/2)

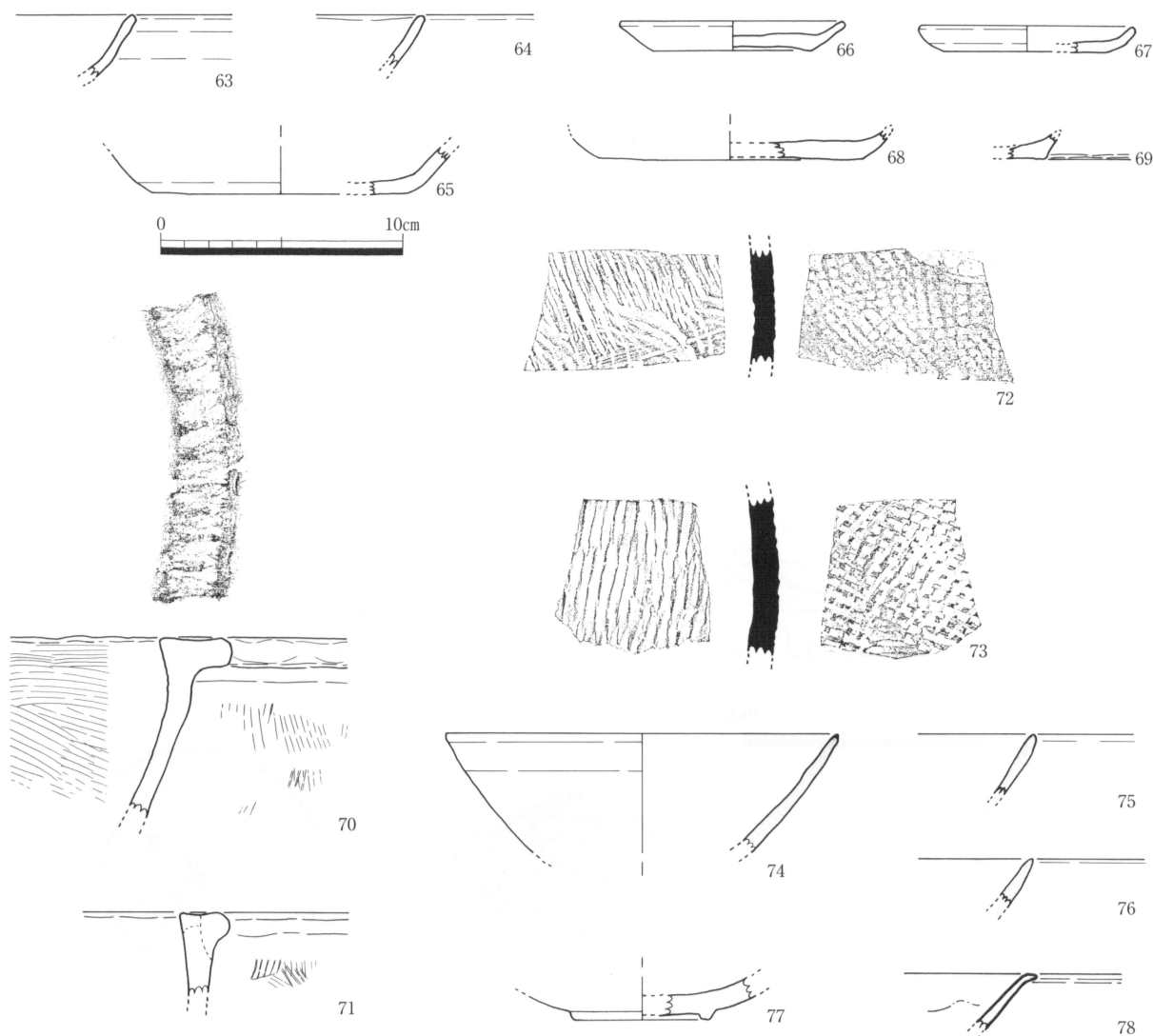


Fig.21 1SD10 IV層出土遺物(1) (S=1/3)

60は同安系青磁皿で、底部の1/4と口縁部の大半が残存する。復元口径11.2cm、復元底系6.2cm、器高2.0cm。内面にヘラによる文様を施す。体部は外反し、底部は焼成前に釉薬を掻き取る。胎土は灰色で、緑黄色の透明釉を施し、貫入が発達する。I-2b類。

61は輸入陶器の鉢の底部破片である。復元底径7.2cm。外面はヘラ削りを施し、褐色釉を施すが、底部までは施されない。胎土は赤褐色～灰色を呈し、白色粒子を含む。IV-2。

62は滑石製石鍋の口縁部破片である。復元口径19.7cm。体部は緩やかな彎曲を有し、鏝の上下には煤が見られ、下部は厚く付着している。鏝が設けられたと思われる部分にはこれを粗く打ち欠いた痕跡が見られる。内面には工具痕が見られるが、使用によるものか新しさは感じない。2次加工を行ったことは認められるが、その使用方法は不明である。

SD10 IV層出土遺物 (Fig.21~23)

63・64は土師器の坏の口縁部細片である。63は彎曲した、64は直線的な立ち上がりを見せる。

65は土師器の坏の底部の細片である。復元底径10.6cm。外面はヘラ削りを行う。

66~69は土師器の皿である。66は板圧痕が見られる。68は磨滅が激しいがその他は底部廻転糸切りで



Fig.22 1SD10 IV層出土遺物(2) (S=1/3)

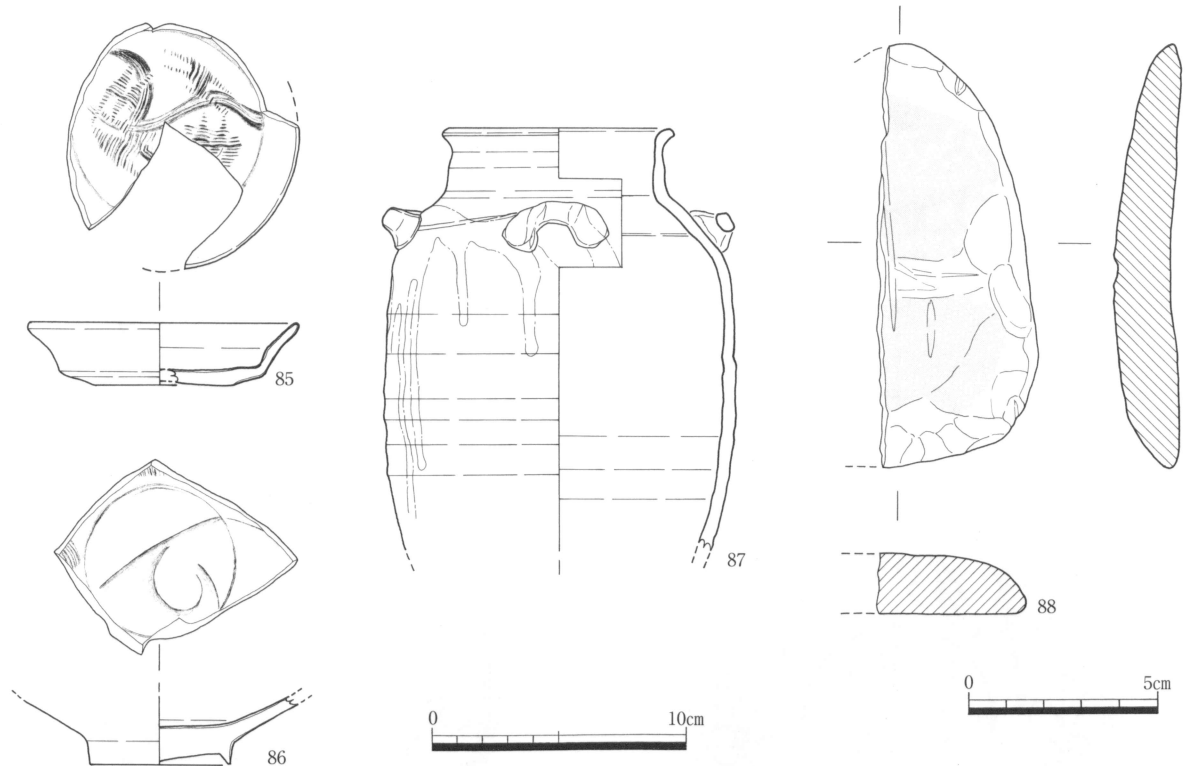


Fig.23 1SD10 IV層出土遺物(3) (S=1/3・1/2)

ある。

70・71は土鍋の口縁部細片である。両者とも外面に煤の付着が見られる。70は口唇上面に縄目が施され、端部には指圧痕がみられる。

72・73は須恵器の甕の胴部破片である。72は外面格子文、内面平行文によるタタキが行われ、焼成はやや不良。73は外面格子文、内面平行文および青海斑によるタタキが行われ、焼成は良好である。

74～76は瓦器碗の口縁部破片である。74は復元口径16.3cm。磨滅が激しく調整は不明。焼成は内部まで行き届いており、色調は外面乳白色、内面は暗灰色を呈する。75・76は細片で、磨滅の為調整不明。

77は瓦器碗の底部破片である。復元高台径5.9cm。全体に磨滅が激しい。

78は白磁碗の口縁部細片である。口縁端部は嘴状に屈曲し、胎土は黒色粒子を含んだ灰色を呈する。白灰色の透明釉を施し、貫入が若干発達している。

79～84は竜泉窯系青磁碗である。

79は1/4が残存している。復元口径16.7cm、復元底径8.1cm、高台径6.4cm、器高7.3cm。内外面ともに無文で、内面見込みには「金玉満堂」の文字が刻まれている。胎土は灰色～黄灰色を呈し、緑色の透明釉が高台畳付まで及んでいる。高台外低内面はヘラ切り痕跡が見られるが、工程は丁寧に仕上げられている。

I-1類c

80は約3/4が残存する。復元口径16.8cm、底径7.8cm、高台径6.2cm、器高7.5cm。外面は無文で内面には2対の片彫蓮華文を、内面見込みには片彫の花文を施す。胎土は淡灰茶色。高台外面まで淡緑褐色の透明釉を施し、細かな貫入が発達している。I-2 a'類。

81は約1/3が残存する。復元口径17.0cm、復元底径8.6cm、復元高台径6.2cm器高7.4cm。外面は無文で、内面は片彫で5分割しに文様を施し、内面見込にも文様が施されている。胎土は淡灰色で粗い。釉調は明青色の透明釉で、細かな白色斑点が見られる。施釉は高台畳付にまで及び、貫入が発達している。高

台外低面には煤の付着が見られる。I-4 a類。

82は約1/4ほどが残存する。口径16.2cm、底径7.5cm、高台径6.1cm、器高6.5cm。外面は無文で、内面は片彫により分割され文様を施す。おそらく5分割。胎土は灰色で、青色の透明釉が高台外底面内部まで及ぶ。I-4 a類。

83は約3/4が残存する。口径15.8cm、底径8.0cm、高台径6.0cm、器高6.9cm。外面は無文で、内面は片彫で5分割し文様を施す。胎土は灰色を呈し精良。釉調は暗緑色の透明釉で、高台外面まで及び、内側には粗い、外側にはやや細かな貫入が発達している。I-4 a類。

84は約3/4が残存する。復元口径16.4cm、復元底径9.0cm、器台径6.5cm、器高7.0cm。外面無文で、内面は片彫で文様を施しているが、図像は不鮮明である。胎土は淡灰色で黒色粒子を含む。釉調は淡茶緑色で高台外底面の一部まで及び、細かな貫入が発達している。I-4 a類の亜種か。

85は同安系青磁の皿である。底部が約3/4、口縁部が約1/4ほど残存する。復元口径10.7cm、復元底径5.5cm、器高2.5cm。内面にヘラによる文様を描いた後、櫛点描文を施している。胎土は灰色を呈し、全体に薄灰緑色の釉を施した後底面の釉を削り取っているが、削り取りの工程は粗雑である。I-2 b類。

86は青白磁の碗の底部である。高台径5.6cm。見込はゆるやかに窪み円圏や細い文様が見られ、内面には櫛目が認められる。高台は細い逆台形を呈し、内面には小さな付着物が見られる。胎土は灰色で黒色粒子が多く見られ、釉調は淡く青味がかった白灰色で高台外面まで施している。Ⅲ類か。

87は輸入陶器の四耳壺で、口縁部1/4と底部を欠損する。復元口径9.2cm。口縁部は垂直に立ち端部をつまむように外反させる。肩部はあまり張り出しておらず、1条の沈線を施した後横耳4個を張り付ける。胴部は張り出さず、肩部より径は小さい。緩やかに径を小さくしながら底部へと伸びていく。胎土は白色粒子を含んだ黄灰色。釉調は淡く緑がかった黄灰色で、肩部に暗茶褐色釉をかけ流す。V-2類の亜種か。

88は滑石製の不明品で、大きく割れている。外面には煤が付着し、中央部に擦過痕のような窪みが見られるが、横面や裏面には認められない。残っている側面は面取りがなされ、裏面にも2次加工痕跡が認められる。

1 S D 1 0・層出土遺物 (Fig.24)

89は土師器の坏の口縁部細片である。緩やかに彎曲しながら立ち上がりを見せるが全体に磨滅。

90~97は土師器の皿である。磨滅が激しく調整不明。

1 S D 1 0 トレンチ出土遺物 (Fig.25)

98は土師器の蓋の口縁部細片で、端部を三角形につまみ出している。

99は土師器の碗の底部細片である。内面磨滅。外面はヘラケズリか。断面では高台取り付けの為に施された2条の沈線が観察できる。

100は土師器の坏の口縁部細片である。内外面磨滅。

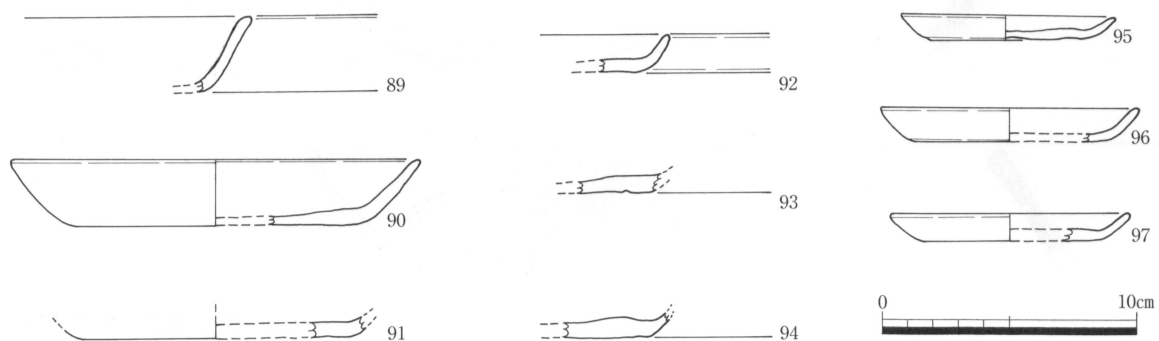


Fig.24 1 S D 1 0 V層出土遺物 (S = 1 / 3)

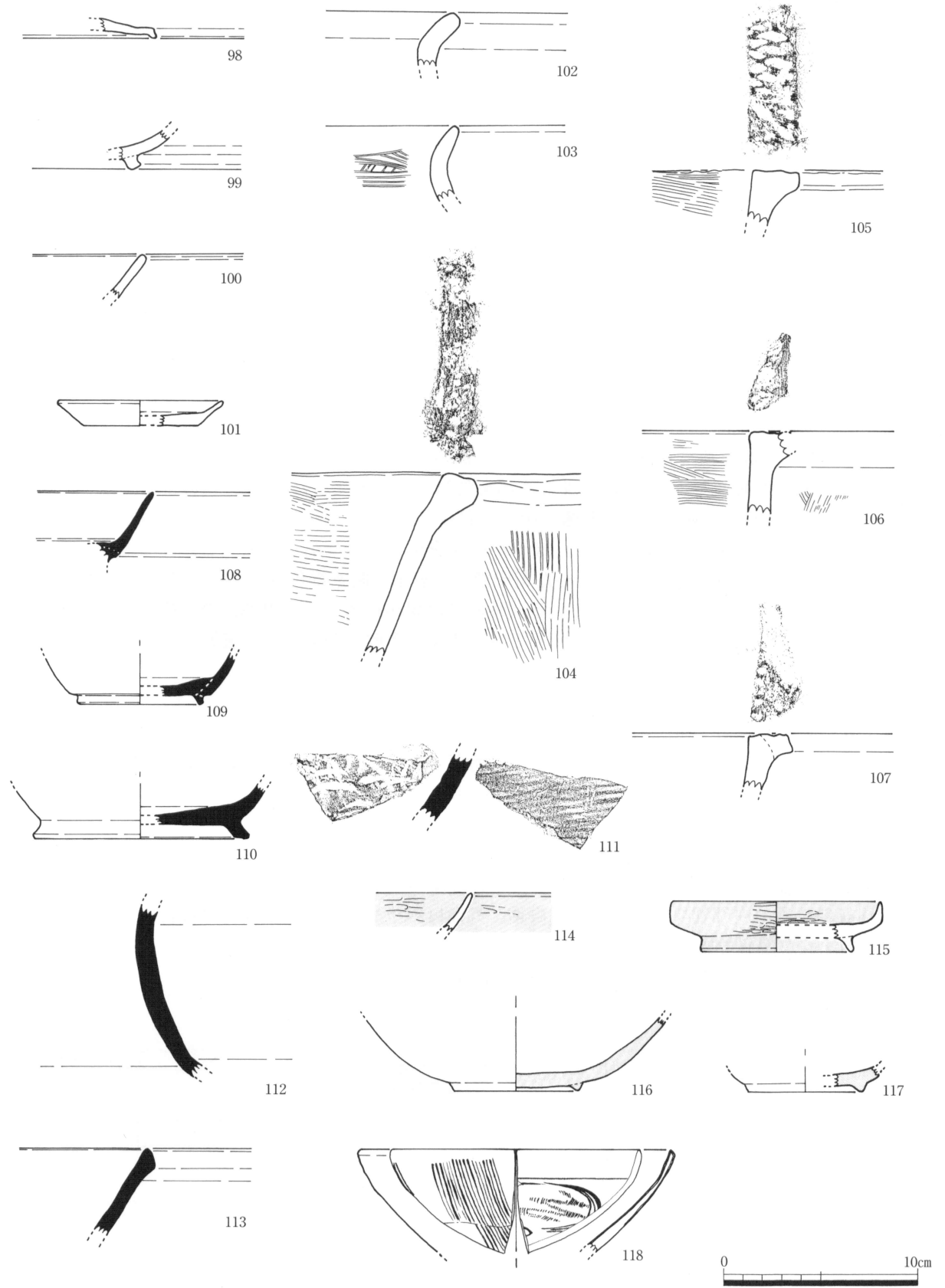


Fig.25 1SD10 トレンチ出土遺物 (S=1/3)

101は土師器の皿である。内外面磨滅。外底部に板圧痕が見られる。

102・103は土師器の甕の口縁部細片である。102は外面煤付着。103は磨滅を受けるが内面に刷毛目が見られる。

104～107は土師器の鍋である。104は口縁部分で少し外反し、内外面に刷毛目を施し口唇部上面に何らかの圧痕を施している。また外面には煤の付着が多く見られる。105は内面に刷毛目、口唇部上面に縄目を施す。106は内外面に刷毛目、口唇部上面に縄目を施した後刷毛目を行っている。106は口唇部上面内側に縄目と思われる文様を施している。

108は須恵器の坏の口縁部細片である。口縁部及び外面には、皮膚の様な皺が広がっている。

109・110は須恵器の坏の底部破片である。110は焼成不良により黄橙色を呈する。

111は須恵器の甕の胴部細片である。外面平行文、内面青海斑によるタタキを施す。焼成不良により、外面のみ黄灰色に発色、他は黄橙色である。

112は須恵器の長頸壺の頸部細片である。

113は須恵器の鉢の口縁部細片である。口縁部は断面三角形で、色調は黄灰色。東播系。

114は黒色土器の碗の口縁部細片である。内外面ともに黒色で、ミガキが認められる。

115は黒色土器の托の破片である。残存率は1/4にも満たない。内外面ともに黒色で、ミガキが施されている。

116・117は瓦器碗の底部破片である。116は磨滅により調整不明。色調は外面明黄灰色、内面黒灰色を呈する。117は全面磨滅。

118は同安窯系青磁碗の口縁部破片である。復元口径は16.4cm。器壁は薄く、口縁部へ彎曲しながらも直に立ち上がる。外面には櫛目、内面には篋状工具による文様と櫛点描文を施す。胎土は灰色を呈する。釉調は黄緑～灰緑色の透明釉で、島状に発色のムラが認められる。外面は体部の途中までしか施釉しない。I-1 b類。

1 S E 0 1 出土遺物 (Fig.26)

1は土師器の蓋の口縁部細片である。

2は土師器の坏の口縁部と思われる細片である。外面に黒斑が見られる。

3～5は土師器の皿である。3・4は同一個体。いずれも底部糸切り。

6は土師器の坏の底部破片である。底部糸切後端部をナデ。

7は土師器の甕の口縁部である。全体に磨滅。

8・9は土師器の鍋の口縁部細片である。8は口縁部を少し外板させ、断面三角形の玉縁状としている。

9は断面方形の口縁を有し、口唇部上面に平行に工具を押しあてている。

10は須恵器の坏の口縁部細片である。

11は須恵器の甕の胴部細片である。外面平行文、内面青海斑によるタタキを行い、内面上部はケズリを施している。外面の平行文も不明瞭である。

12は黒色土器の碗の底部細片である。内面のみ黒色で、高台は剥離。内面にはミガキが施されている。

13は瓦器碗の口縁部細片で、内外面ともにミガキが施されている。

14は瓦器碗の底部破片である。内外面ともに磨滅。底部は彎曲せず平坦であり、色調は明黄灰色で芯は見られない。

15は白磁の口縁部細片である。器壁は薄く、端部を嘴状に作る。胎土は灰色で、灰白色の透明釉を施す。

16は竜泉窯系青磁の碗の底部破片で1/2ほどが残存する。内面は無文、外面は陵を有する鎬蓮弁を施す。高台は断面四角形。胎土は灰色で黒色粒子を含む。釉調は暗青緑色の透明釉で、高台外面まで施す。II-b類。

17は同安窯系青磁碗の口縁部細片である。器壁は薄く、口縁部へ彎曲しながらも直に立ち上がる。外面には櫛目、内面には篋状工具による文様と櫛点描文を施す。胎土は灰色を呈する。釉調は淡灰緑色の透明釉で、発色のムラが認められる。I-1 b類。

1SE01

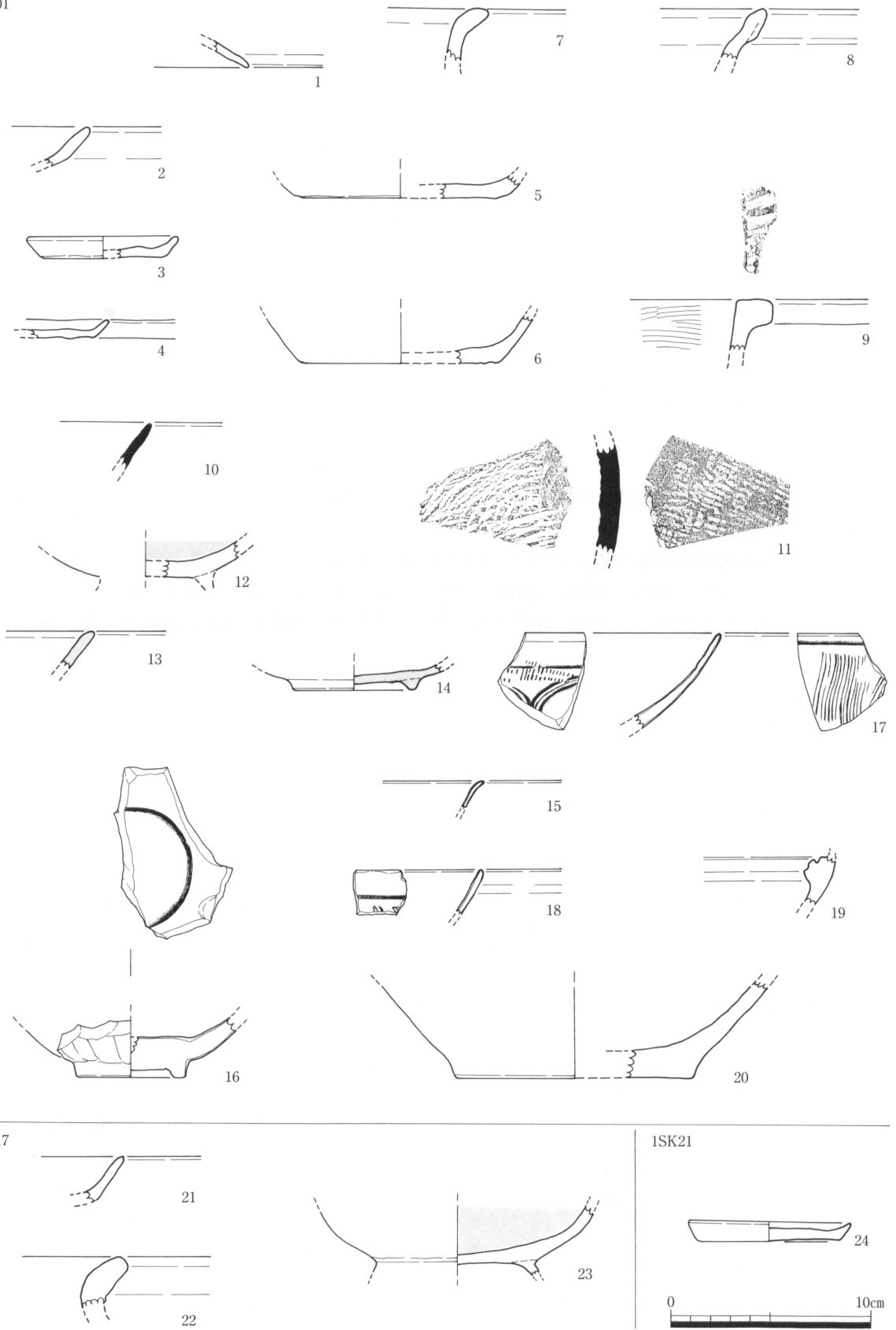
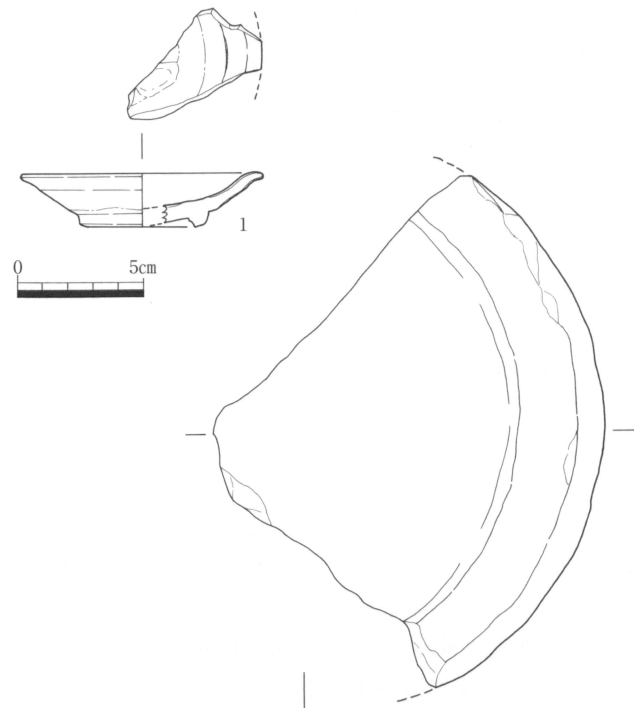


Fig.26 1SE01・1SX17・1SK21出土遺物 (S=1/3)

18は同安窯系青磁碗の口縁部細片である。器壁は薄く、外面はヘラ削り、内面には沈線と櫛引文を施す。胎土は黄灰色を呈する。釉調は淡黄緑の透明釉。

19・20は輸入陶器の鉢で、同一個体と思われる。19は口縁部細片で端部を欠損する。内側に出る玉縁を有し、2条の沈線が入る。20は底部破片で、内面は使用により磨滅。色調は赤紫。胎土は1mm大の石英粒などを含み粗い。I-1c類。



1 S X 1 7 出土遺物 (Fig.26)

S X 1 7はSD 1 0の南側に位置する不明土壌である。植物痕跡と思われるが遺物がまとまっていた為ここに掲載した。

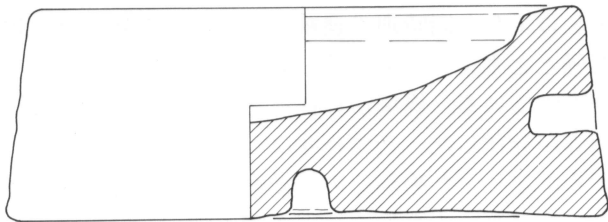
21は土師器の坏の口縁部細片である。

22は土師器の甕の口縁部細片である。

23は黒色土器の碗の底部破片である。内面黒色で全体に磨滅が激しく、高台も剥離、欠損する。

1 S K 2 1 出土遺物 (Fig.26)

24は土師器の皿で、完形。磨滅が激しく調整は不明。遺構検出面付近での出土の為注意が必要である。



表採遺物 (Fig.27)

1は白磁の皿である。内面見込の釉輪状に掻き取る。高台は断面四角形で、口縁部は外反する。底部ヘラ切。胎土は黒色粒子を含む灰色を呈し、釉調は淡青白色の透明釉で、外面は体部中位までしか施釉しない。III-1類。

2は石臼である。目の粗い安山岩製。



5) 小結

今回の調査では中世の遺構が確認され、1 S D 1 0より12世紀中頃～後半（太宰府編年のD期）に所属する遺物が多く採集された。これらは遺構の築造年代を示すものではないが、文献に見られる広川荘の活発な活動を示すものと考えられる。

当時この地域を支配した広川荘は、現在の筑後市北部と広川町一帯にあたり、天承元年（1131）に立荘、保延4年（1138）

Fig.27 表採遺物 (S = 1/3・1/4)

熊野山に寄進されたと元弘4年(1338)の文書に記されている。しかしながら、確実な初見文献は建永元年(1206)のもので、これ以前に熊野山の所領となっていたことは間違いない。熊野山は坂東寺村(現在の大字熊野)に熊野神社を分霊、それ以前から存在した可能性のある坂東寺を神宮寺とし、広川荘の中心として荘内支配を実施した。天福2年(1234)の文書の写しには当時の広川荘の名が記載されており、これによると筑後市内には倉員(倉数・現在の大字蔵数字元蔵数)、福万(坂東寺・現在の熊野)、富重、得久(現在の大字徳久)、富久、若菜、久富(北富久)、勢徳(現在の大字一条)が知られる。また、領内の主要箇所には坂東寺の末寺が置かれ、倉員は宗西寺、富久には最福寺、富重には普門寺が配置された。宗西寺は西の三瀨荘、普門寺は南の水田荘、最福寺は両者との境に近い所に配されている。

今回の調査区で検出された1SD10は集落を取り囲む溝で、筑後市大字長崎所在の長崎坊田遺跡に先行する存在ではないかという指摘を頂いた。長崎坊田遺跡は16世紀の居館跡で、防御を意識したと考えられている。本遺跡の1SD10を出土遺物から12世紀後半として、広川荘・水田荘間の境界争いが14世紀後半、長崎坊田遺跡が16世紀であり、時間的な幅が大き。これは両者の領地争いが戦国後期に入り、より緊張状態に入ったためと見る事もできる。しかし広川荘は荘園の支配体制の再確立に成功した水田荘と異なり武士の横領によって瓦解しており、長崎坊田遺跡のような居館を営めるかは疑問である。16世紀の筑後は、三瀨郡は肥前龍造寺氏の影響下にあり、上妻・下妻郡は豊後大友氏の影響が強い。しかし、その状況は様ではなく、争乱の中心地であったのは事実である。本遺跡の1SD10は壁面が急角度で立ち上がるのに対し、長崎坊田遺跡本遺跡の1SD20は緩やかな傾斜を有している。長崎坊田遺跡の1SD20は人為埋没で滞水していたかは不明だが、緊急時に水濠にできうるか否かの立地上の差であろうか。本遺跡の1SD10では滞水は認められない所である。今回の検出分ではこの溝が集落を取り囲むものかは判断できないが、他の防御施設の有無も含めて今後の課題となるであろう。

この1SD10と同時期の遺跡としては、県指定文化財「滑石経」を出土した若菜経塚がある。発見当初、滑石経とともに出土した塔には「壬平三年」の銘があり、これは「壬平三年」の誤りで1152年のことと解釈されている。経塚が存在した若菜八幡宮を挟んで東側には若菜名(若菜裏道遺跡)、西には富重名と普門寺が存在した。若菜経塚は江戸時代に発見され、久留米藩の命により元に戻されたが、再び地表に露出するなどしたためかその後散逸、埋納主体者を判断するようなものは残されていないのが現状である。しかしながら、1SD10出土輸入陶磁器などと共に、広川荘の活発な活動を示す資料と言えるのではないだろうか。

ところで平成4年(1992)調査の若菜森坊遺跡では断面V字状の方形区画溝が検出され、竜泉系青磁などの輸入陶磁器を多く出土している。現在は状況が不明確であり、若菜森坊遺跡の本報告される際にこの2者との比較がなされることを期待したい。

【注】

本報告の陶磁器分類は太宰府市の陶磁器分類(『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』2000)に従うものである。ただし、青白磁については福岡市の博多出土貿易陶磁器分類(森本朝子「II-3. -5 出土遺物の分類」『博多60—第1次・4次・8次調査報告一』1997)に拠っている。

【参考文献】

矢野 一貞	『筑後将士軍談(筑後国史)』	1927	筑後遺籍刊行会
右田乙次郎	『筑後松原郷土史』	1988	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	1995	筑後市史編さん委員会
池崎 譲二・編	『博多60—第1次・4次・8次調査報告一』	1997	福岡市教育委員会
小林 勇作	『長崎坊田遺跡』	1999	筑後市教育委員会
宮崎 亮一・編	『太宰府条坊跡XV—陶磁器分類編一』	2000	太宰府市教育委員会



三 瀨 荘

1159 初見
領家 四条隆季

広 川 荘

1206 初見
領家 熊野山

水 田 荘

1250 初見
領家 菅原氏
(太宰府天満宮安楽寺領)

下 妻 庄

1281 初見
領家 菅原氏
(太宰府天満宮安楽寺領)

広 田 荘

(後に瀬高荘・長田荘など
5荘に分裂)

長 田 荘

1352 初見
領家 菅原氏
(太宰府天満宮安楽寺領)



Fig.28 筑後市荘園関連地名位置図 (S = 1/40,000)

若菜奇物圖

上妻郡若菜村八幡祠ノ後口ノ丘ニ一大甕ガ埋マレリ。屋瓦ノ如キ者ヲ合ハセ、許ハ多クノ大小ノモノ有リ。都テ温石ヲ以テ製ル。表十九行裏十六行四方一行、法華ノ文ヲ彫ル。甕ノ中ニ許ハ多クノ塔ヲ蔵ス。是亦大小ノモノ有リ、今其ノ二三ヲ圖トス。北野ノ境内及ビ叡山等ニ之ニ類ス者有ルモ、皆白川石ヲ以テ之ヲ作ル。

長六寸
五分幅
五寸五分
厚八分

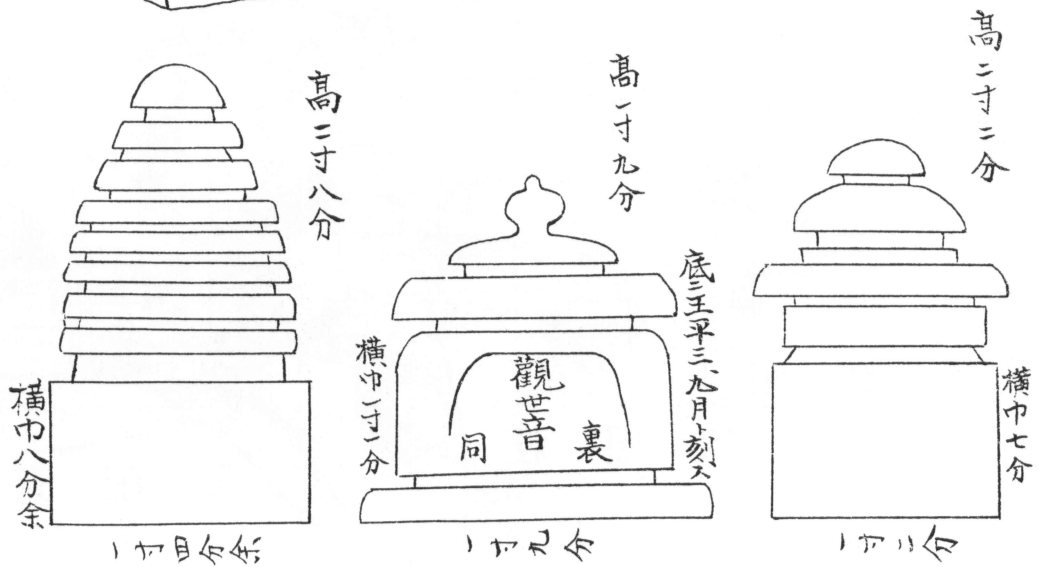
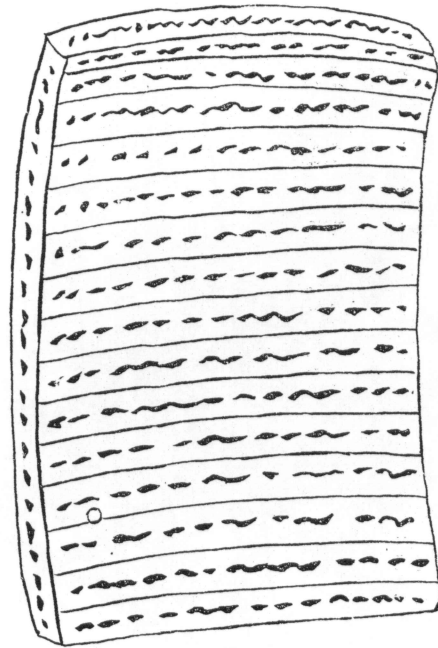


Fig.29 『筑後将士軍談』に見られる若菜滑石經

第4章 総括

筑後市が昭和61年（1986）作成した旧文化財分布地図では、若菜大堀遺跡・若菜裏道遺跡は若菜森坊遺跡・若菜鞘ノ本遺跡と共に弥生～平安時代の散布地である「若菜遺跡」として認識され、中世の遺跡としては「壬平三年」（「壬平」の誤り？、1153年）銘を持つ「若菜経塚」（県指定文化財「滑石経」出土地）が知られるのみであった。また、字「村圃」を挟んだ南側には弥生時代の墳墓遺跡「森坊遺跡」、西側には弥生時代の散布地「辻遺跡」の存在が記されている。筑後郷土史研究会がまとめた『筑後二川郷土史』（1983）には、「森坊遺跡」に関する記述が掲載されている。

七、若菜のこしき巴形銅器その他

山ノ井川に臨む山口織物工場の南、田中煙火工場との間、森坊一帯は石組窯と柱穴、炉などの址がよく見られる。十二月橋本和典氏所有ブドウ畑から出た大型かめを見出したのが、この地域を見るきっかけになった。特にその北側橋本達雄氏所有ブドウ畑では石組窯に五個のこしきが並んで出土のには驚異の眼を見はった。窯の規模は長さ約四米で、焚口は南にあり深さは九〇糎、こしきの置いてある部分は一段と高くその周りを円い石と粘土で固めていた石囲いの窯はこの森坊部落に多い。

（「水田村郷土史」所載）

この他、若菜裏道遺跡の調査の折に調査区の旧情を教えていただいた地元の方によると、畑地にする際の地下げの折に調査区西側で勾玉が出土したとのことであり、これは「辻遺跡」のことと推測される。これらと近年の発掘成果を並べると、次のとおりとなる。

- ・辻遺跡（弥生時代・散布地）
- ・森坊遺跡（弥生時代・墳墓）
- ・若菜遺跡（弥生～平安・散布地）
- ・若菜森坊遺跡（古代～中世・集落、中心時期は8～9世紀）
- ・若菜経塚（中世、壬（壬=仁）平3年（1153）銘）
- ・若菜裏道遺跡（中世・集落縁辺、中心は12世紀後半～13世紀）
- ・若菜大堀遺跡、若菜鞘ノ本遺跡（中世～近世）

このように、連続した形で遺跡が形成される地域は、筑後市内では珍しいことである。特に近年は筑後北部地区のほ場整備事業などにより、それまで不明確だった広川荘エリアにおける中世の情報が得られつつある。若菜裏道遺跡で得られた荘園支配下の名と、ほ場整備事業による荘園支配地中心部の情報により、これまで希薄な感が拭えなかった筑後市北部の歴史が充実した資料によりより深く語られることが今後期待される所である。

一方で、今回の若菜遺跡群のように、古くから知られた筑後市内の遺跡は開発による何かしらの打撃を被っており、発掘においてその情報を正確に捕らえる事が難しい地点も少なくない。幸い筑後市南西部（旧水田村）は戦後間もなく郷土史会が発足し、その活動によって貴重な情報が伝えられているが、それも長い年月によって薄らぎつつある。今回の報告作業は、新たな資料の確認・保護と共に、これら古くに確認された資料の所在確認・保護の必要性を痛感するものでもあった。先達の恩恵を受け、これを後世に伝えるための行動が、新たな課題となったと言えよう。

Tab.1 若菜大堀遺跡第3次調査区 遺構一覧

Fig.	S番号	遺構番号	グリット	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
3-5	1	3SD01		--	--	--	--		逆台形	須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁、陶器、剥片磁		
3	2	3SP02		--	--	--	--			須恵器、土師器、瓦器		
3	3	3SP03		--	--	--	--			瓦器		
3	4	3SP04		--	--	--	--			土師器、瓦器		
3-6	5	3SK05		--	--	--	--		浅い逆台形	土師器、瓦器、白磁		
3	6	3SK06		--	--	--	--		楯鉢状	弥生土器、土師器		
3	7	3SX07		--	--	--	--			弥生土器		
	8	--										
	9	--										
3	10	3SK10		--	--	--	--			弥生土器		
3	11	3SX11		--	--	--	--			鉄製品		
3	12	3SX12		--	--	--	--			鉄製品		
	13	--										
	14	--										
3	15	3SD15		--	--	--	--			NON		

Tab.2 若菜大堀遺跡第3次調査区 出土土器一覧

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	色調(外/内(軸))	胎土	焼成	備考
7	1	3SD01	瓦器	埴	--	--	--	口縁部1/12	淡灰~黒灰色	砂粒含まず	不良	
7	2	3SD01	瓦器	埴	(18.0)	--	--	口縁部細片	銀灰~黒灰色	砂粒含まず、良	良好	芯黒なし
7	3	3SD01	土師器	坏	--	(7.4)	--	底部1/5	暗褐色/明茶色	砂粒含まず、赤色粒子	不良	回転糸切
7	4	3SD01	土師器	鉢	--	--	--	口縁部細片	暗茶褐色	2mm大の砂粒、雲母片	やや良	
7	5	3SD01	須恵器	鉢	--	--	--	口縁部細片	暗灰色	微細粒含む	やや良	還元やや良
7	6	3SD01	須恵器	甕	--	--	--	胴部細片	青灰色	細砂粒ごく少量	良好	還元良、外面格子文、内面平行タタキ
7	7	3SD01	白磁	碗	--	--	--	口縁部細片	淡灰色(透明釉)		良好	口縁部嘴状
7	8	3SD02	青磁	碗	--	--	--	口縁部細片	灰色(茶緑色透明釉)		良好	細かい貫入が発達
7	9	3SD01	青白磁	合子	(5.0)	(3.8)	(2.0)	身・1/5	乳灰色(明青色透明釉)		良好	
7	11	3SP02	瓦器	埴	--	--	--	口縁部細片	黒灰色	2mmの砂粒を少量含む	不良	芯黒あり
7	12	3SP02	土師器	坏	(13.6)	--	--	口縁部1/12	茶褐色	砂粒含まず	良好	
7	13	3SP02	土師器	坏	--	--	--	口縁部細片	淡茶褐色	砂粒含まず	良好	
7	14	3SP02	土師器	坏	--	--	--	口縁部細片	淡茶褐色	砂粒含まず	良好	
7	15	3SP02	土師器	坏	--	--	--	口縁部細片	明茶褐色	砂粒含まず、良	良好	
7	16	3SP02	土師器	皿	--	--	--	底部小片	淡赤茶色	砂粒含まず	良好	回転ヘラ切
7	17	3SP03	瓦器	埴	(15.0)	--	--	口縁部1/8	銀灰~黒灰色	砂粒含まず	良好	芯黒なし
7	18	3SK05	土師器	坏	(15.4)	(10.5)	2.9	1/3	淡茶褐色	砂粒含まず	不良	回転糸切
7	19	3SP04	瓦器	埴	--	--	--	底部細片	淡灰色	細砂粒少量	不良	芯黒なし
7	20	3SK06	土師器	鍋	--	--	--	口縁部細片	灰茶色	1~3mmの砂粒やや多く含む	良好	口唇部煤付着

Tab.3 若菜大堀遺跡第3次調査区 出土石器一覧

Fig.	No	遺構	種別	全長(cm)	全幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	石材	遺存量	備考
7	10	3SD01	剥片磁	3.6	2.4	0.3	2.8	サヌカイト(ハリ貫安山岩)	完存	弥生磁
8	1	表探	打製石	1.5	1.0	0.2	0.3	半透明黒曜石	完存	縄文磁

Tab.4 若菜裏道遺跡第1次調査区 遺構一覧

Fig.	S番号	遺構番号	グリット	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
15	1	1SE01		--	--	--	--	不定型(円)		須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、青磁、輸入陶器	中世	井戸幹なし、2本?
10	2	1SX02		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱
10	3	1SX03		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱
10	4	1SX04		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱(ブドウ棚基礎)
12	5	1SD05		(5.2)	0.7	0.1	N-68°-W		緩やかな屈状	土師器	現代	SD01→
10	6	1SX06		--	--	--	--			土師器、椀瓦	現代	覆乱(ブドウ棚基礎)
10	7	1SX07		--	--	--	--			陶器	現代	覆乱
10	8	1SX08		--	--	--	--			土師器、白磁、椀瓦	現代	覆乱
10	9	1SX09		--	--	--	--			土師器、磁器	現代	覆乱
13-14	10	1SD10		(3.2)	3.5	0.9	N-21°-E		逆台形	須恵器、土師器、瓦器、黒色土器、青磁、輸入陶器、石製品	中世	青磁は12世紀後半を中心とする
10	11	1SX11		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱
10	12	1SX12		--	--	--	--			NON	現代	覆乱(ブドウ棚基礎)
10	13	1SX13		--	--	--	--			土師器、白磁、陶器、瓦	現代	覆乱(重機痕)
10	14	1SX14		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱(植物痕)
16	15	1SK15		1.3	0.8	0.4	N-20°-W	隅丸長方形	逆台形	土師器、陶器、椀瓦	現代	SK13→
10	16	1SX16		--	--	--	--				現代	SK13→、植物痕
10	17	1SK17		--	--	--	--			須恵器、土師器、黒色土器		植物の根跡の可能性もあり
10	18	1SX18		--	--	--	--			土師器	現代	覆乱(ブドウ棚基礎)
10	19	1SX19		--	--	--	--			青磁、陶器	現代	覆乱
10	20	1SX20		--	--	--	--			須恵器、土師器、青磁、容器、石製品、椀瓦	現代	覆乱(ゴミ穴)
10	21	1SK21		--	--	--	--			土師器(遺構検出面より)		

Tab.5

若菜裏道遺跡第1次調査区 出土土器一覽

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	色調(外/内(軸))	胎土	焼成	備考
17	1	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	2	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	明橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	不良	
17	3	1SD10	土師器	甕				底部細片	暗褐～淡赤褐色	0.5～1mmの砂粒、角閃石、赤色粒子を含む	やや良	
17	4	1SD10	青磁	碗	(15.6)			口縁部1/8	灰色(灰緑色透明釉)	黒色粒子が見られる	良好	同安窯系、太宰府1-1b類
17	5	1SD10	土師器	坏	(15.6)	(8.2)	6.4	1/6	淡橙褐色	角閃石、雲母、赤色粒子を含む	良好	
17	6	1SD10	土師器	坏	(14.3)			口縁部1/8	橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	7	1SD10	土師器	坏		(7.6)		底部1/6	淡黄褐色/淡茶褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	8	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	9	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	橙褐色	赤色粒子、雲母、細砂粒を含む	良好	
17	10	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	11	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	淡茶褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	12	1SD10	土師器	坏				底部細片	淡褐色	赤色粒子、雲母を含む、角閃石を少し含む	良好	
17	13	1SD10	土師器	皿				細片	淡橙褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	
17	14	1SD10	土師器	皿				底部細片	褐色/橙褐色	赤色粒子、雲母、細砂粒を少し含む	良好	
17	15	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	暗褐～黒色/褐色	1mm程度の砂粒、角閃石を多く含む	良好	
17	16	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	暗褐～茶褐色/明茶褐色	0.5～2mm程度の砂粒、雲母を含む	良好	
17	17	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	茶褐色	0.5～3mm程度の砂粒、金雲母、角閃石、赤色粒子を含む	良好	
17	18	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	茶褐色	赤色粒子、雲母、細砂粒を含む	良好	
17	19	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	淡褐色～暗褐色	1～2mmの砂粒、雲母、角閃石、赤色粒子を含む	良好	口唇部表面剥目
17	20	1SD10	土師器	不明製品				細片	黄白色	赤色粒子、雲母を含む	良好	ドーナツ状
17	21	1SD10	須恵器	甕				胴部細片	淡灰褐色	黒色粒子、雲母を含む	やや良	外面格子文
17	22	1SD10	黒色土器B	埴				口縁部細片	黒	雲母を少し含む、精良	良好	
17	23	1SD10	黒色土器A	埴				底部細片	黒/淡褐色	細砂粒、雲母、角閃石、赤色粒子を含む	やや良	
17	24	1SD10	瓦器	埴		(7.6)		底部1/4	黒	細砂粒、雲母を含む	良好	芯黒露出
17	25	1SD10	青磁	碗	(16.6)				灰褐色(暗緑色透明釉)	精良	良好	竜泉窯系、太宰府1-2類
17	26	1SD10	青磁	碗				口縁部細片	灰色(暗灰緑色透明釉)	精良	良好	竜泉窯系、太宰府1-2類
18	27	1SD10	土師器	坏	(16.0)			口縁部1/6	暗褐～淡褐色/黒	雲母、赤色粒子を少し含む	良好	
18	28	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	淡褐色	1～4mmの小石、赤色粒子を少し含む、雲母を含む	良好	
18	29	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	橙褐～淡茶褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	
18	30	1SD10	土師器	皿	(8.8)	(6.4)	1.0	底部1/4	淡茶褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	
18	31	1SD10	土師器	皿	(9.6)	(8.5)	0.9	底部1/4	暗褐色/淡橙褐色	角閃石、赤色粒子を含む	不良	
18	32	1SD10	土師器	皿				底部細片	乳白色	細砂粒、雲母、赤色粒子を含む	やや良	
18	33	1SD10	土師器	大皿				底部1/6	淡褐～橙褐色	細砂粒、雲母、赤色粒子を含む	良好	高台あり
18	34	1SD10	土師器	甕	(26.6)			口縁部1/6	褐～暗褐色	0.5～2mmの砂粒、雲母、角閃石、赤色粒子を含む	良好	
18	35	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	淡褐色	角閃石を多く含む、雲母、赤色粒子を少し含む	やや良	
18	36	1SD10	土師器	甕				口縁部細片	褐～暗褐色	細砂粒、雲母、角閃石、赤色粒子を含む	良好	
18	37	1SD10	土師器	甕				胴部細片	淡茶褐～橙褐色	細砂粒、雲母、赤色粒子を含む	良好	外面へラ抜き
18	38	1SD10	土師器	鉢				底部細片	淡茶褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	
18	39	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	褐～暗褐色/褐色	1～5mmの砂粒、角閃石、金雲母、赤色粒子を含む	良好	
18	40	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	褐色/黒	1～3mmの砂粒、角閃石を含む、赤色粒子を少し含む	良好	
18	41	1SD10	須恵器	坏				口縁部細片	灰色	精良	良好	
18	42	1SD10	須恵器	坏		(6.2)		底部1/4	灰色	精良	良好	
18	43	1SD10	須恵器	皿				底部細片	青灰色	精良、雲母、黒色粒子を含む	良好	
18	44	1SD10	須恵器	壺		(10.4)		底部1/4	灰～黒灰色/灰色	雲母、黒色粒子を含む	良好	底部煤付着
18	45	1SD10	瓦器	埴	(16.0)			口縁部1/5	乳褐色/黒灰色	精良、雲母を含む	やや良	
18	46	1SD10	瓦器	埴		(8.2)		底部1/4	灰～乳褐色	細砂粒、雲母を少し含む	やや良	
19	47	1SD10	青磁	碗	(13.8)			口縁部1/6	灰褐色(暗緑色透明釉)	黒色粒子を含む	良好	竜泉窯系、太宰府1-1a類
19	48	1SD10	青磁	碗	(16.0)			口縁部1/8	乳灰～灰色(緑色透明釉)		良好	竜泉窯系、太宰府1-2類
19	49	1SD10	青磁	碗	(13.8)			口縁部1/2	灰色(暗緑色透明釉)		良好	竜泉窯系、太宰府1-2類
19	50	1SD10	青磁	碗	(15.9)			口縁部1/4欠損	灰色(緑色透明釉)		良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類
19	51	1SD10	青磁	碗	(16.4)			口縁部1/4	灰色(暗緑色透明釉)	精良	良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類
19	52	1SD10	青磁	碗				口縁部細片	灰色(青緑色透明釉)	精良	良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類
19	53	1SD10	青磁	碗	16.3	8.0	6.5	1/4欠損	灰色(青緑色透明釉)		良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類
19	54	1SD10	青磁	碗	(16.8)	(8.2)	7.2	1/2欠損	灰色/淡褐色(薄緑褐色)		やや良	竜泉窯系、太宰府1-4b類
19	55	1SD10	青磁	碗	(16.0)			口縁部1/5	明灰色(暗黄緑色)	黒色粒子を含む	良好	竜泉窯系、太宰府1-4c類、被熱
20	56	1SD10	青磁	碗	(17.3)	6.0	6.8	1/3	灰色(明青緑透明釉)		良好	同安窯系、太宰府IV-1類
20	57	1SD10	青磁	碗	(5.1)			底部のみ	淡黄灰～灰色(灰緑透明釉)		良好	同安窯系
20	58	1SD10	青磁	皿	(4.9)			底部のみ	灰～淡褐色(乳褐色)		不良	同安窯系? 太宰府1-2類? 軸はガラス化せず
20	59	1SD10	青磁	皿	(10.4)	5.0	2.1	口縁部3/4欠損	灰色(青緑透明釉)		良好	同安窯系、太宰府1-2b類
20	60	1SD10	青磁	皿	(11.2)	(6.2)	2.0	口縁部1/10-底部3/4欠損	灰色(黄緑透明釉)		良好	同安窯系、太宰府1-2b類
20	61	1SD10	輸入陶器	鉢		(7.2)		底部1/4	赤褐～灰色(茶～黒茶褐)	白色粒子を含む	良好	太宰府1-2類
21	63	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	乳白色	雲母、赤色粒子を含む	やや良	
21	64	1SD10	土師器	坏				口縁部細片	淡橙褐色	細砂粒、雲母、赤色粒子を含む	良好	
21	65	1SD10	土師器	坏		(10.6)		底部1/6	淡橙褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	底部へラケズリ
21	66	1SD10	土師器	皿	(9.4)	(6.6)	1.2	1/2	淡茶褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	底部糸切
21	67	1SD10	土師器	皿	(9.0)	(6.8)	1.1	1/6	淡橙褐色	雲母、赤色粒子	良好	底部糸切
21	68	1SD10	土師器	皿		(10.8)		底部1/4	淡褐色	細砂粒、雲母、赤色粒子を含む	やや良	
21	69	1SD10	土師器	皿				底部細片	暗褐～橙褐色	細砂粒、角閃石、雲母、赤色粒子を含む	不良	底部糸切
21	70	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐～暗茶褐色/淡褐～褐色	1～3mm程度の砂粒、角閃石、雲母を含む	良好	口唇部上面剥目、外面煤付着
21	71	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色/褐色	1～3mm程度の砂粒、角閃石、雲母を含む	良好	外面煤付着
21	72	1SD10	須恵器	甕				胴部細片	灰～黒/灰色	細砂粒を少し含む	良好	外面格子目、内面上部平行タキ、内面下部青黒斑
21	73	1SD10	須恵器	甕				胴部細片	灰褐色/暗灰色	細砂粒を少し含む	良好	外面格子目、内面平行タキ
21	74	1SD10	瓦器	埴	(16.3)			口縁部1/7	乳白～暗灰色	雲母、黒色粒子を含む	やや良	全体磨滅
21	75	1SD10	瓦器	埴				口縁部細片	黒～淡褐色	細砂粒、雲母を含む	やや良	全体磨滅
21	76	1SD10	瓦器	埴				口縁部細片	淡褐色/灰褐色	細砂粒、雲母を含む	不良	全体磨滅
21	77	1SD10	瓦器	埴		(5.9)		底部1/4	灰色/暗褐色	細砂粒、雲母を含む	やや良	全体磨滅

Fig. No	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	色調(外/内(軸))	胎土	焼成	備考		
21	78	1SD10	白磁	碗			口縁部細片	灰色(灰色透明釉)		良好	口縁部破損		
22	79	1SD10	青磁	碗	(16.7)	8.2	7.3	口縁部3/4欠損	灰色(緑色透明釉)	良好	竜泉窯系、太宰府1-1c類、見込「金玉満堂」		
22	80	1SD10	青磁	碗	16.8	7.8	7.5	3/4	淡灰色(淡緑色透明釉)		竜泉窯系、太宰府1-2a類?		
22	81	1SD10	青磁	碗	(17.0)	(8.6)	7.4	1/3	淡灰色(明青色透明釉)	やや良	竜泉窯系、太宰府1-4a類		
22	82	1SD10	青磁	碗	16.2	7.5	6.6	1/4	灰色(緑色透明釉)	良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類		
22	83	1SD10	青磁	碗	15.8	8.0	6.9	3/4	灰色(暗緑色透明釉)	良好	竜泉窯系、太宰府1-4a類		
22	84	1SD10	青磁	碗	(16.4)	8.0	7.0	3/4	淡灰色(淡茶緑色透明釉)	やや良	竜泉窯系、太宰府1-4a類		
23	85	1SD10	青磁	皿	(10.7)	5.5	2.5	口縁部1/4・底部3/4	灰色(薄緑色透明釉)	良好	同安窯系、太宰府1-2b類		
23	86	1SD10	青白磁	碗		(5.6)		底部のみ	明灰色(淡乳灰色)	1~2mm大の白色小砂粒、石英を含む	良好	博多Ⅲ類?	
23	87	1SD10	輸入陶器	四耳壺	(9.2)			口縁部3/4	暗褐色(淡緑灰色釉)	白色粒を少し含む	良好	肩部褐色釉かけ流し、太宰府V-2類?	
24	89	1SD10	土師器	杯				口縁部細片	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石、赤色粒子を含む	やや良	全体磨滅	
24	90	1SD10	土師器	皿	(16.2)	(11.0)	2.6	口縁部1/4・底部1/2	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	やや良	全体磨滅	
24	91	1SD10	土師器	皿		(10.4)		底部1/8	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	不良	全体磨滅	
24	92	1SD10	土師器	皿				口縁部細片	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	やや良	糸切?全体磨滅	
24	93	1SD10	土師器	皿				底部細片	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、赤色粒子を含む	不良	全体磨滅	
24	94	1SD10	土師器	皿				底部細片	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石を含む	不良	全体磨滅	
24	95	1SD10	土師器	皿	8.5	6.0	1.0	完形	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	不良	回転糸切?全体磨滅	
24	96	1SD10	土師器	皿	(10.2)	(7.2)	1.3	口縁部1/6	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	不良	回転糸切?全体磨滅	
24	97	1SD10	土師器	皿	(9.5)	(6.8)	1.1	口縁部1/8	淡白褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、赤色粒子を含む	やや良	回転糸切?全体磨滅	
25	98	1SD10	土師器	蓋				口縁部細片	淡褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、赤色粒子を含む	良好		
25	99	1SD10	土師器	埴				底部細片	淡褐色	1~2mm程度の白色小砂粒、石英、赤色粒子を含む	不良		
25	100	1SD10	土師器	杯				口縁部細片	淡茶灰色/淡褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、金雲母を含む	やや良		
25	101	1SD10	土師器	皿	(8.6)	(5.8)	1.3	1/4	淡黄褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、金雲母を含む	やや良	底部回転糸切	
25	102	1SD10	土師器	壺				口縁部細片	暗茶褐~暗黒色/淡褐色	1~7mm程度の砂粒、石英、角閃石を含む	やや良		
25	103	1SD10	土師器	壺				口縁部細片	淡茶褐~淡灰褐色/淡灰褐色	1~2.5mm程度の砂粒、石英、角閃石を含む	やや良		
25	104	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	黒~黒褐色/暗褐色	1~5mmの砂粒、角閃石を含む	良好	外面煤付着、口唇部上面調整不明	
25	105	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色/褐色	1~2mm程度の砂粒、角閃石を含む	良好	口唇部上面磨目	
25	106	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐~淡黒色/淡黄褐色	1~3mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	口唇部上面刷毛目後磨目	
25	107	1SD10	土師器	鍋				口縁部細片	暗茶褐色/淡灰褐色	1~5mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石、金雲母を含む	やや良	口唇部上面磨目?	
25	108	1SD10	土師器	杯				口縁部細片	淡茶灰色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	やや良		
25	109	1SD10	土師器	杯		(6.5)		底部1/4	淡茶灰色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	良好		
25	110	1SD10	土師器	杯		(11.2)		底部1/4	淡茶褐色/淡褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	良好		
25	111	1SD10	土師器	壺				胴部細片	淡茶褐/淡褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英を含む	良好	外面平行タタキ、内面青海斑	
25	112	1SD10	土師器	長頸壺				頸部細片	淡茶褐~暗褐色	1mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石を含む	良好		
25	113	1SD10	土師器	鉢				口縁部細片	淡茶褐~暗褐色	1.5mm程度の白色小砂粒、石英を含む	やや良	東播系	
25	114	1SD10	土師器	黒色土器B	埴			口縁部細片	黒	微細粒を含む、精良	良好		
25	115	1SD10	土師器	黒色土器B	托	(10.7)	(8.0)	2.6	1/4	黒	微細粒を少し含む	良好	
25	116	1SD10	土師器	埴		(6.5)		底部1/2	淡灰白色/淡茶灰色	1~2mm程度の白色小砂粒、石英を含む	不良		
25	117	1SD10	土師器	埴		(6.0)		底部1/4	淡茶灰色	1.5mm程度の白色小砂粒、石英、角閃石を含む	不良		
25	118	1SD10	土師器	碗	(16.4)			口縁部1/7	灰色(黄緑~緑透明釉)		良好	同安窯系	
26	1	1SE01	土師器	蓋				口縁部細片	明褐色	精良	良好		
26	2	1SE01	土師器	杯?				口縁部細片	淡褐色	赤色粒子3mm黒色粒子を含む	良好	外面黒斑	
26	3	1SE01	土師器	皿	(7.6)	(6.4)	1.1	底部1/4	淡褐色	1mm程度の細砂粒を含む	やや良	底部糸切	
26	4	1SE01	土師器	皿				底部細片	灰~黒色/淡茶褐色	細砂粒を少し含む	やや良	底部糸切	
26	5	1SE01	土師器	皿		(10.2)		底部1/4	淡褐色	細砂粒、赤色粒子を含む	良好	底部糸切	
26	6	1SE01	土師器	杯		(9.6)		底部1/6	明赤褐色	赤色粒子、雲母を含む	良好	底部糸切	
26	7	1SE01	土師器	壺				口縁部細片	淡茶褐色	細砂粒、角閃石、赤色粒子を含む	やや良		
26	8	1SE01	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色/褐色	0.5mmの砂粒、雲母を含む	良好		
26	9	1SE01	土師器	鍋				口縁部細片	暗褐色/明茶褐色	1~3mm程度の砂粒、角閃石、赤色粒子を含む	良好	口唇部上面磨目	
26	10	1SE01	土師器	杯				口縁部細片	暗灰色	精良	良好		
26	11	1SE01	土師器	壺				胴部細片	黒灰色/灰色	細砂粒を少し含む	良好	外面格子目、内面青海斑	
26	12	1SE01	土師器	埴		(4.9)		底部1/4	淡赤褐色/黒	赤色粒子を少し含む	良好	高台割離	
26	13	1SE01	土師器	瓦器				口縁部細片	黒~乳褐色	精良	良好		
26	14	1SE01	土師器	埴		(6.2)		底部1/4	乳褐色	細砂粒を少し含む	良好		
26	15	1SE01	土師器	碗				口縁部細片	淡灰色(淡灰色透明釉)	細砂粒を少し含む	良好	口縁部破損	
26	16	1SE01	土師器	碗		(5.6)		底部1/2	灰色(暗青緑色透明釉)	細かい黒色粒子を含む	良好	竜泉窯系、太宰府II-b類	
26	17	1SE01	土師器	碗				口縁部細片	灰色(淡灰緑色透明釉)	精良	良好	同安窯系、太宰府1-1b	
26	18	1SE01	土師器	碗				口縁部細片	黄灰色(淡黄緑色透明釉)	黒色粒子を少し含む	良好	同安窯系	
26	19	1SE01	土師器	鉢				口縁部細片	赤紫	細砂粒を少し含む	良好	太宰府1-1c、Fig.26-20と同一個体	
26	20	1SE01	土師器	鉢		(12.1)		底部1/6	赤紫	1~2mmの砂粒を含む	良好	太宰府1-1c、Fig.26-19と同一個体	
26	21	1SX17	土師器	杯				口縁部細片	明茶褐色	雲母、角閃石、赤色粒子を含む	良好		
26	22	1SX17	土師器	壺				口縁部細片	暗褐色/明茶褐色	0.5~5mmの砂粒、角閃石、赤色粒子を多く含む	良好		
26	23	1SX17	土師器	黒色土器A	埴			底部のみ	明褐色/黒	細砂粒を少量、赤色粒子を多く含む	やや良	高台端欠損	
26	24	1SK21	土師器	皿	8.2	7.0	1.1	完形	淡褐~暗褐色/淡褐色	雲母、赤色粒子を含む	良好	検出面直上出土	
27	1	表様	白磁	皿	(9.6)	(5.0)	2.15	底部1/4	淡白灰色(淡青白釉)	黒色粒子を含む	良好	太宰府III-1類	

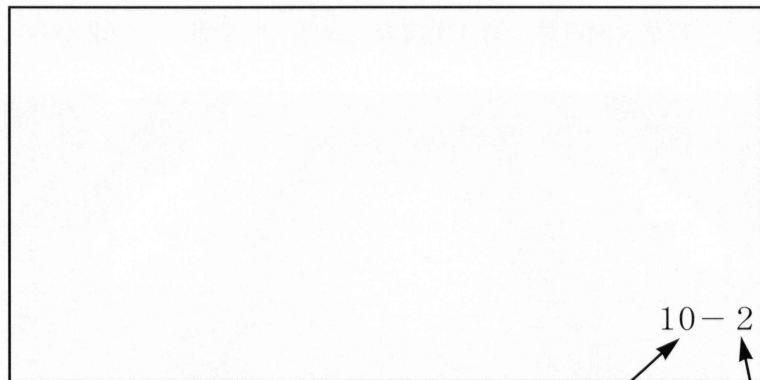
Tab.6 若菜裏道遺跡第1次調査区 出土石器一覧

Fig. No	遺構	種別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	石材	遺存量	備考
20	62	1SD10	碗	(19.7)			滑石	口縁部1/6	2次加工の途中?(羽を除く)
27	2	表様	上白	(29.1)	(32.0)	11.2	安山岩	1/4	
Fig. No	遺構	種別	全長(cm)	全幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	石材	遺存量	備考
23	88	1SD10	不明製品	11.2	4.2	1.9	113.1	滑石	2次加工品

P L A T E

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。

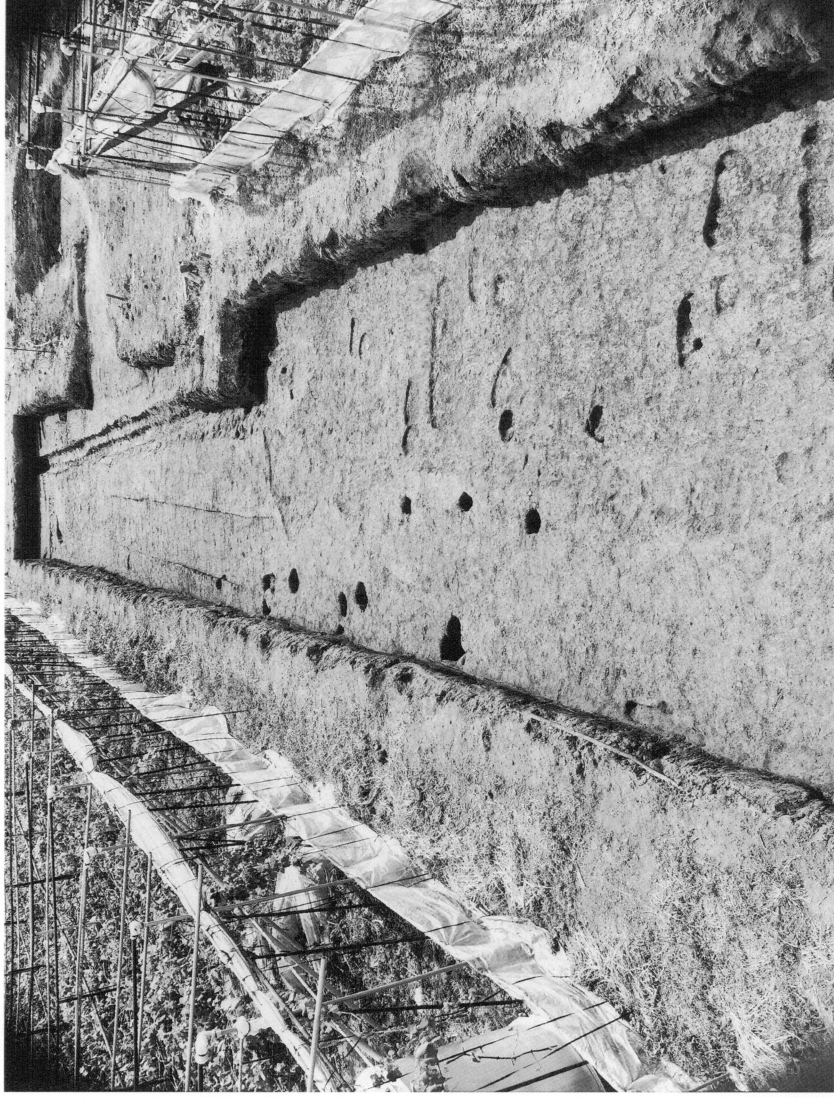


10-2

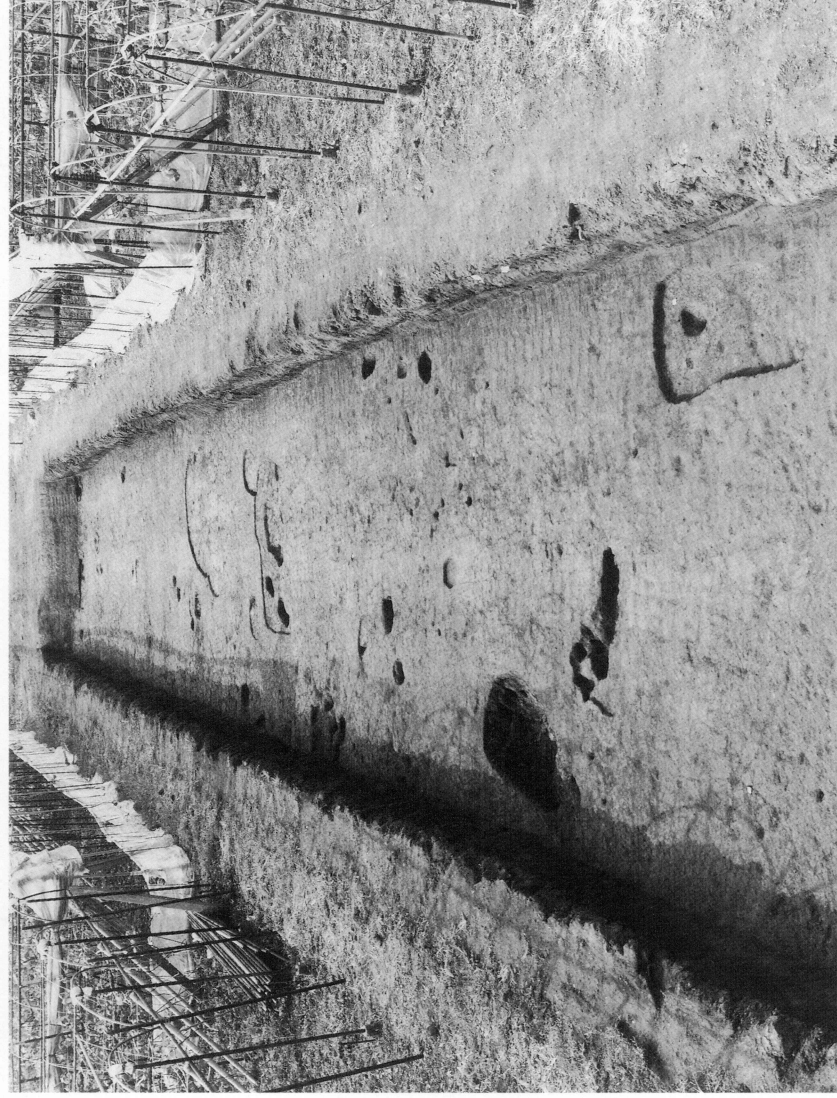
Fig番号

遺物番号

Pla. 1



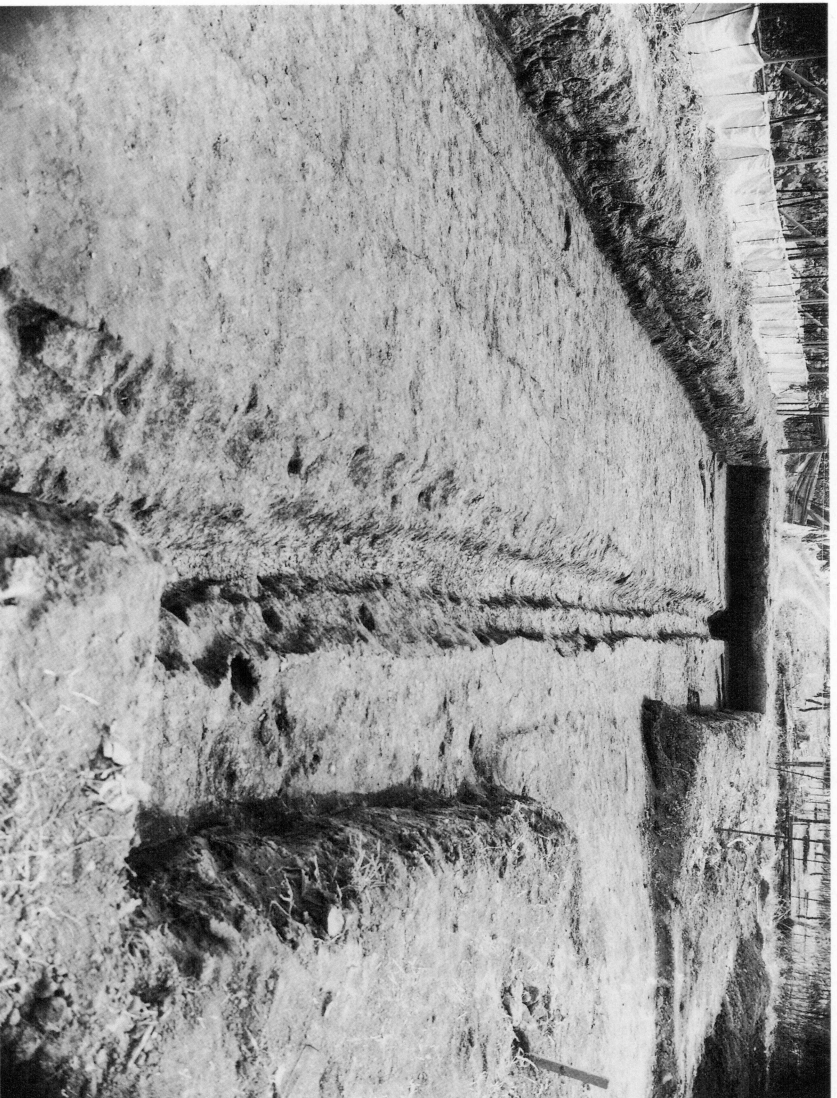
1 若菜大堀遺跡 第3次調査 A区 全景 (北から)



2 若菜大堀遺跡 第3次調査 B区 全景 (北から)



1 基本層序 (3SD01A軸土層断面) (北から)



2 3SD01 完掘状況 (北から)

Pla. 3



1 3SD01 B軸 土層断面 (南から)



2 3SD01 C軸 土層断面 (南から)

Pla. 4

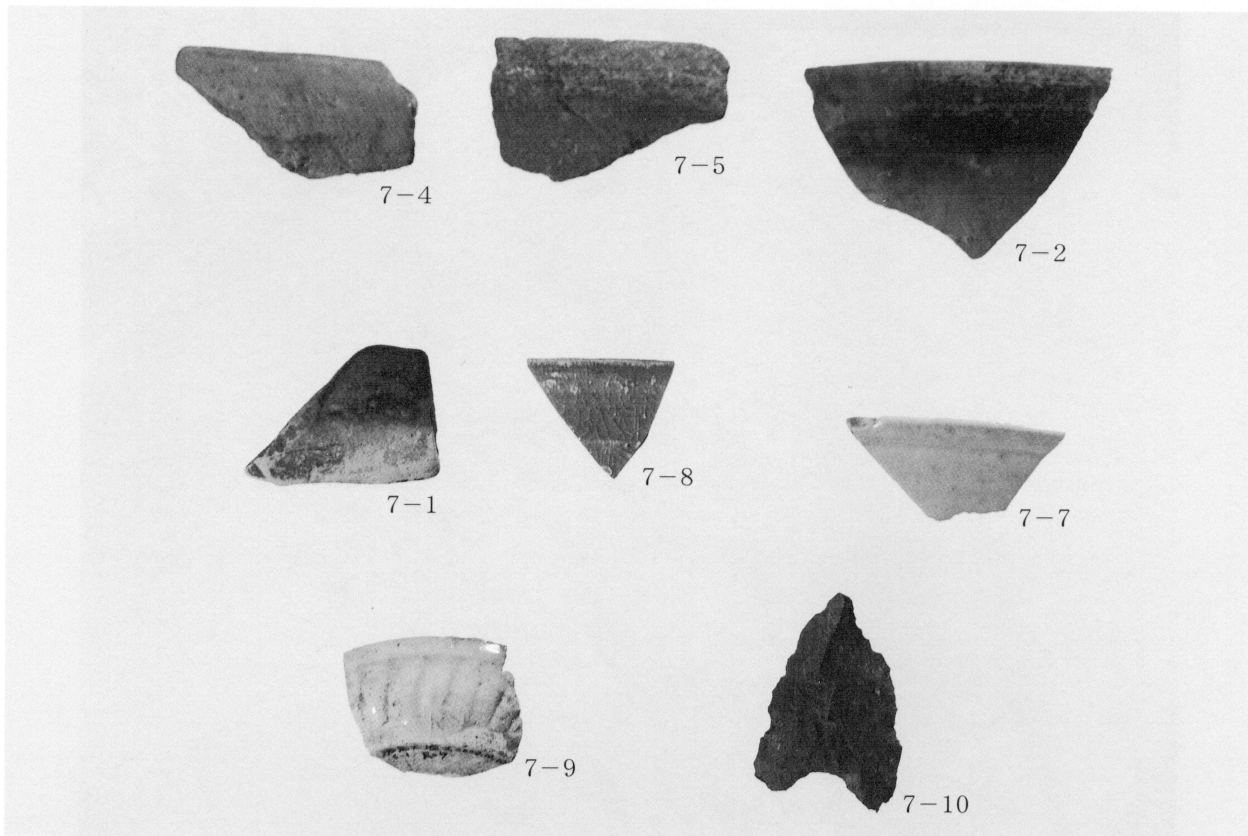


1 3SK10 完掘状況 (北から)

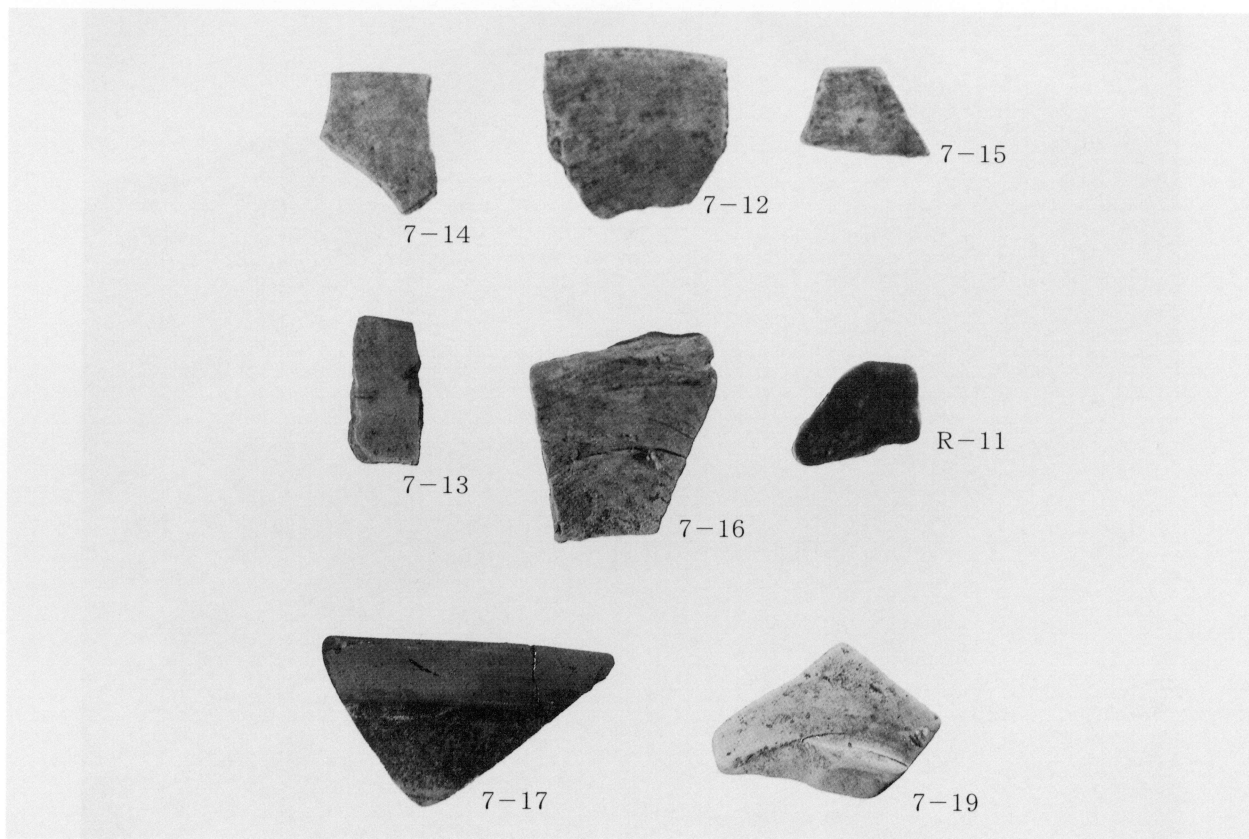


2 3SK10 土層断面 (南から)

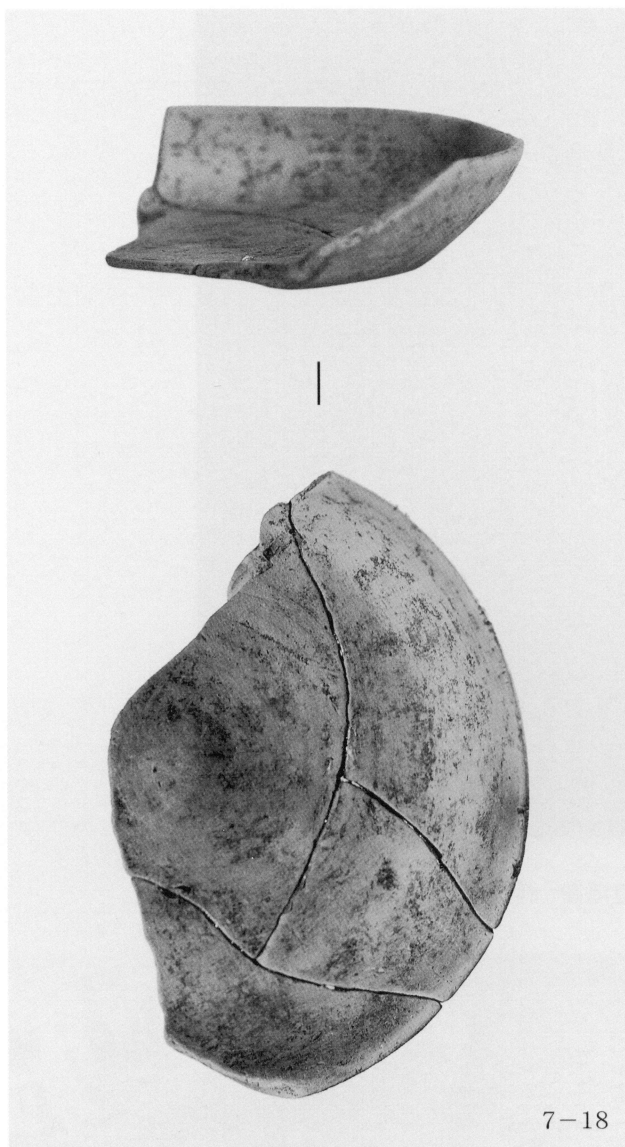
Pla. 5



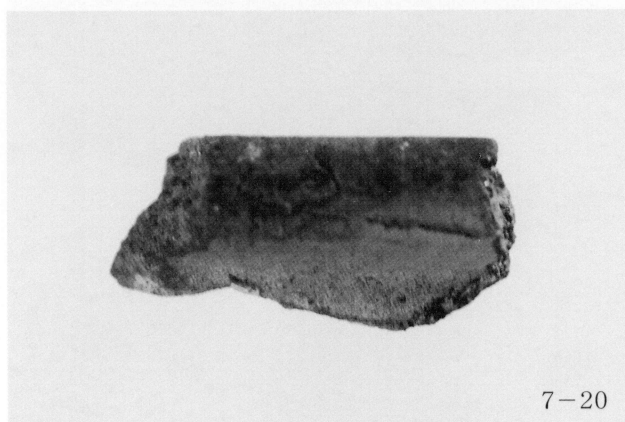
1 3SD01出土遺物



2 3SP02・03・04出土遺物



1 3SK05 出土遺物



2 3SK06 出土遺物

Pla. 7



1 若菜裏道遺跡 全景 (上から)



2 若菜裏道遺跡 全景 (北から)



1 1SD10 完掘状況 (上から)

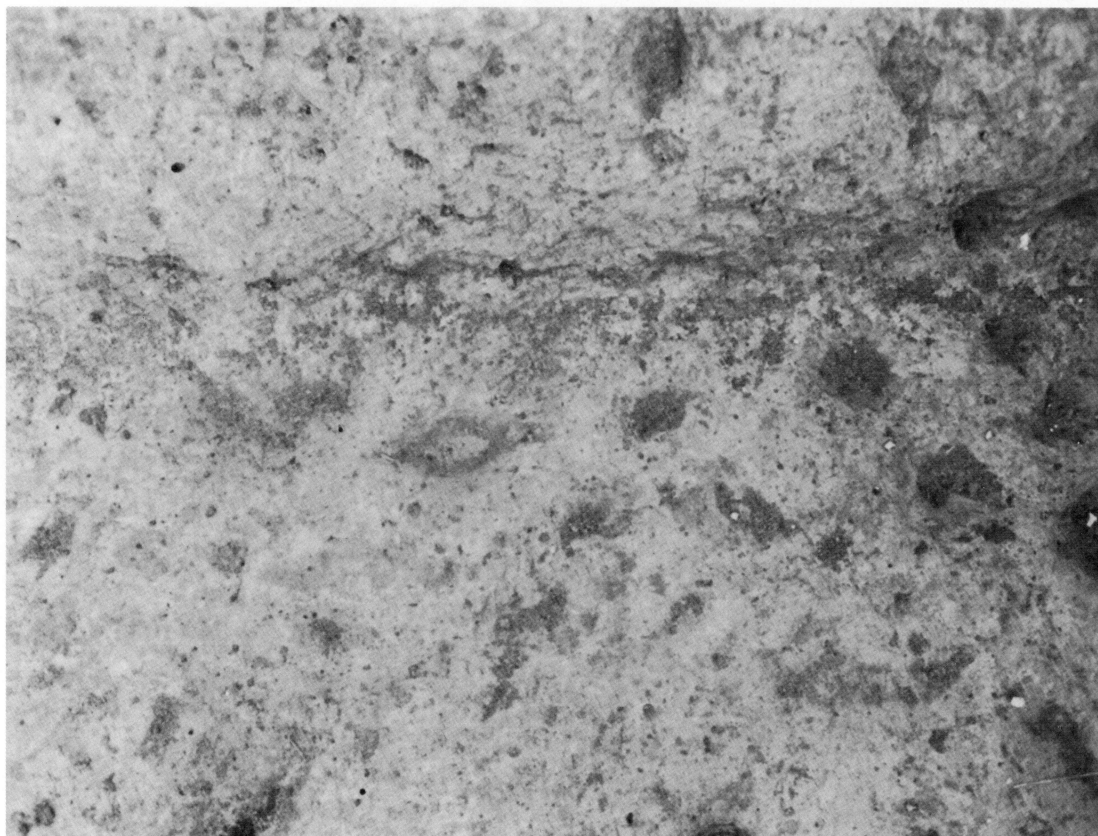


2 1SD10 完掘状況 (西から)

Pla. 9



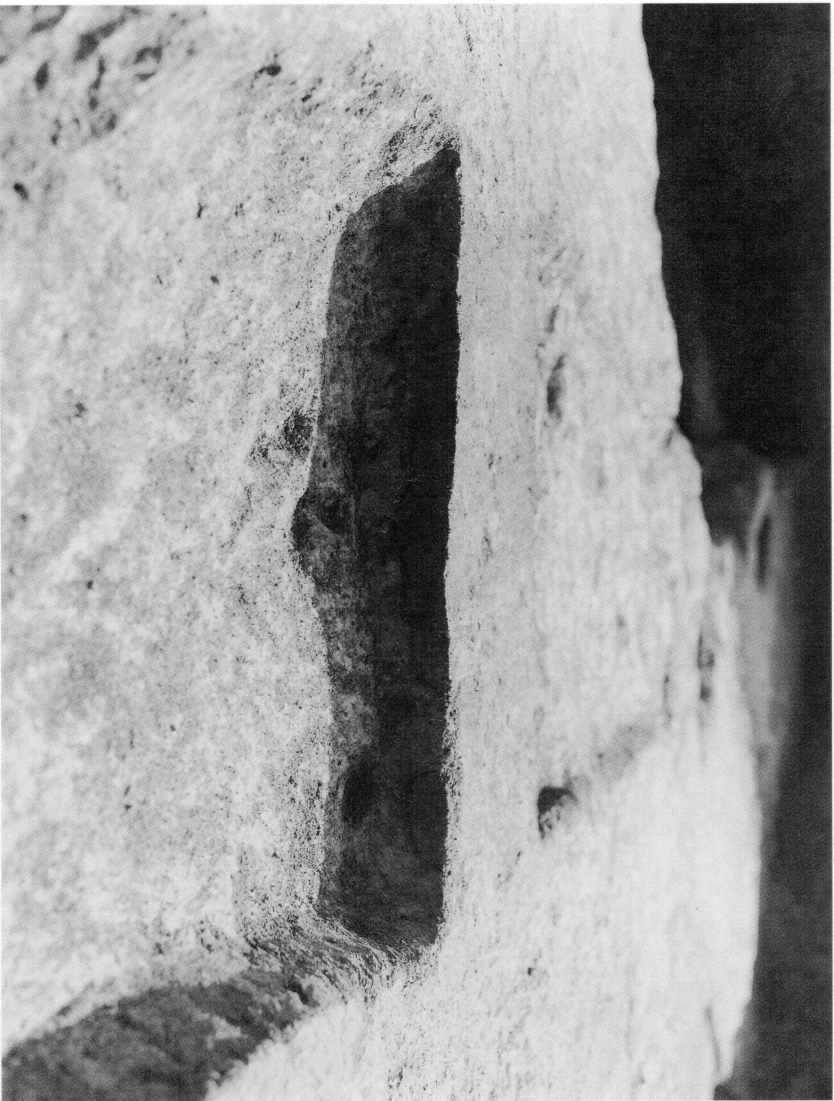
1 1SD10 土層断面 (西から)



2 1SD10 工具痕跡 (南から)



1 ISD05 (西から)



2 ISD05 土層断面 (西から)

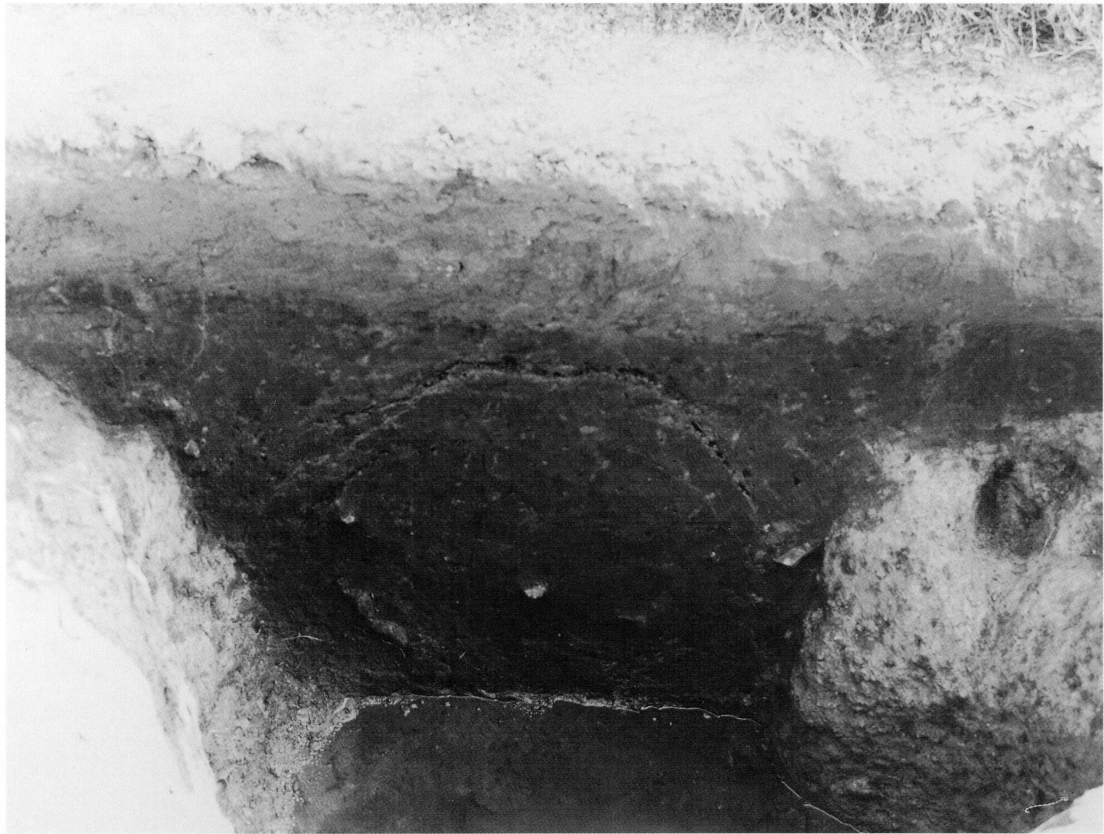
Pla.11



1 1SE01・1SD05 (上から)



2 1SE01 (北から)



1 1SE01 土層断面 (西から)

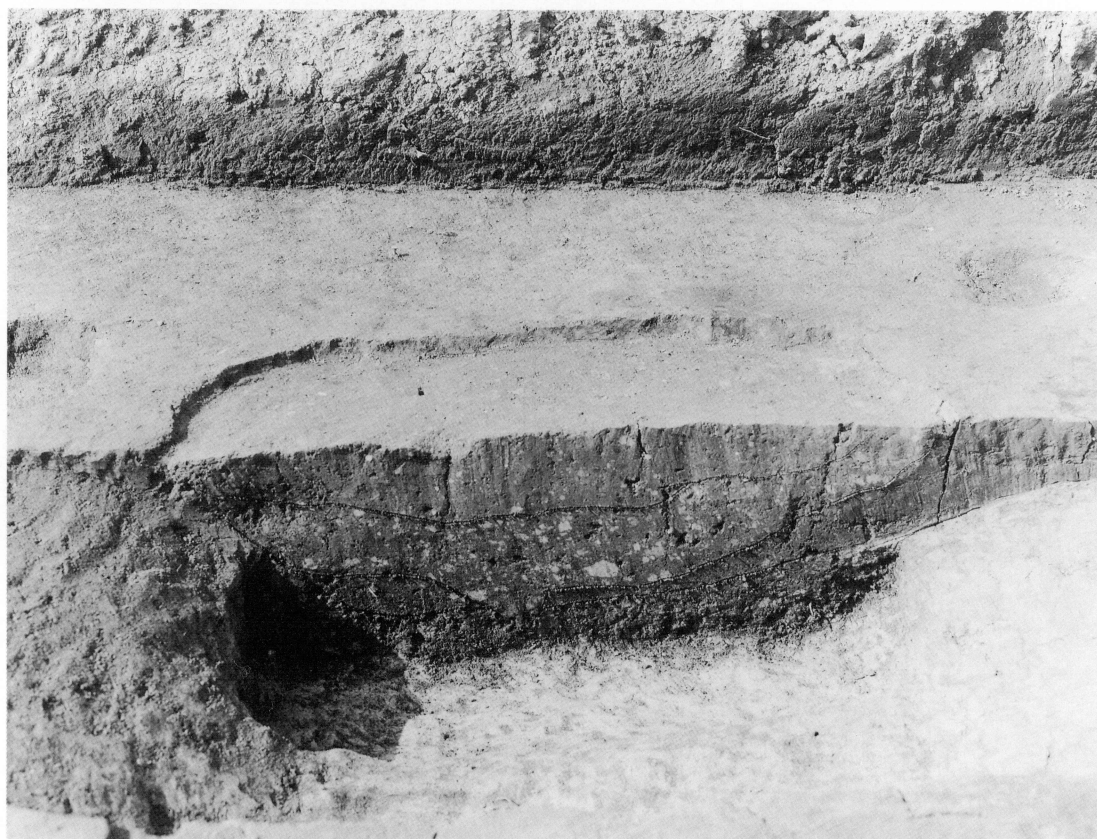


2 1SE01 たち割り状況 (南西から)

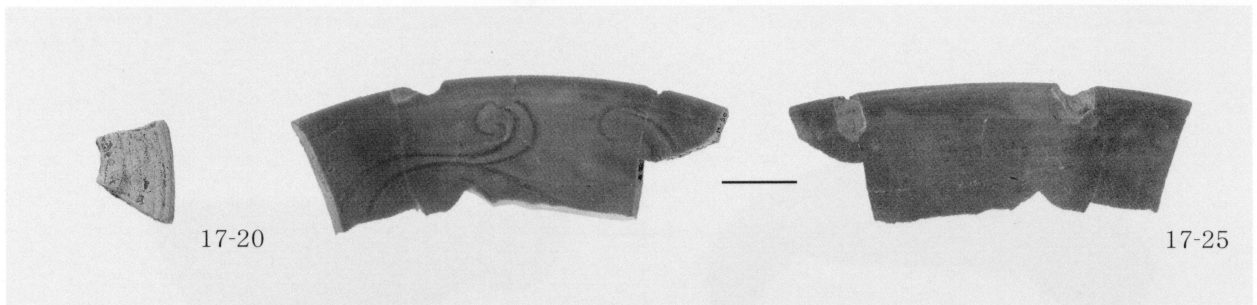
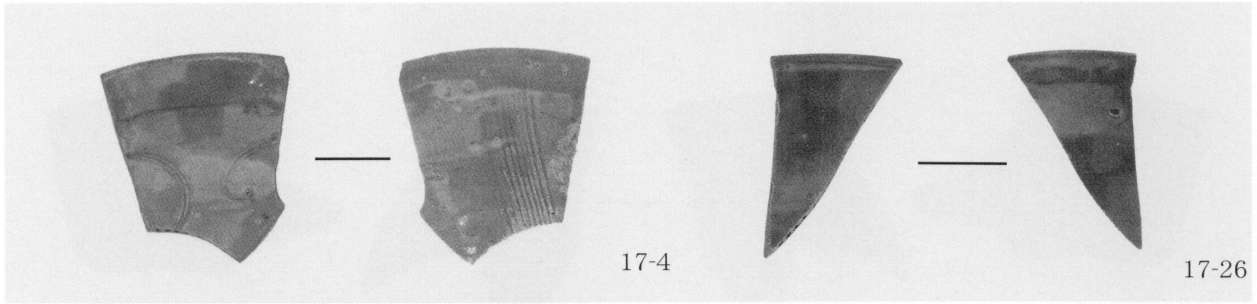
Pla.13



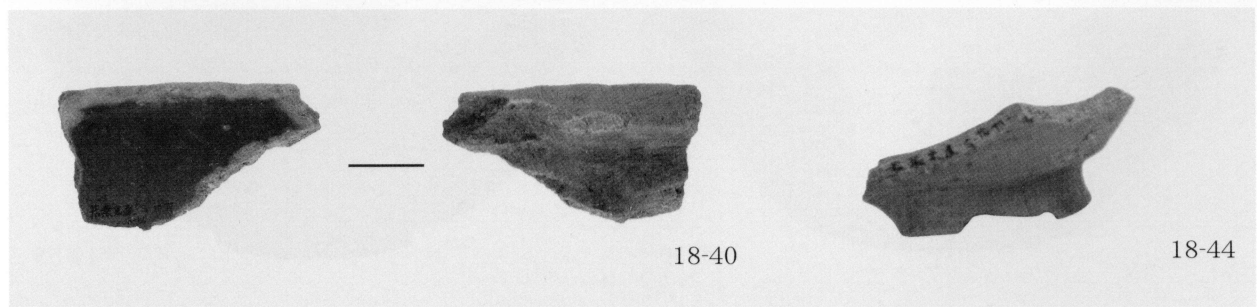
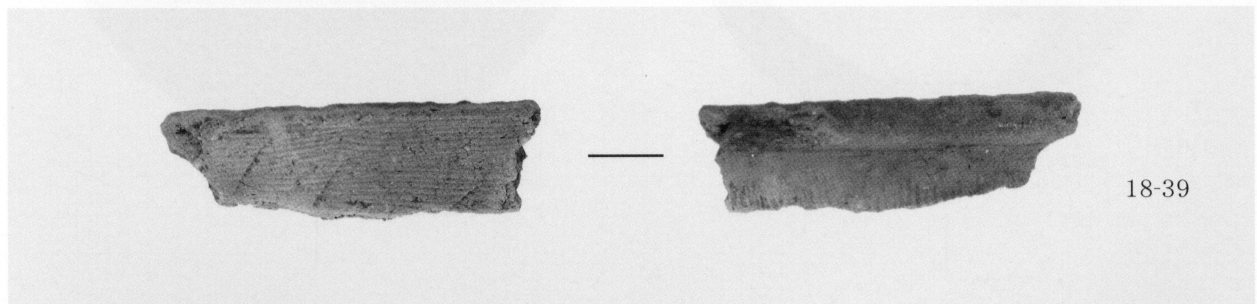
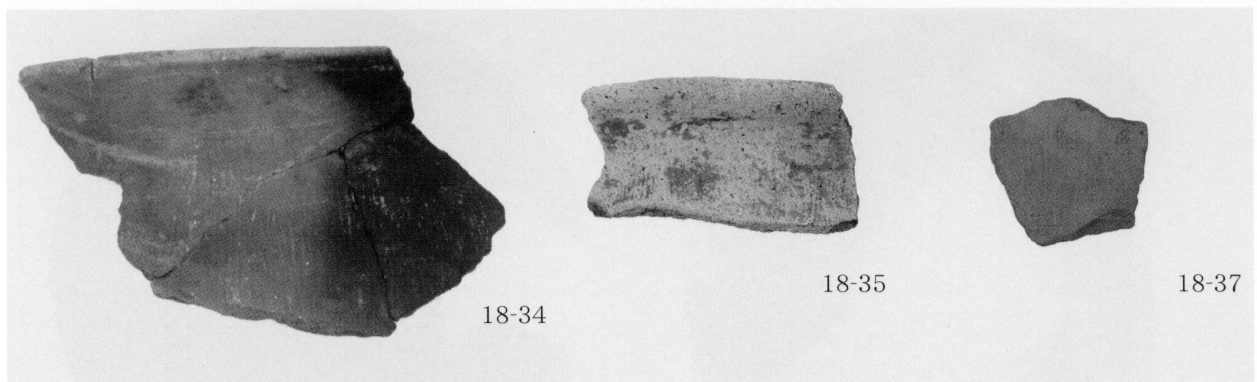
1 1SK15 完掘状況 (東から)



2 1SK15 土層断面 (東から)

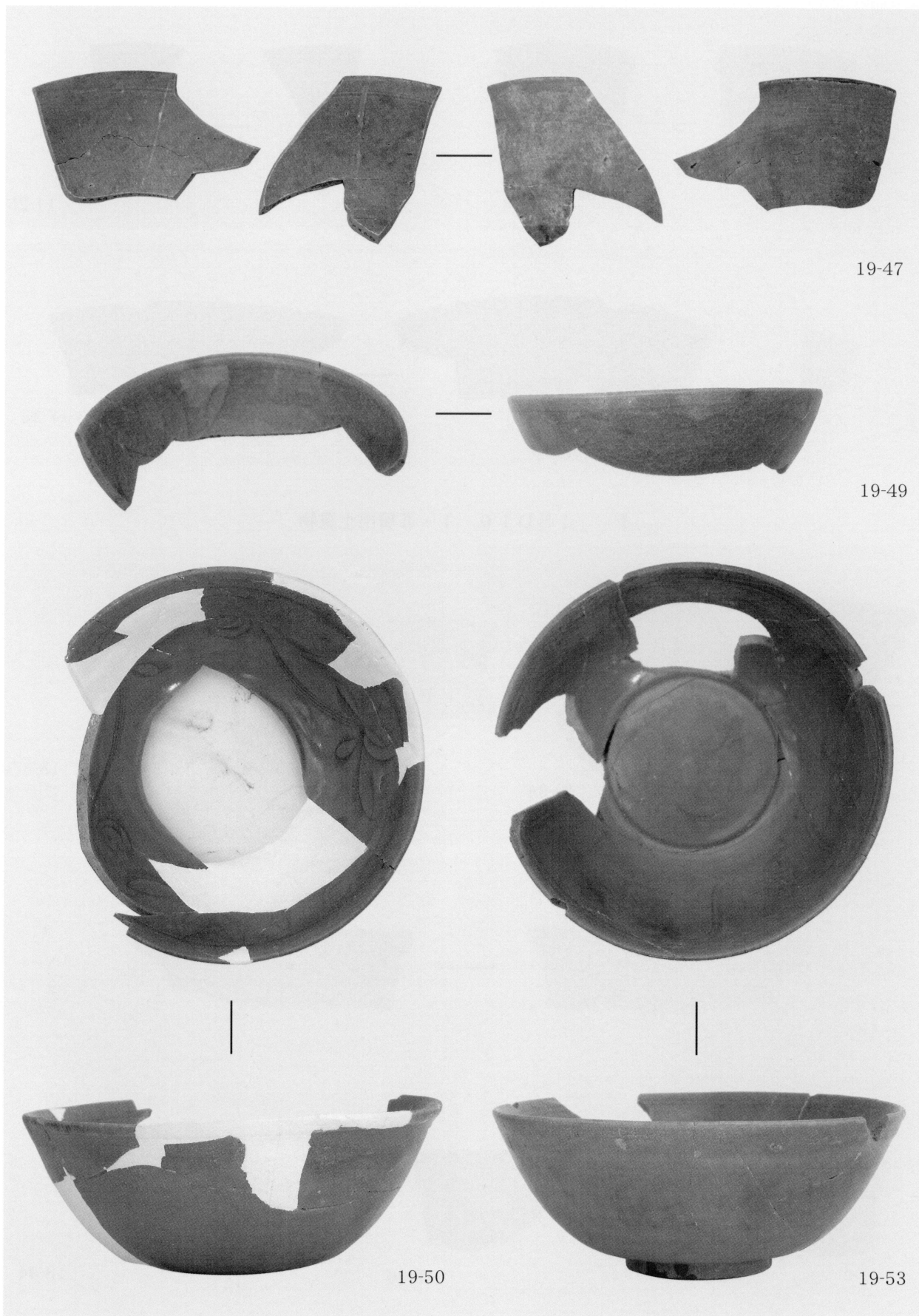


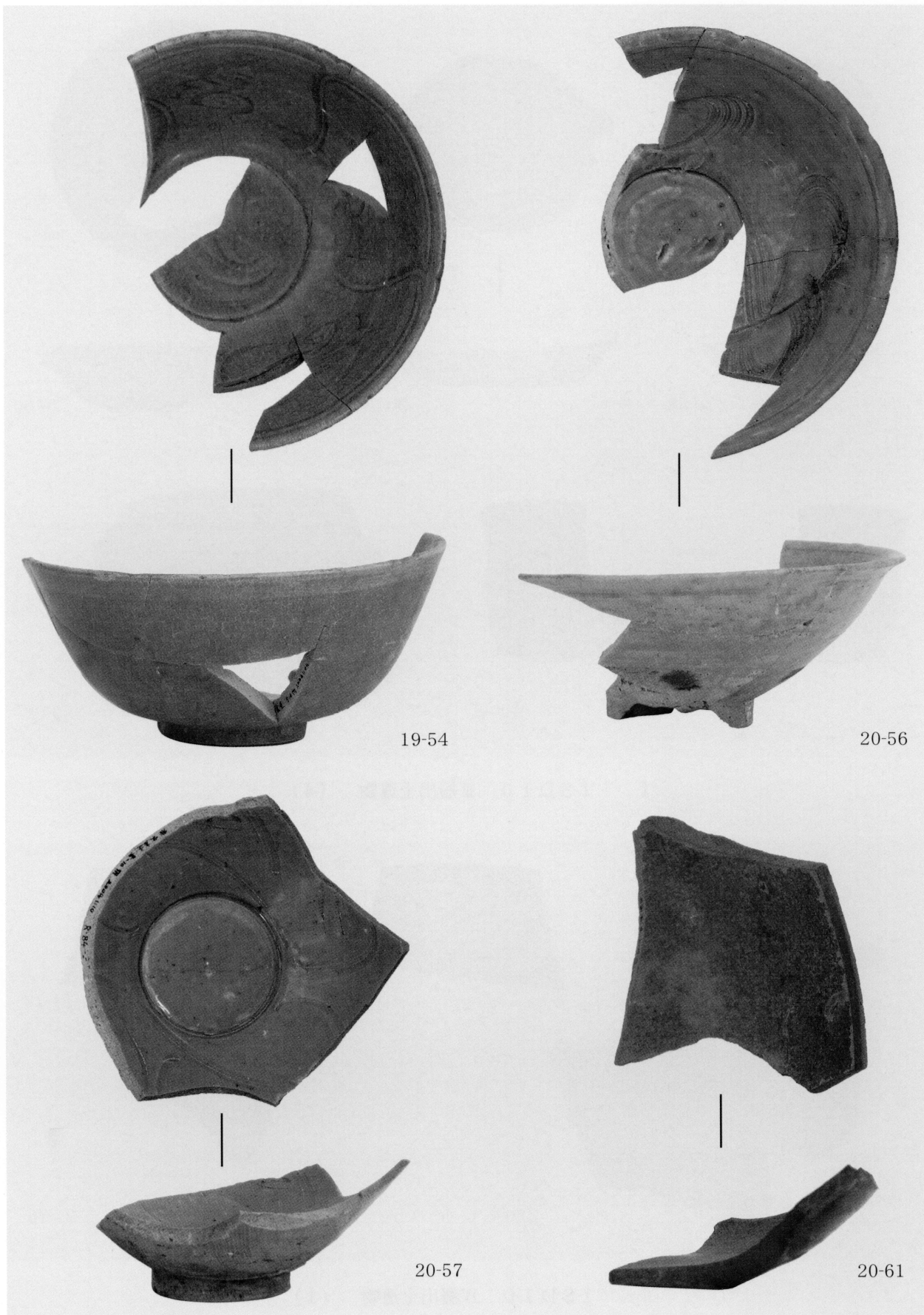
1 1SD10 I・II層出土遺物



2 1SD10 III層出土遺物 (1)

Pla.15





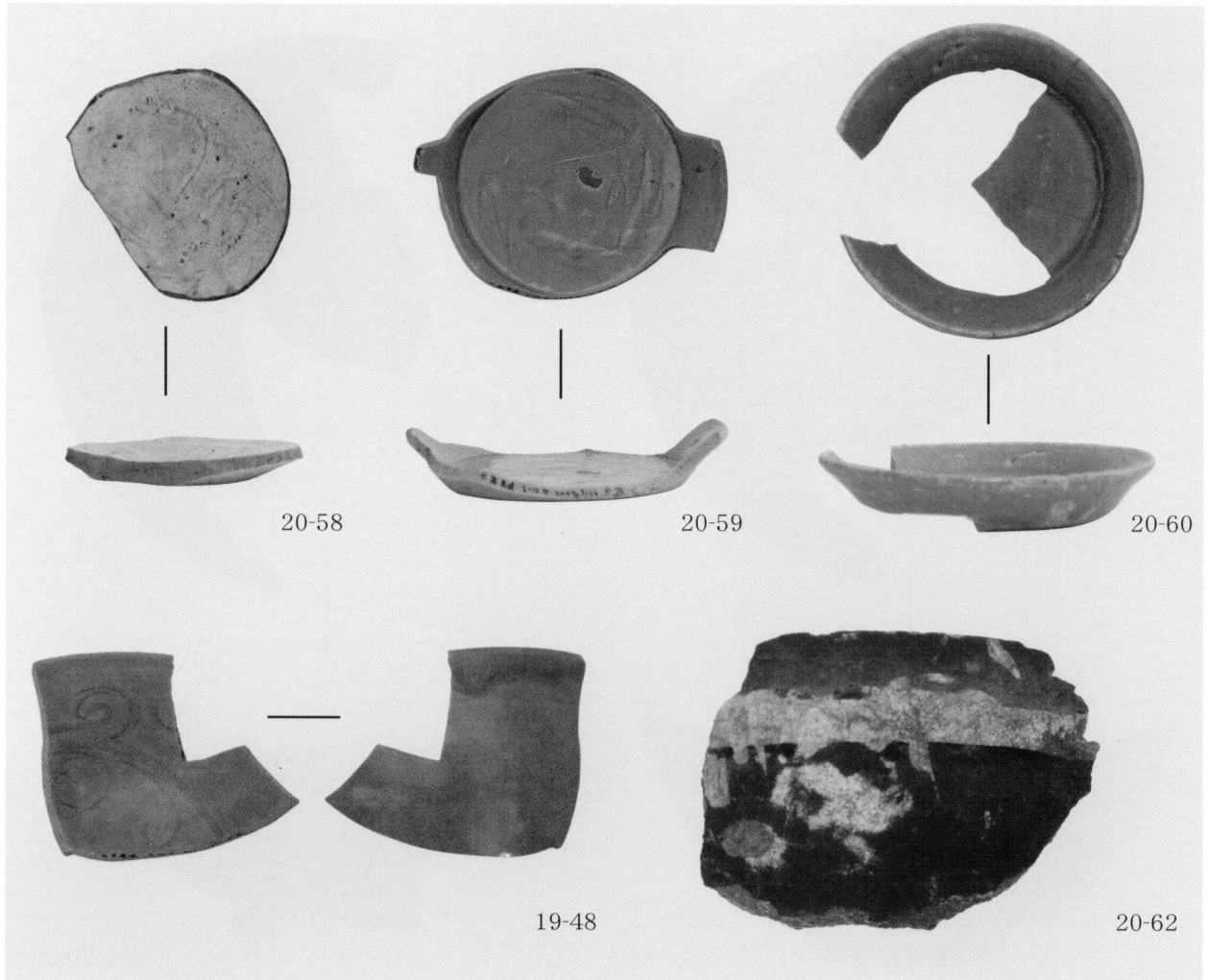
19-54

20-56

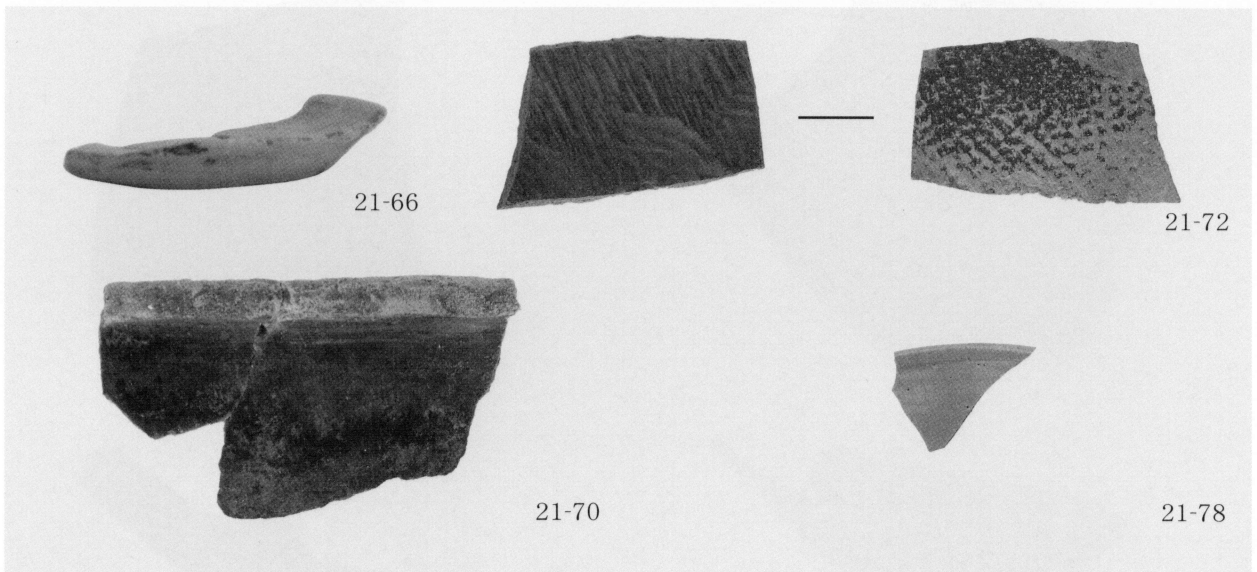
20-57

20-61

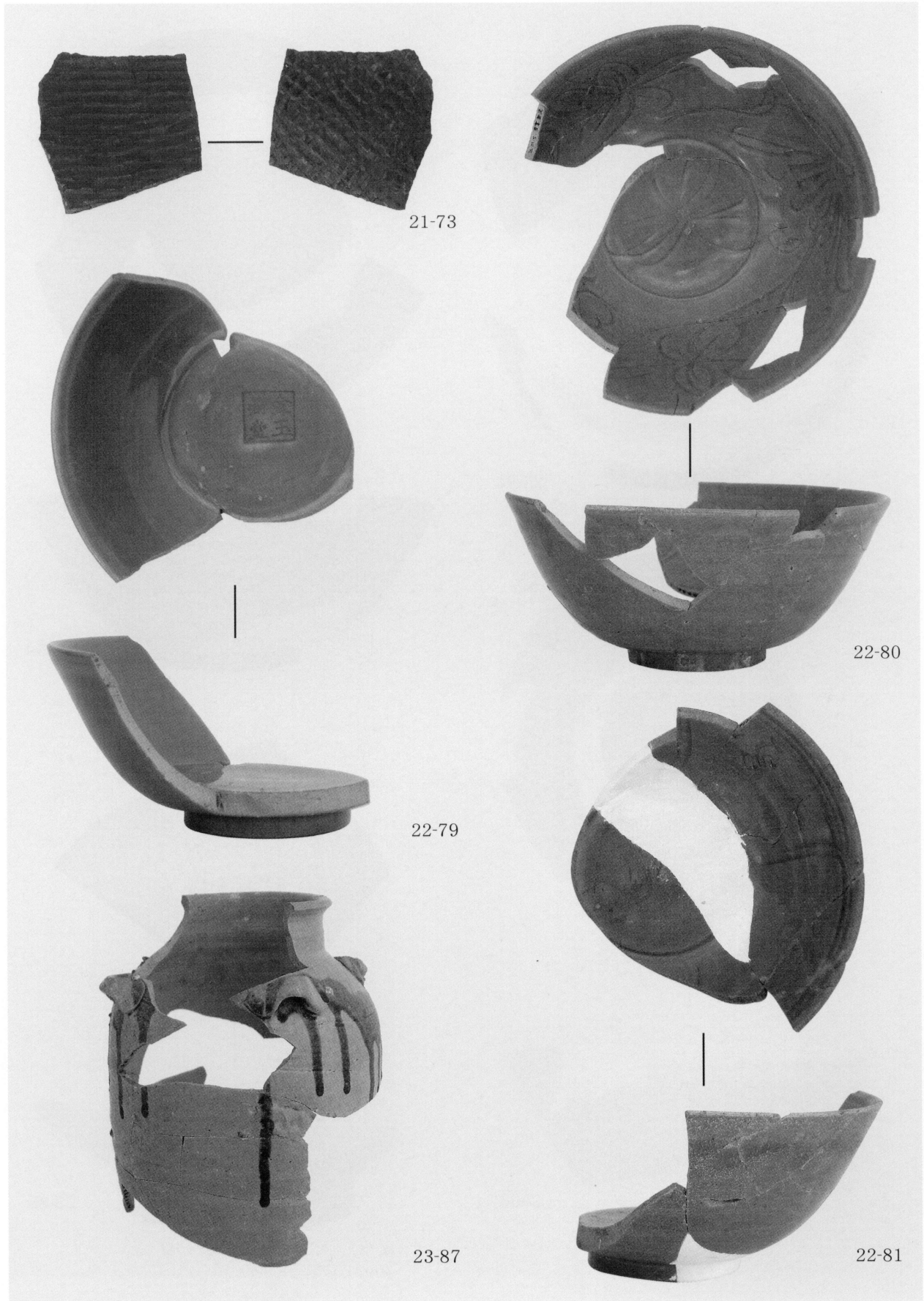
Pla.17



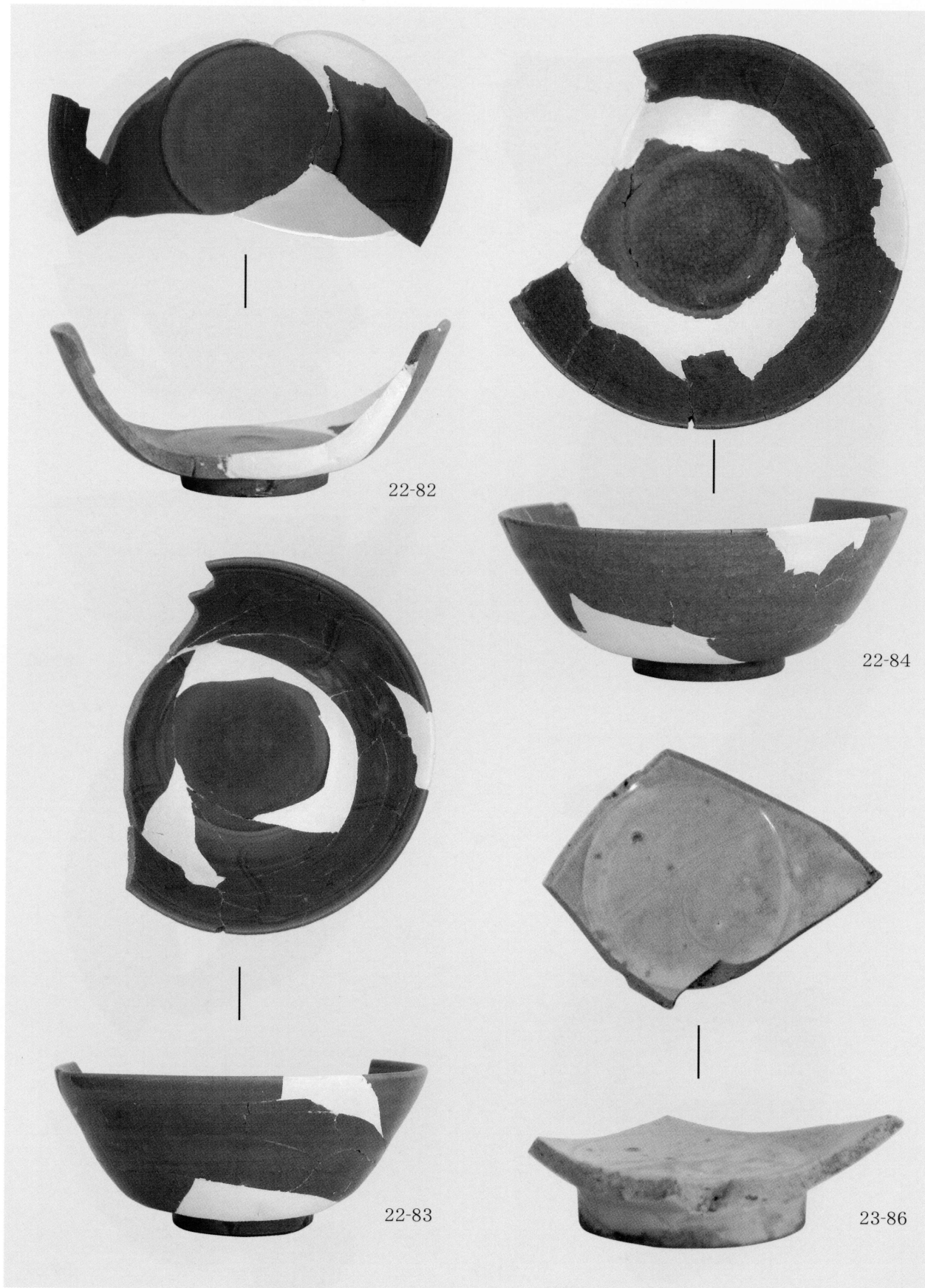
1 1SD10 Ⅲ層出土遺物 (4)

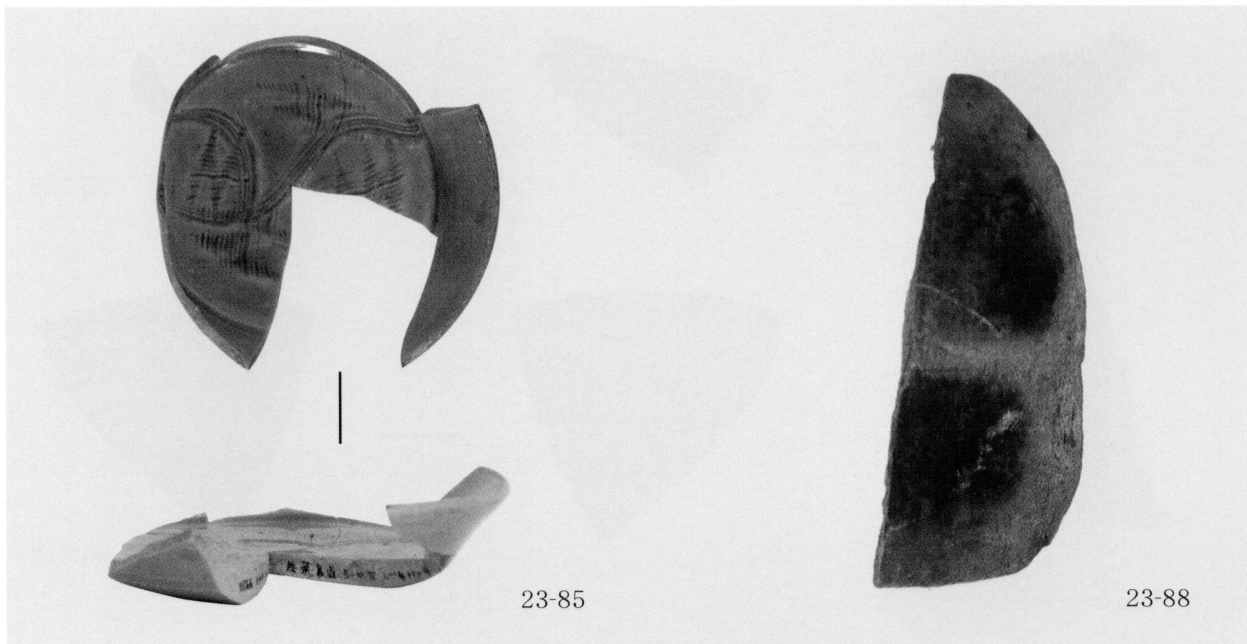


2 1SD10 Ⅳ層出土遺物 (1)

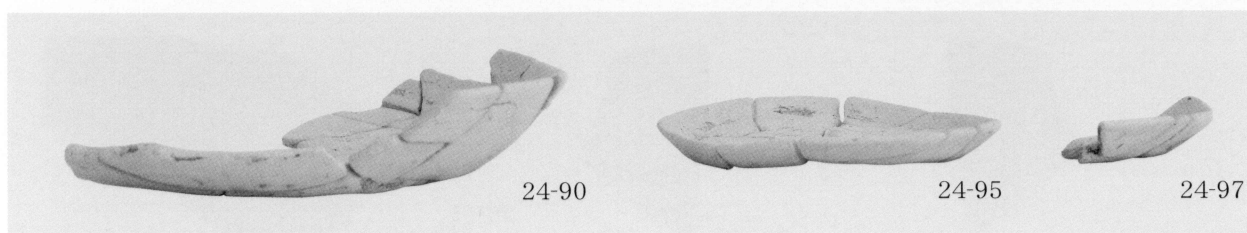


Pla.19

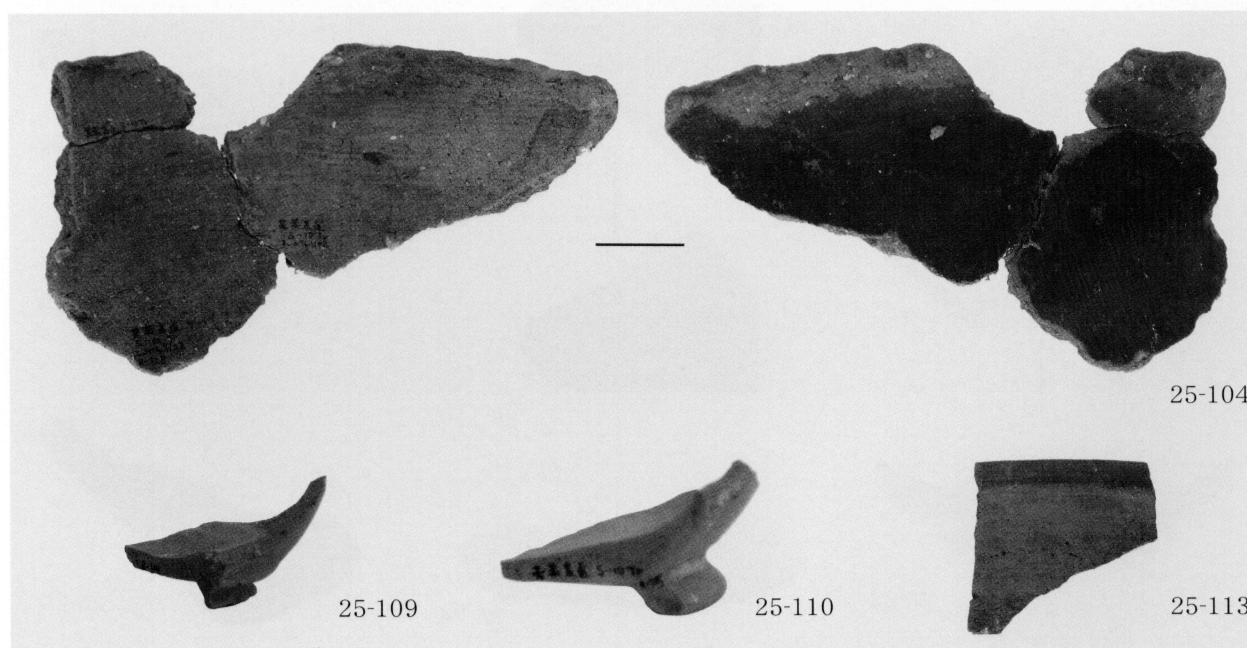




1 1SD10 IV層出土遺物 (4)

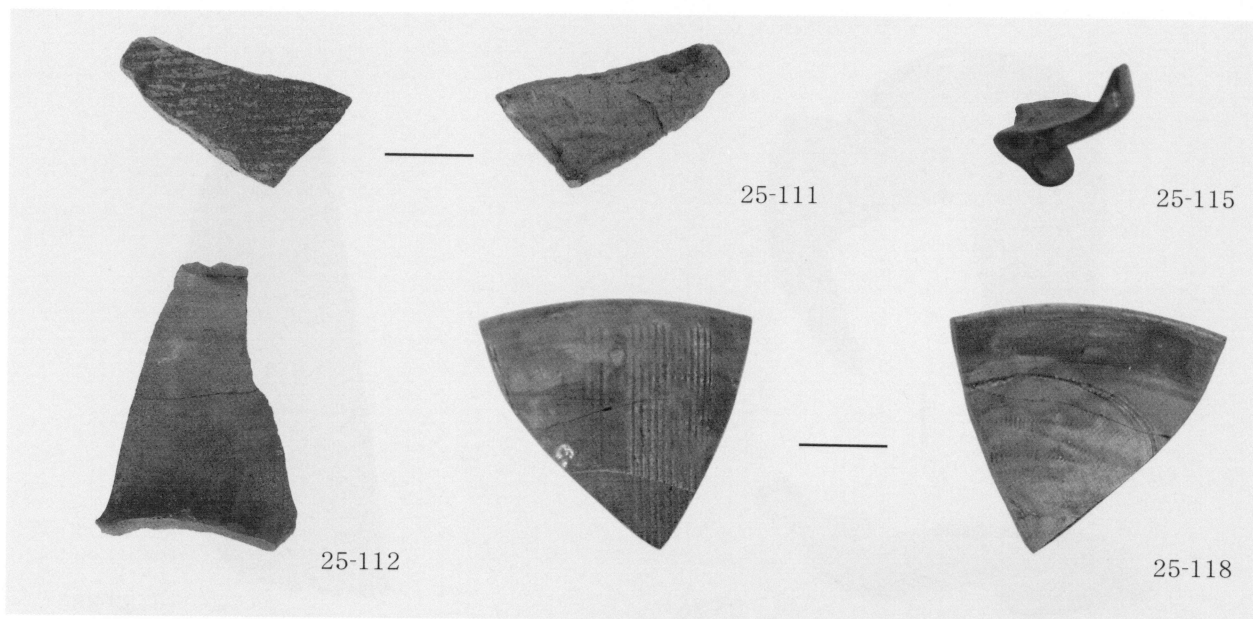


2 1SD10 V層出土遺物

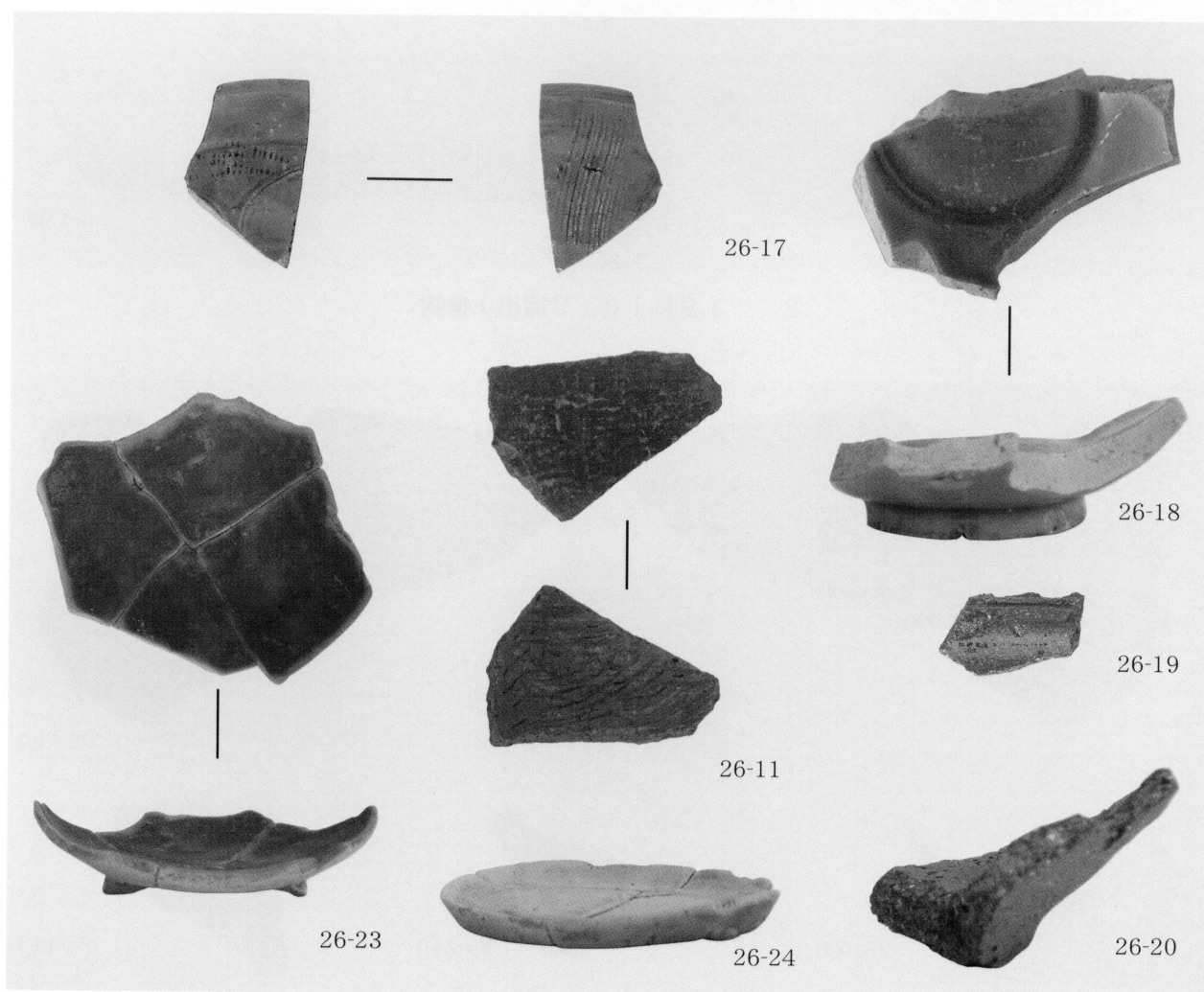


3 1SD10 トレンチ出土遺物 (1)

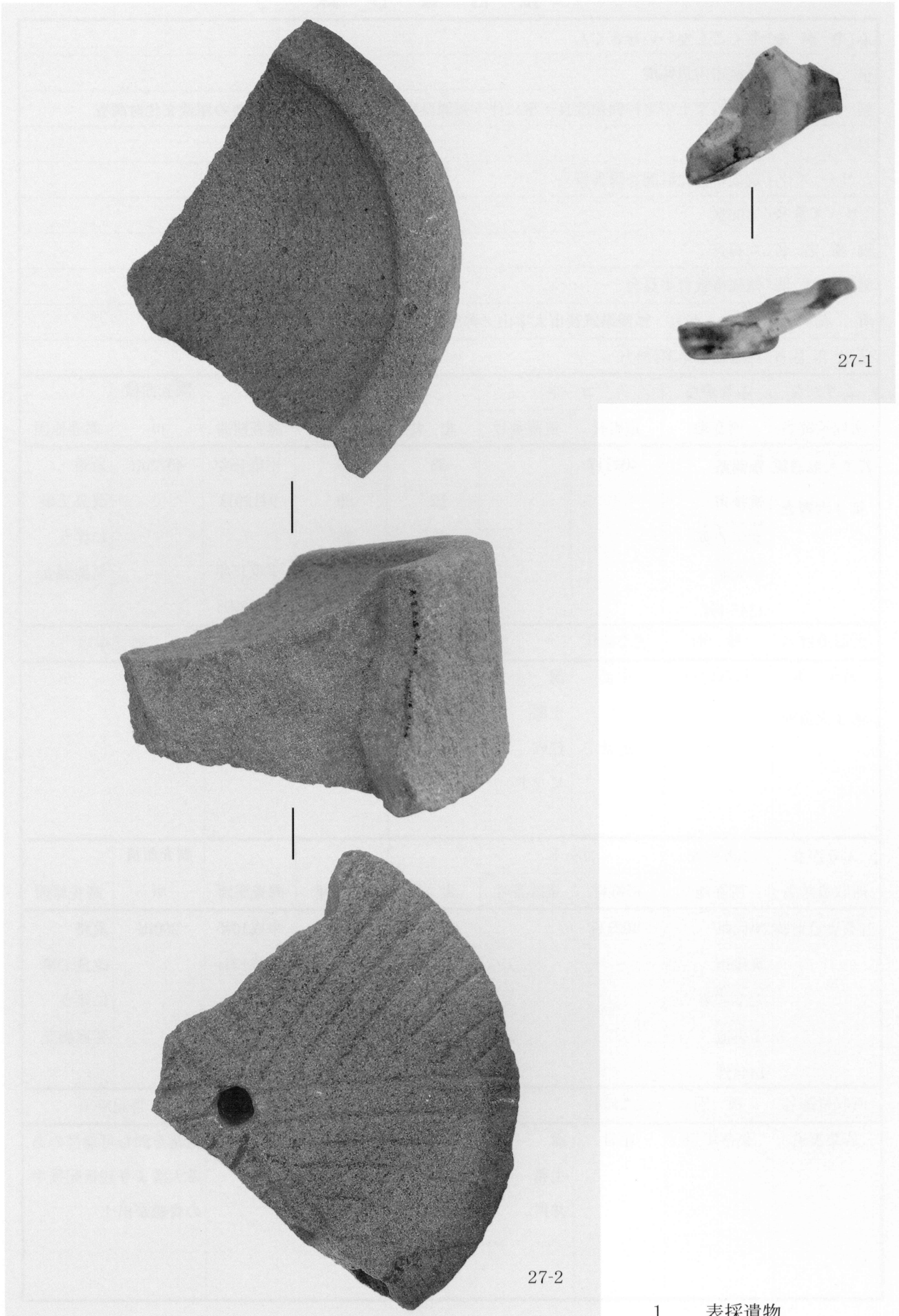
Pla.21



1 1SD10 トレンチ出土遺物(2)



2 1SE01・1SX17・1SK21出土遺物



1 表採遺物

筑後市文化財調査報告書 第67集

筑後市内遺跡群Ⅶ

平成17年3月31日

発行 筑後市教育委員会
福岡県筑後市大字山ノ井898
TEL 0942(52)0170

印刷 大道印刷 株式会社
春日市日の出町6丁目23番地
TEL 092(582)0927